# 研　究　紀　要

## 第　5　号

平成11年度


| | | |
|---|---|---|
| 本州北辺地域における先史アスファルト利用 | 福田　友之 | 1～24 |
| 縄文時代住居跡の出入り口－青森県の事例を中心として－ | 成田　滋彦 | 25～38 |
| 縄文時代の灯明具？－小型土器の用途について－ | 白鳥　文雄 | 39～41 |
| 南郷村畑内遺跡出土のすり石について | 茅野　嘉雄 | 42～44 |
| 東北地方北部の青木畑式土器 | 永嶋　豊 | 45～58 |
| 大光寺城跡の歴史景観復元について | 齋藤　正 | 59～66 |



2000

青森県埋蔵文化財調査センター

# 本州北辺地域における先史アスファルト利用

福 田 友 之

## 1．はじめに

東日本の縄文遺跡から出土する石器や土器・土偶などに、しばしば黒色の付着物が確認される。これらの大半は、一般的に天然アスファルト(以下、アスファルトとする)とみられるもの[注1]で、石鏃・石槍などの着柄、土器・土偶の修理等の際の接着剤として用いられたものである。

アスファルトは、原油に含まれる揮発成分が失われた結果、あとに残った不揮発製の物質である。わが国では、日本海側の秋田県から新潟県にいたる油田地帯に産出するが、縄文人による利用が確認されているのは、秋田県昭和町の槻木地域(豊川油田)のみである。アスファルトは、このように産地がある程度限られているため、従来から縄文人の交流・交易の問題を扱う場合には、糸魚川(いとい がわ)産ヒスイとともに必ず引合いに出される資料でもあった。しかし、アスファルト付着遺物はヒスイとは異なって、日用品としてあまり目立たない存在であるためか、研究者からはほとんど注目されず、青森県域に限ってもごく最近までは縄文時代の利用状況が把握されていなかったのが実状である。

アスファルト付着遺物が青森県域から多数出土しているという認識は、以前からもっており、昨年それらの資料集成を行なった[注4]が、短期間の資料収集であったため遺漏が多く、その後の調査によって、さらに多数の資料が追加される状況となった。

このことから、本稿ではあらためて本州北辺地域に位置する青森県域出土のアスファルト資料の集成を行なうこととし、あわせて関連する若干の問題についてふれることとしたい。

## 2．青森県域のアスファルト付着遺物研究略史

わが国のアスファルト付着遺物について、最初に言及したのは地質学者の佐藤傳蔵である。佐藤は明治30年に「本邦石器時代の膠漆的遺物に就て」と題する論考を『東京人類學会雑誌』に発表し、とくに発見例が多い本県域の三内(青森市)出土の石鏃、亀ヶ岡(木造町)出土の石鏃・石匙・土偶破片・土器、百沢(岩木町)出土の石鏃、花巻村(現黒石市)出土の石鏃、湯口村(現相馬村)出土の石鏃等に黒い付着物があることを図示し、これらがおもに東北地方から出土することを指摘した。また、その付着物については、化学分析をしていない段階ではあるが、一種の水炭(炭水)化合物(Hydro carbon)であり、膠・漆のように現在は凝固しているが、熱すれば溶け、さらに強く熱すれば黒烟をあげて燃えるものであるとし、さらに土器内の塊状物や土器内面の付着物から、土器がそれらの物質を製造・貯蔵するための容器であるとする考え方を示した[注5]。この付着物質については、この報文に接した佐藤初太郎が、翌年同誌に「石器土器ニ附着スル膠漆様遺物ニ就イテノ愚見」を発表し、これらが秋田県の特産物である土瀝青(すなわち、アスファルトAsphalt)が付着したものであるとし[注6]、これらの付着物に対する以後の基本的な見方・考え方の方向性を示した。

その後、本県域出土のアスファルト付着遺物については、昭和46年に江坂輝彌氏(文献177)が、昭和57年には安孫子昭二[注7]氏が、全国的な視野からわが国のアスファルト利用について述べた際にふれ、江坂氏は本県域の出土遺跡を9ヶ所、安孫子氏は24ヶ所をあげている。この後、出土遺跡はさらに増え、平成11年に筆者は約100ヶ所になることを指摘した[注4]。また、このほかにアスファルトによる石鏃の着柄方法については、昭和45年に寺田徳穂氏(文献172)、平成7年に白鳥文雄氏(文献49)らがふれ

たものがある。また、昭和34年には亀ヶ岡遺跡出土の籃胎漆器の分析結果(文献161)が発表され、昭和61年には八戸高等専門学校の故小山陽造氏による八戸市丹後谷地(文献105)、同62年にはむつ市大湊近川遺跡(文献29)などのアスファルト分析結果が紹介され、現在にいたっている。

## 3．青森県域のアスファルト利用状況

### (1) アスファルトの利用

現在、青森県域の縄文・弥生時代の141遺跡から、アスファルト付着遺物が発見されている。石器類が圧倒的に多いが、なかでも石鏃に付着する例がもっとも多く、次いで石匙・石錐(石材の大半は珪質頁岩)などに付着する例がある。石鏃では茎部付着例が大半で、着柄に用いられている。また、石匙ではつまみ部への付着例が多く、紐類の固着に用いられたとみられる。ただし、本県域では秋田・岩手[注8][注9]両県域で出土例がある石錘の付着例は未発見である。土器ではひび割れや注口破損部の補修などに用いられ、土製品では土偶破損部の接着・修復に用いられている。また、骨角器では刺突具の着柄などにも用いられている。まれに、土偶の眼・口を表現する材料として用いられた例もある。また、これらの使用例とは別に、アスファルトの溶融・貯蔵容器として用いられた土器もある。また、弥生時代では石銛茎部の着糸に用いられた例もある。

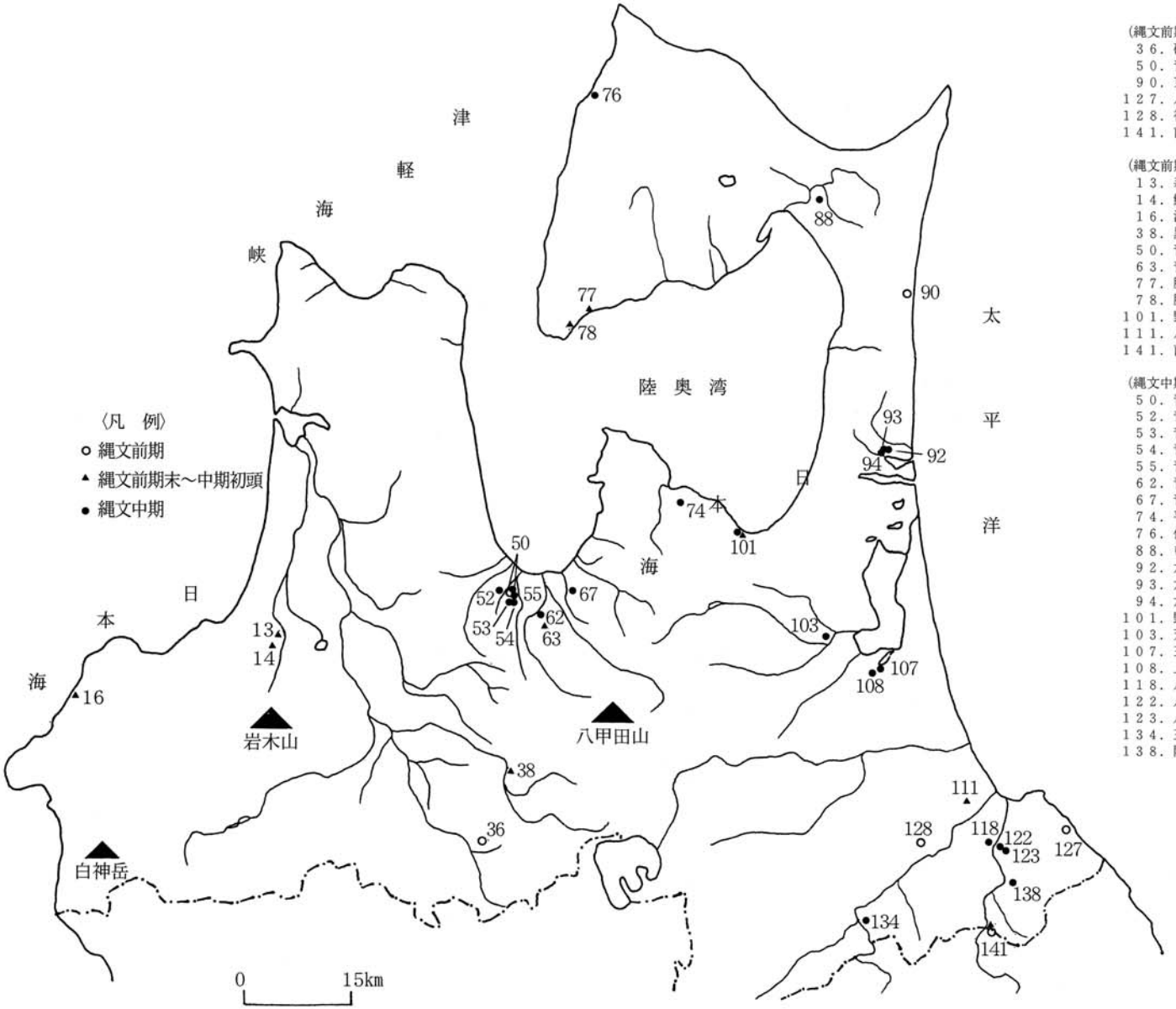
ちなみに、天然アスファルトは、産出地の秋田県槻木地区では幕末に油煙墨製造用として用いられたが、明治に入って固形アスファルトの精製方法が開発された。固形アスファルトは、耐久性・堅牢性等にすぐれており、道路建築用としてさかんに採掘された。また、民家では土間の湿気予防としても用いられた[注10]。アスファルトの採掘はすべて人力による露天掘りによって採掘され、明治30年代中頃以降にピークを迎えたが、明治末からの石油開発以降急速に衰退した。

### (2) アスファルト利用の時期的推移

本県域出土のアスファルト付着の石器では、縄文前期初頭(早稲田6類ほか)に遡る可能性のある例として八戸市沢堀込遺跡の石鏃、東通村前坂下(13)遺跡の石匙があるが、各1点ときわめて少ない。前期例では、ほかに8遺跡に11点の石鏃付着例があるが、中葉(円筒下層b式)の青森市三内丸山遺跡例以外は、大半が前期末(円筒下層d式)のものである。これらのほか、前期末～中期初頭(円筒上層a式)例では、9遺跡に18点以上の有茎石鏃付着例があるが、数量的には少ない。しかし、中期中葉・後半例では急増し、以後晩期までの付着例は100遺跡以上となる。以下、それらを時代順に述べる。

中期中葉以降の中期出土例として22遺跡ある。アスファルト付着率がたかいのは、六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡の捨て場1例(円筒上層c～弥栄平式)で、石鏃165点のうち30点(18.2%)、また、同富ノ沢(1)遺跡例(円筒上層d～最花式)で、石鏃72点のうち19点(26.4%)に付着する。また、八戸市西長根遺跡例(大木8b式頃)では、石鏃・尖頭器・石錐計56点のうち11点(19.6%)に付着している。また、むつ市最花貝塚例では、中期末の骨角器にも付着している。従来、中期のアスファルト塊は未発見であったが、昨年6月に青森市三内丸山(6)遺跡の中期中葉(円筒上層d・e式)の住居跡床面から長径20cm、厚さ3～5cmほどの楕円状塊として出土した。この住居跡は、アスファルト関連の作業場とみられるもので、本県域のアスファルト利用は、この頃に一般化したと考えられる。

アスファルト使用は縄文後期にも引き継がれ、後期の出土例としては38遺跡あるが、中期～後期のものを含めると60遺跡となる。後期前葉には石鏃への付着例が多数ある。付着率がたかいのは青森市小牧野遺跡例(十腰内Ⅰ式)で、82点のうち17点(20.7%)、金木町妻の神(1)遺跡例(十腰内Ⅰ式)では107点のうち17点(15.94%)に付着する。また、八戸市丹後谷地遺跡の土偶にはこの時期のアスファルト補修例もある。また、この時期のアスファルト塊は八戸市鶉窪・沢堀込遺跡など7遺跡で土器内か




（縄文前期）

| | | |
|---|---|---|
| ３６． | 碇ヶ関村四戸橋 | （中葉～末） |
| ５０． | 青森市三内丸山 | （中葉） |
| ９０． | 東通村前坂下（13） | （初頭か） |
| １２７． | 八戸市沢堀込 | （初頭） |
| １２８． | 福地村館野 | （中葉～末） |
| １４１． | 南郷村畑内 | （後半） |

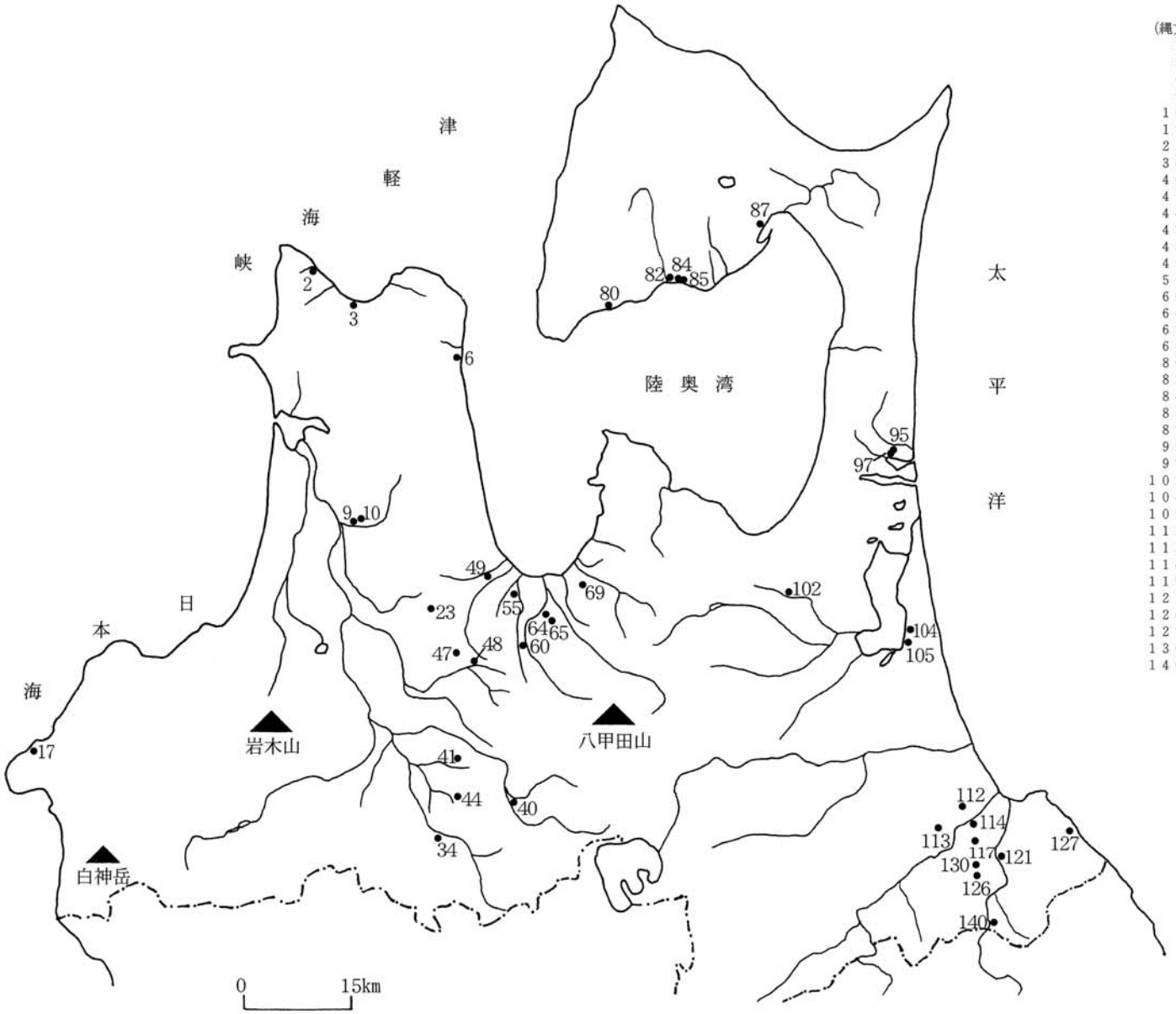
（縄文前期末～中期初頭）

| | | |
|---|---|---|
| １３． | 森田村石神 | （前期末） |
| １４． | 鰺ヶ沢町鳴沢 | （前期末） |
| １６． | 深浦町津山 | （前期末・中期初頭） |
| ３８． | 黒石市坂留（２） | （前期末） |
| ５０． | 青森市三内丸山 | （中期初頭） |
| ６３． | 青森市桜峯（１）Ｃ | （前期末～中期初頭） |
| ７７． | 脇野沢村稲平 | （前期末～中期初頭） |
| ７８． | 脇野沢村瀬野 | （前期末～中期初頭） |
| １０１． | 野辺地町槻ノ木（１） | （中期初頭） |
| １１１． | 八戸市笹ノ沢（３） | （中期初頭） |
| １４１． | 南郷村畑内 | （中期初頭） |

（縄文中期）

| | | |
|---|---|---|
| ５０． | 青森市三内丸山 | （中～後葉） |
| ５２． | 青森市三内沢部 | （後半） |
| ５３． | 青森市三内丸山（６） | （中葉） |
| ５４． | 青森市安田（２） | |
| ５５． | 青森市近野 | （後半） |
| ６２． | 青森市横内（２） | |
| ６７． | 青森市蛍沢 | （中葉） |
| ７４． | 平内町一本松 | （中期か） |
| ７６． | 佐井村八幡堂 | |
| ８８． | むつ市最花 | （後葉） |
| ９２． | 六ヶ所村富ノ沢（１） | （中～後葉） |
| ９３． | 六ヶ所村富ノ沢（２） | （中葉～末） |
| ９４． | 六ヶ所村富ノ沢（３） | （前半） |
| １０１． | 野辺地町槻ノ木（１） | （末） |
| １０３． | 天間林村二ツ森 | （中葉～後半） |
| １０７． | 三沢市猫又（１） | （末） |
| １０８． | 上北町古屋敷 | |
| １１８． | 八戸市石手洗 | （中葉） |
| １２２． | 八戸市西長根 | （中～後葉） |
| １２３． | 八戸市松ヶ崎 | （中～後葉） |
| １３４． | 三戸町泉山 | （中葉） |
| １３８． | 階上町野場（５） | （末） |

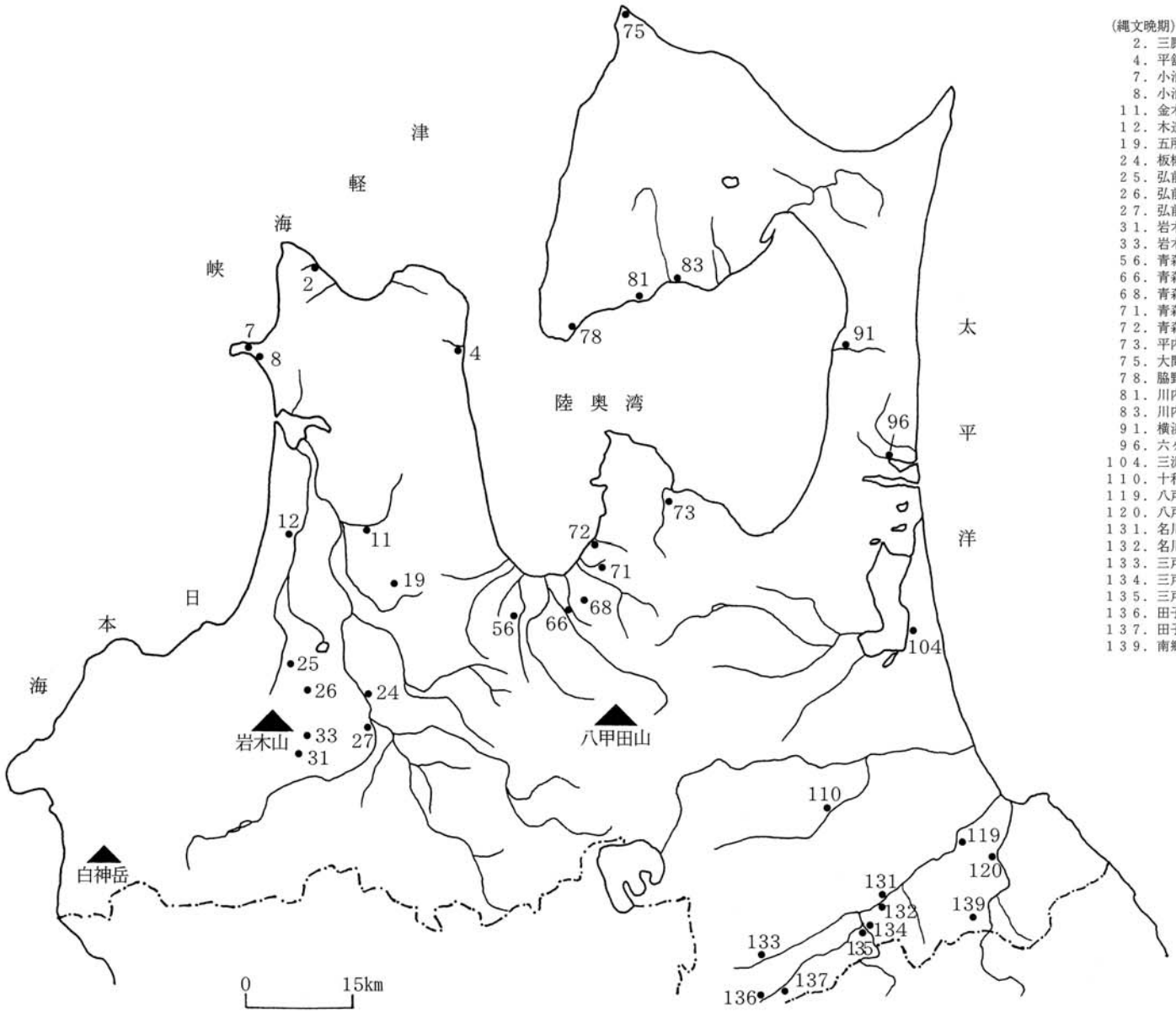
図１　青森県域のアスファルト遺物出土遺跡①（縄文前～中期）




（縄文後期）

| | | |
|---|---|---|
| ２． | 三厩村字鉄 | （初頭） |
| ３． | 今別町二ツ石 | |
| ６． | 平舘村尻高（４） | （後葉） |
| ９． | 金木町神明町 | （前・中葉） |
| １０． | 金木町妻の神（１） | （前葉） |
| １７． | 深浦町日和見山 | （後葉） |
| ２３． | 五所川原市隈無（６） | （中葉） |
| ３４． | 大鰐町上牡丹森 | （末） |
| ４０． | 黒石市一ノ渡 | （前葉） |
| ４１． | 尾上町李平Ⅱ号 | （前葉） |
| ４４． | 平賀町堀合Ⅰ号 | （前葉） |
| ４７． | 浪岡町野尻（２） | （前半） |
| ４８． | 浪岡町平野 | |
| ４９． | 青森市宮本（２） | （前葉） |
| ５５． | 青森市近野 | （前葉） |
| ６０． | 青森市小牧野 | （前葉） |
| ６４． | 青森市四ツ石 | |
| ６５． | 青森市田面木野 | （末） |
| ６９． | 青森市稲山 | （後期か） |
| ８０． | 脇野沢村外崎沢（１） | |
| ８２． | 川内町鞍越 | （中葉） |
| ８４． | 川内町熊ヶ平 | （後期か） |
| ８５． | 川内町高野川（３） | |
| ８７． | むつ市大湊近川 | （後葉） |
| ９５． | 六ヶ所村大石平 | （前葉） |
| ９７． | 六ヶ所村上尾駮（２） | （前葉） |
| １０２． | 東北町大平（４） | |
| １０４． | 三沢市野口 | （後葉） |
| １０５． | 三沢市小田内沼（１） | （前葉） |
| １１２． | 八戸市毛合清水（１）・（２） | （前葉） |
| １１３． | 八戸市咽平 | （前葉か） |
| １１４． | 八戸市鶉窪 | （初頭） |
| １１７． | 八戸市丹後谷地 | （前・中・後葉） |
| １２１． | 八戸市風張（１） | （後葉） |
| １２６． | 八戸市鴨平（１） | （前葉） |
| １２７． | 八戸市沢堀込 | （初頭） |
| １３０． | 福地村・八戸市昼巻沢 | （前葉） |
| １４０． | 南郷村筋久辺 | （前葉） |

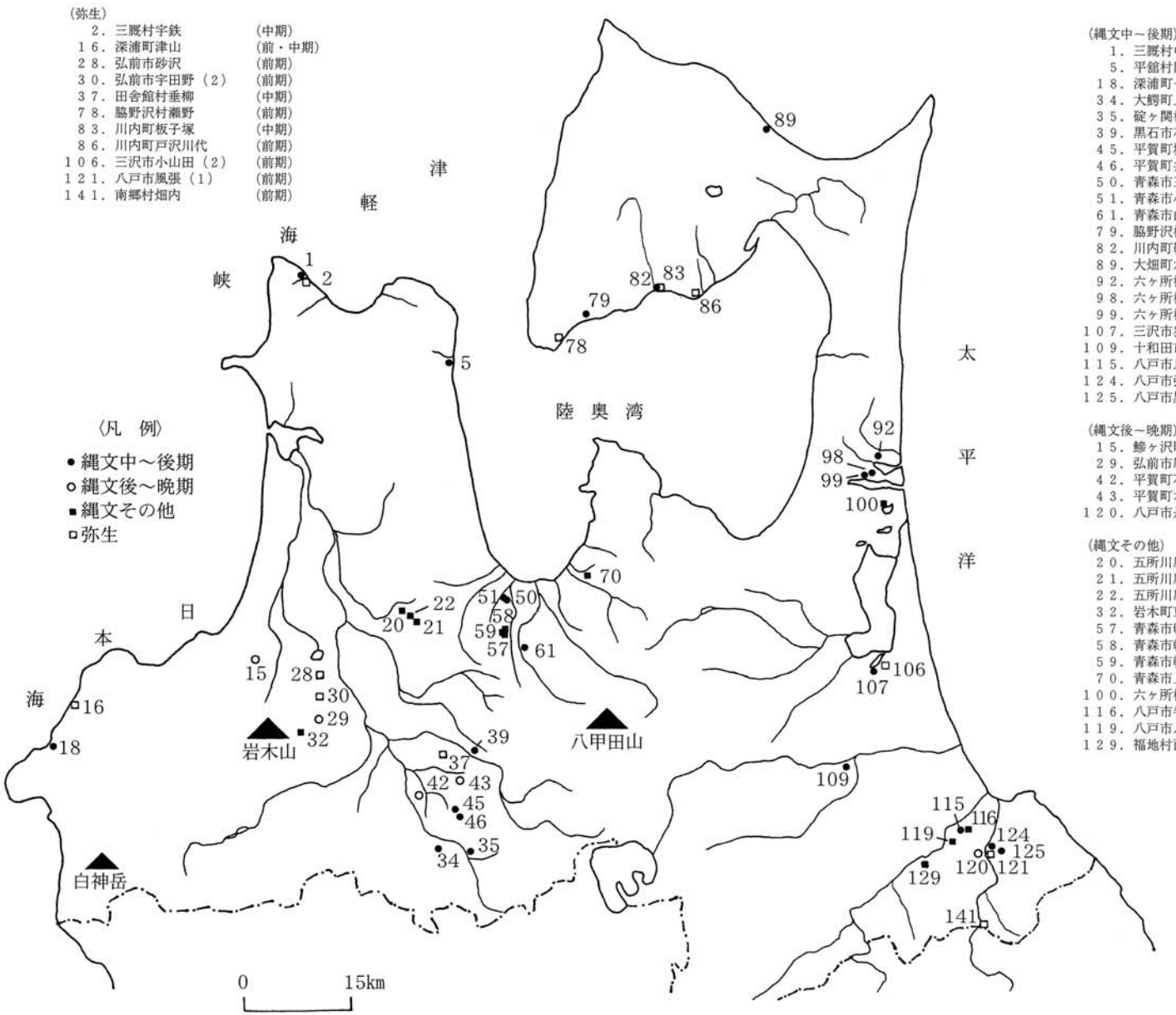
図２　青森県域のアスファルト遺物出土遺跡②（縄文後期）




（縄文晩期）

| | | |
|---|---|---|
| ２． | 三厩村字鉄 | （後半） |
| ４． | 平舘村今津 | （中葉） |
| ７． | 小泊村大澗 | （前半） |
| ８． | 小泊村縄文沼 | |
| １１． | 金木町千苅（１） | （後半） |
| １２． | 木造町亀ヶ岡 | |
| １９． | 五所川原市観音林 | （後葉） |
| ２４． | 板柳町土井１号 | （中葉） |
| ２５． | 弘前市十腰内（１） | （前葉） |
| ２６． | 弘前市大森勝山 | （前半） |
| ２７． | 弘前市野脇 | |
| ３１． | 岩木町小森山東部 | （初頭） |
| ３３． | 岩木町薬師Ｉ号 | |
| ５６． | 青森市細越 | （中～後葉） |
| ６６． | 青森市玉清水（１） | |
| ６８． | 青森市沢山（１） | （後葉） |
| ７１． | 青森市長森 | （前半） |
| ７２． | 青森市大浦貝塚 | （中葉） |
| ７３． | 平内町槻の木 | （前半） |
| ７５． | 大間町ドウマンチャ | |
| ７８． | 脇野沢村瀬野 | |
| ８１． | 川内町不備無 | |
| ８３． | 川内町板子塚 | |
| ９１． | 横浜町桧木 | （前半） |
| ９６． | 六ヶ所村上尾駮（１）Ｃ | |
| １０４． | 三沢市野口 | |
| １１０． | 十和田市明戸 | |
| １１９． | 八戸市八幡 | （前葉） |
| １２０． | 八戸市是川中居 | （前半） |
| １３１． | 名川町剣吉荒町 | （末） |
| １３２． | 名川町虚空蔵 | |
| １３３． | 三戸町杉沢 | （前半） |
| １３４． | 三戸町泉山 | （初頭・中葉） |
| １３５． | 三戸町松原（１） | |
| １３６． | 田子町石亀 | （前半） |
| １３７． | 田子町野面平 | （前・中葉） |
| １３９． | 南郷村右ェ門次郎窟 | |

図３　青森県域のアスファルト遺物出土遺跡③（縄文晩期）




（弥生）

| | | |
|---|---|---|
| 2． | 三厩村宇鉄 | （中期） |
| 16． | 深浦町津山 | （前・中期） |
| 28． | 弘前市砂沢 | （前期） |
| 30． | 弘前市宇田野（2） | （前期） |
| 37． | 田舎館村垂柳 | （中期） |
| 78． | 脇野沢村瀬野 | （前期） |
| 83． | 川内町板子塚 | （中期） |
| 86． | 川内町戸沢川代 | （前期） |
| 106． | 三沢市小山田（2） | （前期） |
| 121． | 八戸市風張（1） | （前期） |
| 141． | 南郷村畑内 | （前期） |

（縄文中～後期）

| | | |
|---|---|---|
| 1． | 三厩村中ノ平 | （中～後期） |
| 5． | 平舘村間沢 | （中期末～後期初頭） |
| 18． | 深浦町一本松 | （中期後半～後期初頭） |
| 34． | 大鰐町上牡丹森 | （中～後期） |
| 35． | 碇ヶ関村永野 | （中～後期か） |
| 39． | 黒石市花巻 | （中期後半～後期初頭主体） |
| 45． | 平賀町堀合Ⅱ号 | （中期中葉～後期初頭） |
| 46． | 平賀町井沢 | （中期末葉～後期初頭） |
| 50． | 青森市三内丸山 | （中期～後期初頭） |
| 51． | 青森市小三内 | （中期末葉か後期初頭） |
| 61． | 青森市山吹（1） | （中期後半～後期初頭） |
| 79． | 脇野沢村家の上 | （中期後半～後期前葉） |
| 82． | 川内町鞍越 | （中期末葉～後期） |
| 89． | 大畑町水木沢（1） | （中～後期） |
| 92． | 六ヶ所村富ノ沢（1） | （中～後期） |
| 98． | 六ヶ所村弥栄平（1） | （中期末葉～後期初頭） |
| 99． | 六ヶ所村弥栄平（2） | （中期末葉～後期初頭） |
| 107． | 三沢市猫又（1） | （中～後期） |
| 109． | 十和田市寺山（3） | （中～後期） |
| 115． | 八戸市鳥木沢 | （中～後期） |
| 124． | 八戸市弥次郎窪 | （中期後半～後期前半） |
| 125． | 八戸市黒坂 | （中期末～後期初頭） |

（縄文後～晩期）

| | | |
|---|---|---|
| 15． | 鰺ヶ沢町大曲Ⅲ号 | （後～晩期） |
| 29． | 弘前市尾上山付近 | （後～晩期） |
| 42． | 平賀町石郷 | （後期末～晩期前葉） |
| 43． | 平賀町木戸口 | （後～晩期） |
| 120． | 八戸市是川中居 | （後期末～晩期） |

（縄文その他）

| | | |
|---|---|---|
| 20． | 五所川原市実吉 | （縄文） |
| 21． | 五所川原市隈無（1） | （縄文中～晩期） |
| 22． | 五所川原市隈無（4） | （縄文） |
| 32． | 岩木町東岩木山（5） | （縄文後・晩期～弥生） |
| 57． | 青森市朝日山（1） | （縄文） |
| 58． | 青森市朝日山（2） | （縄文） |
| 59． | 青森市朝日山（3） | （縄文） |
| 70． | 青森市上野尻 | （縄文中～晩期） |
| 100． | 六ヶ所村幸畑（3） | （縄文） |
| 116． | 八戸市牛ヶ沢（3） | （縄文中期末～晩期、晩期～弥生） |
| 119． | 八戸市八幡 | （縄文晩期～弥生） |
| 129． | 福地村西張（2） | （縄文後期初頭～晩期・弥生） |

図4　青森県域のアスファルト遺物出土遺跡④（縄文中～晩期、弥生）

ら発見されている。後期中葉の付着例は少ないが、後期後葉には、土偶の補修に多用される点が注目される。八戸市風張（１）遺跡（十腰内Ⅳ式）では、32点のうち９点（28.1％）の破片に用いられ、重文指定になった合掌土偶はその好例である。また、注口土器の全盛期に当たるこの時期には、欠損しやすい注口部の接着剤としても多用された。

晩期の出土例としては37遺跡がある。後期～晩期のものを含めると42遺跡となる。利用がより一般化し、各種の遺物多数に付着例がある。石鏃のほか石匙・骨角器などの着柄、土器破損部の補修以外に、前葉には平内町槻の木遺跡例のような岩偶補修、後葉には例外的ではあるが五所川原市観音林遺跡例のように土偶の眼・口を表現する材料としても用いられた。晩期の石鏃で付着率がたかいのは、前半の横浜町桧木遺跡例で36点のうち９点（25.0％）に付着し、石匙も数的に少ないものの５点のうち３点（60.0％）に付着する。また、同時期の十和田市明戸遺跡例では、石鏃161点のうち実に半数近い79点（49.1％）に付着し、中葉の平舘村今津遺跡の密集ブロック例（大洞$C_2$式）では、431点のうち78点（18.1％）に付着する。また、三戸町泉山遺跡例では晩期の土偶破片132点のうち15点（11.4％）に付着する。

アスファルト利用は弥生時代にも引き続き行なわれ、11遺跡の付着例がある。前期は８遺跡あり水田跡が発見された弘前市砂沢遺跡例（砂沢式）では、石鏃267点のうち13点（4.9％）に付着し、深浦町津山遺跡例では土偶の補修にも用いられた。中期は３遺跡あり三厩村宇鉄遺跡例では石鏃21点のうち２点（9.5％）に付着するが、石銛では数的に少ないものの６点のうち４点（66.7％）と高い付着率を示している。さらに、大規模水田が築かれた田舎館村垂柳遺跡例では、石鏃14点のうち４点（28.6％）に付着する。しかし、アスファルト塊の出土は未発見である。本県域のアスファルト利用はこの中期を最後として、以後の状況はまったく不明となる。

なお、アスファルト付着遺物を出土した遺跡の分布については、縄文前期から弥生中期まで図４枚（図１～４）に示したが、とくに時期的な有意の分布変化はみられなかった。各時期とも遺跡数の濃淡はあるものの縄文前期から弥生中期まで、全県的な分布状況を示している。このため、どの地域でアスファルト使用が始まり、どの地域で終わりを迎えたかというような特徴的な点については指摘することはできない。

## ４．青森県域のアスファルト出土遺構

アスファルト付着の遺物のなかには、遺構内から出土したものが多数あり、とくに石鏃付着例は竪穴住居跡から出土した例が多い。しかし、それらの出土状態は廃絶した竪穴住居跡内への廃棄を示すもので、遺構のもつアスファルトに関連した機能あるいは何らかのアスファルト利用方法やアスファルト付着遺物の用途等を窺わせるものではない。

本来のアスファルト利用を窺わせるものとしては、以下の２例がある。竪穴住居跡の出土例である。

・青森市三内丸山（６）遺跡

平成11年に当センターが行なった調査で出土したもので、縄文中期中葉（円筒上層ｄ・ｅ式）の竪穴住居跡の床面から長径20ｃｍ、厚さ３～５ｃｍの楕円形状にまとまって出土している。また、この住居跡のピットからは石器フレイクが多数出土している。

・八戸市丹後谷地遺跡（文献105）

縄文後期後葉（十腰内Ⅳ式）の火災住居とされる第46号竪穴住居跡の西側（入り口部から地床炉を越えて突き当る壁際の）柱穴Ｐ50から、石器フレイク82点のほかに、フレイク６点を付着させた状態でアスファルト塊が１点出土している。

## ５．考察

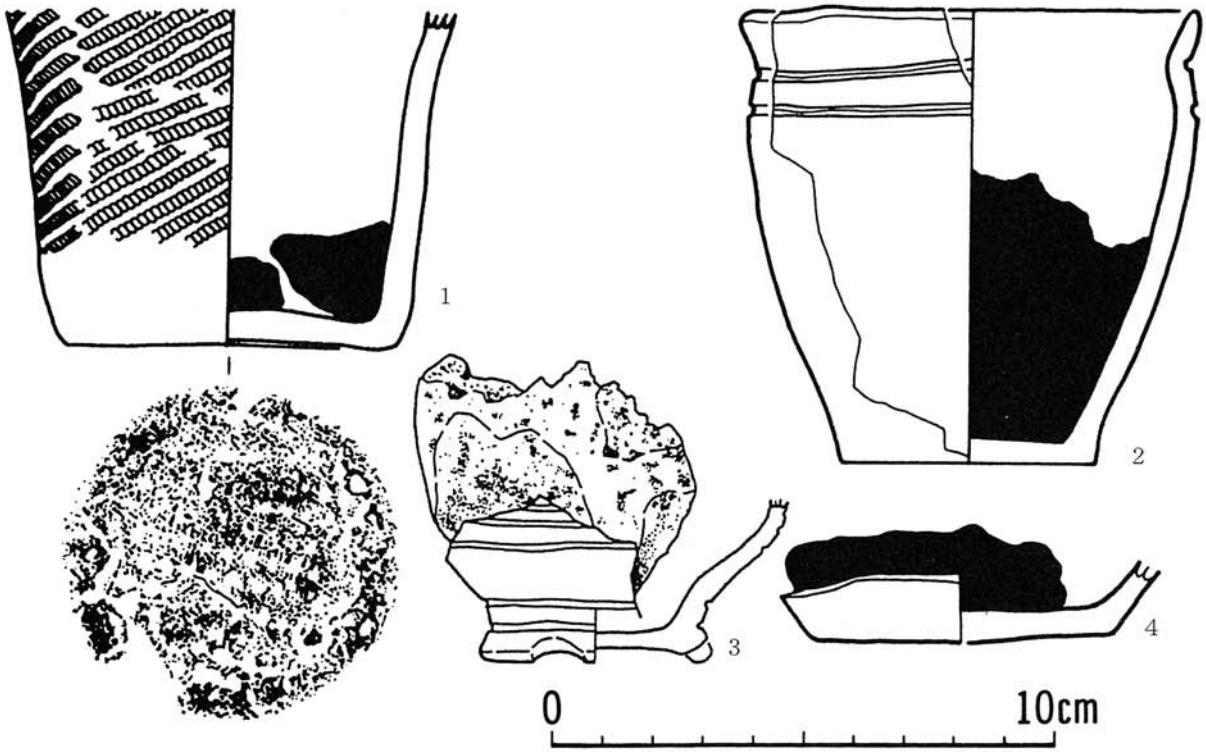



図５　青森県域出土のアスファルト入り土器

以上、青森県域のアスファルト利用について述べたが、これに関連する若干の問題についてふれる。

（１）アスファルト利用の開始と終末

わが国で、石器の着柄に何らかの接着剤が使われた痕跡をとどめるもっとも古い例は、縄文時代では、山形県八幡町八森遺跡の槍先形尖頭器の例で草創期まで遡(注11)るが、これについてはアスファルトかどうか不明である。一般的に、アスファルトの利用は、産出地のある秋田県域では、男鹿市大畑台遺跡例(円筒上層ａ式期。第38号住居跡床面からアスファルト塊が土器に入った状態で出土)を最古として縄文中期初頭以降に利用され(注12)たと一般的に理解されているが、今回の資料調査の結果、青森県域では前期の例が10遺跡にあることが判明した。他県域では、従来から山形県の前期後葉の２遺跡(注７)例があり、その後北海道南部の恵山町日ノ浜砂丘１遺跡でも前期中葉(円筒下層ａ・ｂ式)ともみられる有茎石鏃例があり(注13)、さらに福島県域でも前期初頭に遡る可能性のある例が報告されている(注14)。これらのことから、前期に遡る例はそれ以外の県域にもあるものとみられる。ただし、各遺跡における出土点数がきわめて少ないことから、一般化していたと考えることはできない。まだ、ほんの一部の人々にしか利用されていなかったとみられる。しかも、本県域の例について言えば、この時期の黒色物質の化学分析がまったく行なわれていないため、アスファルト以外の可能性もある。今後、この時期のアスファルト付着遺物については、利用開始時期の問題と関わるものであり、理化学分析が不可欠となろう。

また、アスファルト利用は本県域でも、他県域とほぼ同様に弥生時代中期で終わる。この理由については明確には指摘できないが、何らかの意味でこの頃からその必要性がなくなったことは確かであろう。

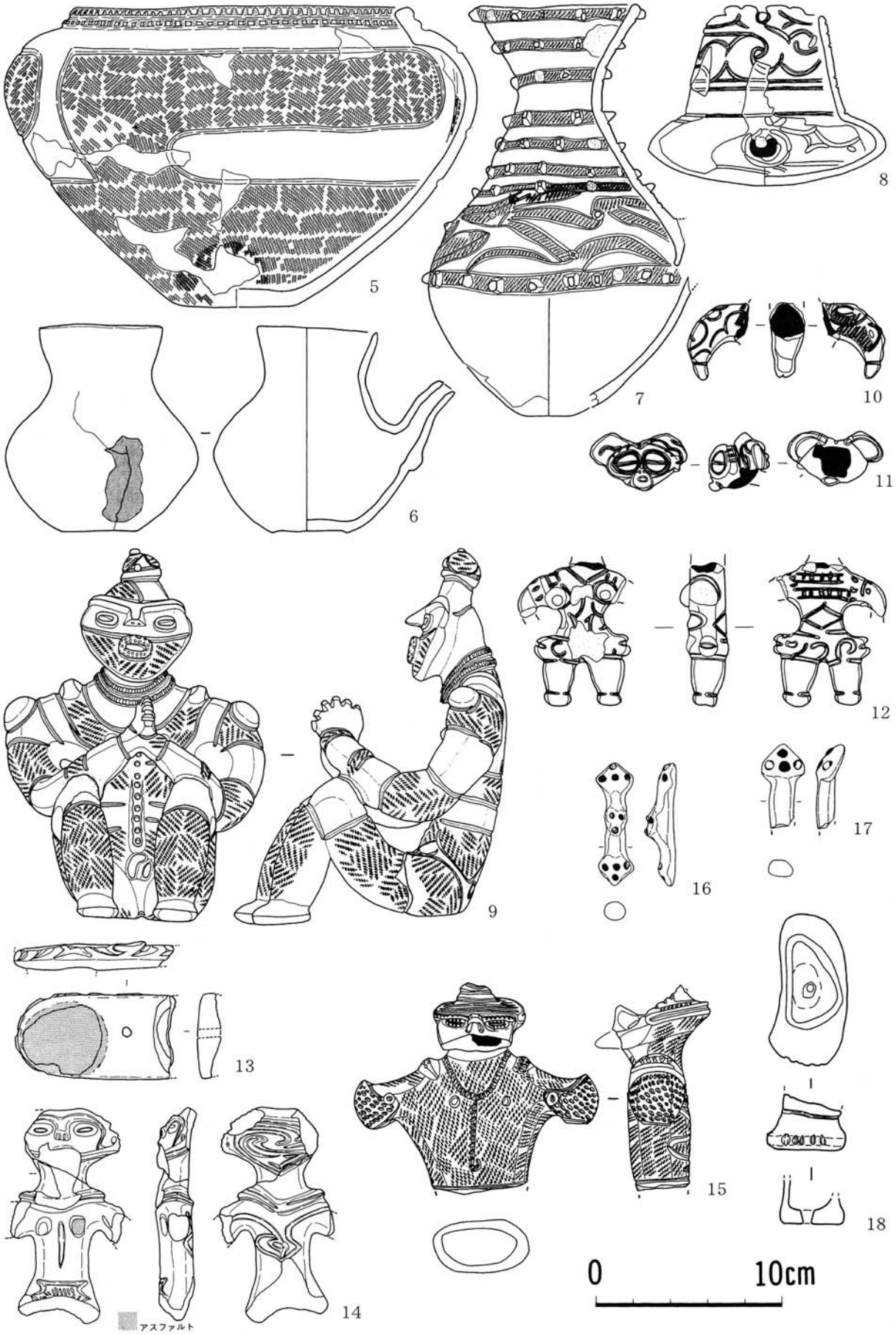



図6　青森県域出土のアスファルト付着土器・土製品

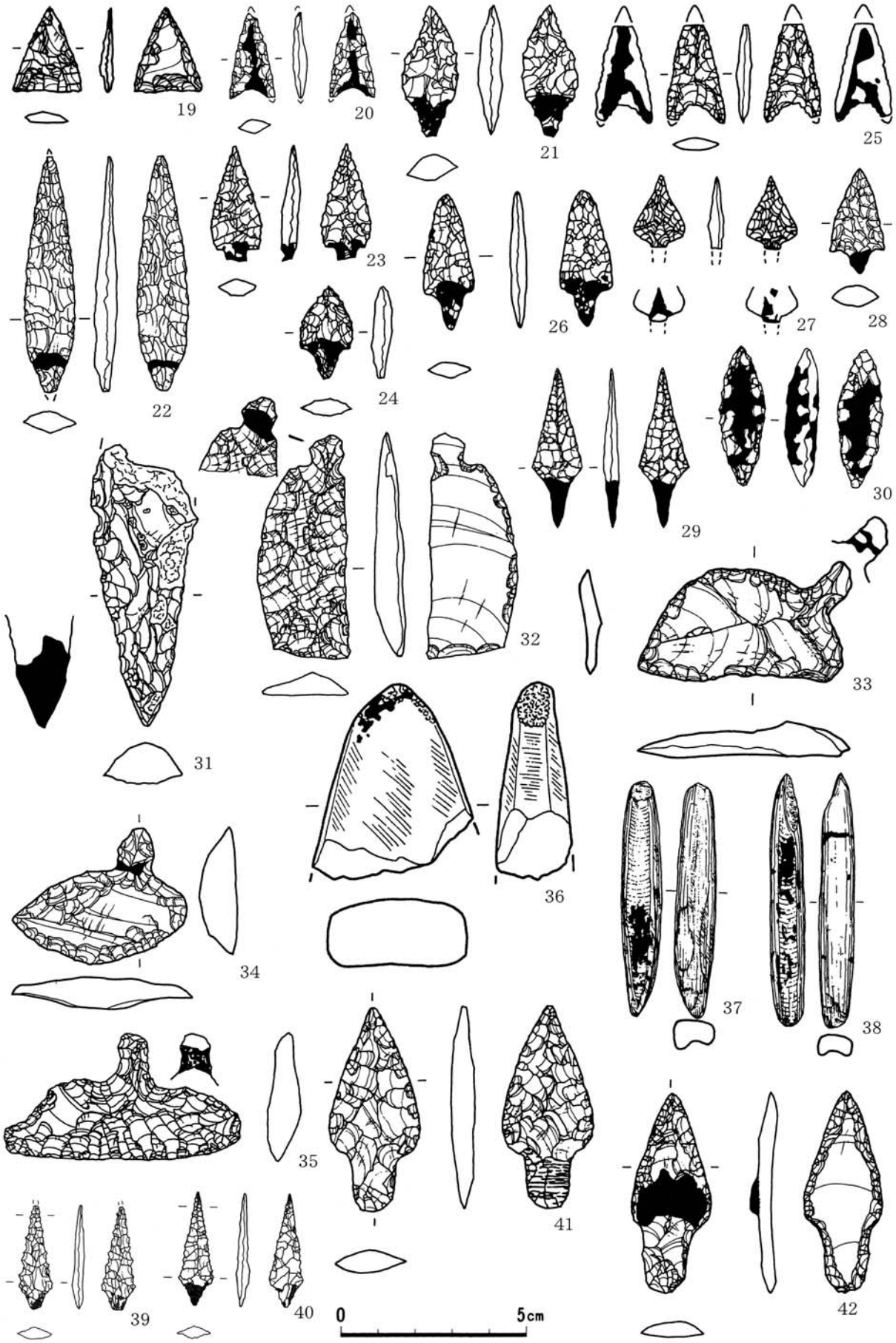



図７　青森県域出土のアスファルト付着石器

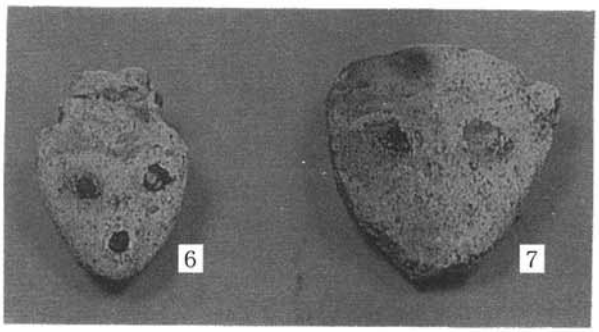
アスファルト入り土器とアスファルト塊（八戸市鶉窪）

アスファルト入り土器（八戸市沢堀込）

フレイクが付着したアスファルト塊（八戸市丹後谷地）

アスファルトの球状塊（尾上町李平Ⅱ号）

アスファルト付着石鏃（青森市三内沢部）




アスファルトで眼と口を表現した土偶（五所川原市観音林）

アスファルト付着石鏃（三厩村宇鉄）

9. アスファルト塊の出土状況（青森市三内丸山(6)）

10. アスファルト産地（秋田県昭和町槻木）

**図8　青森県域出土のアスファルト遺物と秋田県昭和町のアスファルト産地**

（2）アスファルトの利用内容

アスファルト利用の主たる目的は、出土品による限り接着剤としての利用である。しかし、それ以外の利用の問題もある。従来から指摘されていることであるが、ひとつの遺跡でアスファルトが付着する石鏃と付着しない石鏃があるという事例である。また、アスファルト付着の石鏃が多数あるにもかかわらず、アスファルト塊がない例や逆にアスファルト塊があるにもかかわらず、付着遺物があまり多くないといった事例もある。これらのうち前者については、石鏃のアスファルト付着・非付着の問題は、その違いが石鏃の用途に関わるものとすれば、たとえばアスファルトの耐水・防水性を考慮して(漁撈用の骨角器に使用される例は多い)、水中漁撈用としての利用や、あるいは陸上でもより強固な着柄が必要とされる獲物用としての利用も考えられるであろう。さらにまた極論ではあるが、アスファルト付着の石器は、ちかじか使用が予定されているもので、非付着品は当分の間使用が予定されていないものであったのであろうか。また、着柄部の修理方法の一つとしてアスファルトが使用された可能性も考えられよう。後者については、アスファルトの別な用途も想定させることにもなる。とくに、秋田・岩手両県域に出土例があるアスファルト付着の石錘例から連想されるような丸木舟や筏のロープに塗るなどの使用、あるいはまた燃やすものとして祭祀的灯明などの目的も考えられるものである。これらは、今後アスファルト利用を考える際のもつべき視点であろう。

（3）アスファルト関連遺構

本県域では、縄文中期中葉の三内丸山(6)と後期後葉の丹後谷地両遺跡で、竪穴住居跡内からアスファルト塊とともにフレイクがまとまって出土していることが注目される。このことは、この遺構で石器製作が行なわれたことを窺わせるものであり、しかも丹後谷地例のようにアスファルト塊にフレイクが付着している点は、これらの建物内で石器製作とアスファルト関連の作業が行なわれていたことを示すとみられる。すなわち、これらの2軒の竪穴住居跡はアスファルト関連の作業場兼物置き場と考えられるもので、ここでアスファルトを用いた石鏃着柄等の作業やアスファルトの保管が行なわれたと推定される。大畑台遺跡出土の中期初頭の球状塊は、住居跡床面で土器に入った状態で出土しているが(フレイクは出土していない[注12])、これも同様の施設であった可能性がある。なお、岩手県安代町赤坂田Ⅱ遺跡の中期末(大木10式期)の球状塊[注15]は竪穴住居跡の床面直上、また1998年10月に読売新聞紙上で報じられた秋田県田沢湖町潟前遺跡の球状塊も同様に中期後葉(大木9式期)の竪穴住居跡から出土しており、同様にアスファルト関連の施設であったとみられる。

なお、本県域の尾上町李平(すもだい)Ⅱ号遺跡(文献174)からは、縄文後期前葉とみられるフラスコ状(袋状)土坑の埋め土第5層から野球ボール大の塊が1点(表面に溝状の削り痕跡をもつ)出土している。類例は前述した大畑台遺跡にもある。ただし、この種の遺構は一般的に貯蔵穴(時として墓穴)として用いられるものであり、これからアスファルト塊が出土したという点については、この種の土坑に単に廃棄されたものか、それともアスファルトの利用・用途等と何らかの関わりがある出土状況を示したものか不明である。

なお、北海道南部の南茅部町磨光(まこう)B遺跡では縄文後期後半の土坑から塊が出土し、アスファルトを溶かすなどの工房址と解されている[注16]。しかし、この類例は東北地方ではまだ発見されていない。今後の資料増加を期待したい。

（4）アスファルトの産地

従来から、縄文中期以降の利用が確認され、しかも本県域に近いという点から、本県域出土の付着アスファルトは秋田県昭和町槻木(豊川油田)産のものと、一般に理解されてきている[注7]。しかし、昨年、秋田県北部の二ツ井町駒形地区で新たな産地発見の報告があった[注17]。ここは槻木よりも本県域に近く、

## 表１　青森県域出土のアスファルト付着遺物一覧

| 地図番号 | 遺　跡　名 | 時期（土器型式）・付着遺物・点数・遺構等 | 文献・遺物図 |
|---|---|---|---|
| 1 | 三厩村中ノ平 | 縄文中～後期の有茎石鏃多数に付着。 | 1 |
| 1 | 三厩村中ノ平 | 縄文中～後期の有茎石鏃に付着。 | 4 |
| 2 | 三厩村宇鉄 | 縄文後期初頭(唐竹式主体)の有茎石鏃１点に付着（第３地点)。 | 132 |
| 2 | 三厩村宇鉄 | 縄文晩期中葉(大洞$C_2$～Ａ式)の石鏃436点のうち有茎等110点、石匙つまみ部８点、石篦１点に付着。 | 134 |
| | | 縄文晩期中葉(大洞$C_2$～Ａ式)の玉象嵌土製品の象嵌部と欠損部に付着。第１地点。化学分析。 | 134,176、図6-16 |
| 2 | 三厩村宇鉄 | 縄文晩期中葉(大洞$C_2$～Ａ式)の有茎石鏃・土器底部に付着。第１地点。 | 133、図６－17 |
| 2 | 三厩村宇鉄 | 弥生中期(宇鉄Ⅱ式)の石銛６点のうち４点に厚く付着(第２号土壙墓)。第２地点。 | 84、図7-41･42 |
| 2 | 三厩村宇鉄 | 弥生中期(宇鉄Ⅱ式)の石鏃21点のうち２点の茎部に付着。第２地点。 | 81 |
| 3 | 今別町二ツ石 | 縄文後期の石鏃13点のうち有茎２点の茎部に付着。 | 32 |
| 4 | 平舘村今津 | 縄文晩期中葉(大洞$C_2$式)の有茎石鏃38点のうち26％の石鏃と石匙２点に付着。 | 131 |
| 4 | 平舘村今津 | 縄文晩期中葉(大洞$C_2$式)の石鏃431点のうち78点に付着、石錐４点、石匙１点に付着(密集ブロック)。 | 26、図７-29･30 |
| | | 縄文晩期中葉(大洞$C_2$式)の石鏃192点のうち19点の茎部、石匙１点、土偶乳房部１点に付着。 | 26、図６－14 |
| 5 | 平舘村間沢 | 縄文中期末～後期初頭の石鏃３点と石錐の茎部に付着。 | 26 |
| 6 | 平舘村尻高(４) | 縄文後期後半の石鏃と石匙に付着。化学分析。 | 25 |
| 7 | 小泊村大澗 | 縄文晩期前半の有茎石鏃１点に付着。表面採集品。 | 173 |
| 8 | 小泊村縄文沼 | 縄文晩期の石鏃126点のうち12点、石匙24点のうち２点に付着。とくに５号土坑の石鏃に顕著。 | 146 |
| 9 | 金木町神明町 | 縄文後期前～中葉の石鏃14点のうち１点に付着。 | 13 |
| １０ | 金木町妻の神(１) | 縄文後期前葉の石鏃107点のうち17点に付着。 | 5 |
| １１ | 金木町千苅(１) | 縄文晩期後半の有茎石鏃39点のうち６点、石匙28点のうち６点、石篦19点のうち１点に付着。 | 51 |
| １２ | 木造町亀ヶ岡 | 縄文晩期の石鏃に付着。 | 168 |
| １２ | 木造町亀ヶ岡 | 縄文晩期の土偶に付着。 | 169 |
| １２ | 木造町亀ヶ岡 | 縄文晩期の石鏃21点のうち有茎６点に付着し、他に土器･土器内付着･アスファルト入り土器２点あり。化学分析。 | 161 |
| １２ | 木造町亀ヶ岡 | 縄文晩期の石鏃14点のうち３点に付着。 | 3 |
| １２ | 木造町亀ヶ岡 | 縄文晩期の石鏃･石匙･土偶(Ｂ区)、石鏃(Ｃ区)、石鏃・石棒(Ｄ区)に付着、塊11点(雷電宮地区)あり。 | 82 |
| １２ | 木造町亀ヶ岡 | 縄文晩期の骨製刺突具１点の基部に付着。 | 89 |
| １３ | 森田村石神 | 縄文前期末(円筒下層ｄ式)の有茎石鏃１点に付着。 | 137 |
| １４ | 鰺ヶ沢町鳴沢 | 縄文前期末(円筒下層ｄ式)の石鏃茎部２点に付着。 | 37 |
| １５ | 鰺ヶ沢町大曲Ⅲ号 | 縄文後～晩期の石匙つまみ部１点に付着。 | 167 |
| １６ | 深浦町津山 | 縄文前期末(円筒下層ｄ式)・中期初頭(円筒上層ａ式)の石鏃茎部各１点等に付着(第８・９号竪穴住居跡)。 | 66、図７－22 |
| １６ | 深浦町津山 | 弥生前期の石鏃各１点に付着(第１・２号竪穴住居跡)。弥生の大型土偶脚部に付着。 | 66、図６－18 |
| １７ | 深浦町日和見山 | 縄文後期後葉(十腰内Ⅳ式)の石鏃５点のうち茎部１点に付着(１号竪穴住居跡)。 | 136 |
| １８ | 深浦町一本松 | 縄文中期後半～後期初頭の石鏃２点に付着。 | 135 |
| １９ | 五所川原市観音林 | 縄文晩期後葉(大洞Ａ式)の土偶両眼と口に付着。 | 122 |
| １９ | 五所川原市観音林 | 縄文晩期後葉(大洞Ａ式)の石鏃６点に付着。化学分析。 | 123 |
| ２０ | 五所川原市実吉 | 縄文期の横形石匙１点に付着、アスファルト塊１点あり。化学分析。 | 62 |
| ２１ | 五所川原市隈無(１) | 縄文中～晩期の石鏃21点のうち有茎１点に付着。 | 70 |
| ２２ | 五所川原市隈無(４) | 縄文期の石鏃７点のうち有茎２点に付着。 | 63 |
| ２３ | 五所川原市隈無(６) | 縄文後期中葉(十腰内Ⅲ式)の広口壺１点の底部に付着。 | 70、図６－５ |
| ２４ | 板柳町土井Ⅰ号 | 縄文晩期中葉の土器注口部に付着。 | 145 |
| ２５ | 弘前市十腰内(１) | 縄文晩期前葉(大洞ＢＣ式)の石器フレイク２点、晩期の有茎石鏃37点の内15点と石匙つまみ部１点に付着。 | 77 |
| ２６ | 弘前市大森勝山 | 縄文晩期前半の石匙１点に付着、スクレイパー１点に小塊付着。 | 165 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 27 | 弘前市野脇 | 縄文晩期の石鏃・石匙に付着。 | 42 |
| 28 | 弘前市砂沢 | 弥生前期(砂沢式)を主体とする石鏃267点のうち13点の茎部に付着。また、石匙、スクレイパー、ピエス･エスキーユ、多頭石斧各1点に付着。 | 102<br>102 |
| 29 | 弘前市尾上山付近 | 縄文後～晩期とみられる有茎石鏃に付着。表面採集品。 | 88 |
| 30 | 弘前市宇田野(2) | 弥生前期を主体とする石鏃164点のうち10点に付着。 | 65 |
| 31 | 岩木町小森山東部 | 縄文晩期初頭(大洞B式)の石鏃茎部、頭部欠損土偶各1点に付着。筆者採集の横形石匙1点に付着。 | 164 |
| 32 | 岩木町東岩木山(5) | 縄文後・晩期、弥生期の有茎石鏃2点に付着。 | 103 |
| 33 | 岩木町薬師Ⅰ号 | 縄文晩期の石鏃・石匙に付着。筆者が表面採集した有茎石鏃に付着。 | 166 |
| 34 | 大鰐町上牡丹森 | 縄文後期末(十腰内Ⅴ式)の土器注口部に付着､小塊あり(第2号住居跡)。縄文中～後期の有茎石鏃、磨製石斧各1点に付着。 | 138 |
| 35 | 碇ヶ関村永野 | 縄文中～後期？の石鏃2点に付着。 | 12 |
| 36 | 碇ヶ関村四戸橋 | 縄文前期中葉～末(円筒下層a～$d_2$式)の石鏃17点のうち1点のみ付着。 | 144 |
| 37 | 田舎館村垂柳 | 弥生中期の石鏃14点のうち4点の茎部に付着。 | 24 |
| 38 | 黒石市板留(2) | 縄文前期末(円筒下層$d_2$式)の尖基式石鏃茎部1点に付着(第5号住居跡)。 | 14 |
| 39 | 黒石市花巻 | 縄文中期後半～後期初頭を主体とする無茎石鏃1点に付着。 | 121 |
| 40 | 黒石市一ノ渡 | 縄文後期前葉の石鏃49点のうち6点に付着。 | 20 |
| 41 | 尾上町李平Ⅱ号 | 縄文後期の石鏃(有茎)12点のうち5点に付着。後期前葉とみられる野球ボール大(長さ約9.0cm)の塊1点(袋状土坑)あり。 | 174,79 |
| 42 | 平賀町石郷 | 縄文後期末～晩期前葉(大洞BC式)の石鏃69点のうち13点、石匙33点のうち2点に付着。 | 141 |
| 43 | 平賀町木戸口 | 縄文後期～晩期の石鏃・石匙に付着。 | 143 |
| 44 | 平賀町堀合Ⅰ号 | 縄文後期前葉の石鏃8点のうち有茎1点に付着。 | 142 |
| 45 | 平賀町堀合Ⅱ号 | 縄文中期中葉～後期初頭の石鏃34点のうち有茎・抉入り合せて6点に付着。 | 139 |
| 46 | 平賀町井沢 | 縄文中期末～後期初頭の石鏃18点のうち有茎1点に付着。 | 140 |
| 47 | 浪岡町野尻(2) | 縄文後期前半のスクレイパー1点に付着。 | 50 |
| 48 | 浪岡町平野 | 縄文後期を主体とする石鏃5点のうち有茎1点に付着。 | 59 |
| 49 | 青森市宮本(2) | 縄文後期前葉(十腰内Ⅰ式)の有茎石鏃1点に付着。 | 実物を実見 |
| 50 | 青森市三内丸山 | 縄文中期後半の石鏃多数の茎部(文献47)、中～後期初頭の石鏃(文献60)、中期の石鏃に付着(文献61)。 | 47,60,61 |
| 50 | 青森市三内丸山 | 縄文前期中葉(円筒下層a・b式)の抉入り石鏃1点に付着。第6鉄塔地区。 | 71、図7－20 |
| 50 | 青森市三内丸山 | 縄文中期後葉の有茎石鏃3点に付着(第91号住居跡)。 | 72、図7－24 |
| 50 | 青森市三内丸山 | 縄文前期中葉(円筒下層b式)と中期初頭(円筒上層a式)の有茎石鏃各1点に付着(第280･287号住居跡)。 | 73 |
| 50 | 青森市三内丸山 | 縄文中期中～後葉の有茎石鏃に付着。 | 74 |
| 50 | 青森市三内丸山 | 縄文中期後半の石鏃茎部3点と石匙1点に付着。表面採集品。 | 88 |
| 51 | 青森市小三内・三内丸山(2) | 縄文中期中葉(円筒上層e式主体)の石鏃104点のうち有茎8点に付着。 | |
| 51 | 青森市小三内 | 縄文中期末～後期前葉の抉入り石鏃2点に付着(第8号住居跡)。 | 94 |
| 52 | 青森市三内沢部 | 縄文中期後半の石鏃茎部9点に付着。 | 9 |
| 53 | 青森市三内丸山(6) | 縄文中期の石鏃に付着。縄文中期中葉(円筒上層d・e式)のアスファルト塊(長径20cmほど、住居跡)あり。 | 実物を実見 |
| 54 | 青森市安田(2) | 縄文中期の石鏃8点のうち有茎1点に付着。 | 75 |
| 55 | 青森市近野 | 縄文後期前葉(十腰内Ⅰ式)の粗製深鉢土器にアスファルト塊が入っていたとされる。 | 7 |
| 55 | 青森市近野 | 縄文後期前葉(十腰内Ⅰ式)の石鏃42点のうち5点に付着。 | 7 |
| 55 | 青森市近野 | 縄文中期後半の石鏃4点に付着。 | 10 |
| 56 | 青森市細越 | 縄文晩期中～後葉の石鏃49点のうち6点、石匙8点のうち3点、石箆1点に付着。 | 11 |
| 57 | 青森市朝日山(1) | 縄文期の有茎石鏃8点のうち2点に付着。 | 45 |
| 58 | 青森市朝日山(2) | 縄文期の有茎石鏃1点に付着。 | 46 |
| 59 | 青森市朝日山(3) | 縄文期の石鏃茎部2点に付着。 | 48 |
| 60 | 青森市小牧野 | 縄文後期前葉(十腰内1式)の石鏃82点のうち17点に付着。 | 97、図7－26 |
| 60 | 青森市小牧野 | 縄文後期前葉(十腰内Ⅰ式)の石鏃2点のうち1点に付着(第5号遺物集中ブロック)。 | 98 |
| 60 | 青森市小牧野 | 縄文後期前葉(十腰内Ⅰ式)頃の石鏃4点のうち1点に付着。 | 100 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| ６１ | 青森市山吹（１） | 縄文中期後半～後期初頭の石鏃茎部２点に付着。 | 93 |
| ６２ | 青森市横内（２） | 縄文中期とみられる有茎石鏃１点に付着。表面採集品。 | 96 |
| ６３ | 青森市桜峯（１）Ｃ地区 | 縄文前期末～中期初頭（円筒下層$d_1$・$d_2$～円筒上層ａ式）の有茎石鏃１点に付着。 | 99 |
| ６４ | 青森市四ツ石 | 縄文後期の土器・石鏃に付着。 | 171 |
| ６５ | 青森市田茂木野 | 縄文後期末（十腰内Ｖ式）の土器注口部、土器片に付着。 | 92 |
| ６６ | 青森市玉清水（１） | 縄文晩期とみられる石鏃１点に付着。表面採集品。 | 88 |
| ６７ | 青森市蛍沢 | 縄文中期中葉（円筒上層ｄ～ｅ式）の石鏃各１点に付着（１・７号住居跡）。 | |
| ６８ | 青森市沢山（１） | 縄文晩期末の石鏃14点のうち有茎２点、土偶頭部１点に付着。 | 175、図６－15 |
| ６９ | 青森市稲山 | 縄文後期前葉とみられる有茎石鏃に付着。 | 実物を実見 |
| ７０ | 青森市上野尻 | 縄文中～晩期の石鏃13点のうち有茎２点（Ａ・Ｂ区）、石匙４点のうち横形石匙１点（Ｃ区）に付着。 | 76 |
| ７１ | 青森市長森 | 縄文晩期前半の石鏃34点のうち８点の有茎に付着。 | 91 |
| ７１ | 青森市長森 | 縄文晩期とみられる有茎石鏃１点に付着。表面採集品。 | 87 |
| ７２ | 青森市大浦貝塚 | 縄文晩期中葉の骨銛・骨鏃・釣針に付着。 | 90 |
| ７３ | 平内町槻の木 | 縄文晩期前半の岩偶の頭部欠損部に付着。 | 県立郷土館展示 |
| ７３ | 平内町槻の木 | 縄文晩期の土偶に付着。 | 130 |
| ７４ | 平内町一本松 | 縄文中期とみられる有茎石鏃１点に付着。表面採集品。 | 87 |
| ７５ | 大間町ドウマンチャ | 縄文晩期の石鏃に付着。 | 177 |
| ７６ | 佐井村八幡堂 | 縄文中期の有茎石鏃１点に付着。 | 155 |
| ７７ | 脇野沢村稲平 | 縄文前期末～中期初頭（円筒下層ｄ～円筒上層ａ式）の石鏃８点に付着。 | 158 |
| ７８ | 脇野沢村瀬野 | 縄文前期末～中期初頭（円筒下層ｄ～円筒上層ａ式）の有茎石鏃３点に付着（第４・８号住居ほか）。 | 157 |
| ７８ | 脇野沢村瀬野 | 縄文中期の石槍、縄文晩期の異形石器に付着。 | 172 |
| ７８ | 脇野沢村瀬野 | 弥生前期の石鏃13点のうち３点の有茎に付着。 | 162 |
| ７９ | 脇野沢村家の上 | 縄文中期後半～後期前葉の有茎石鏃１点に付着。 | 156 |
| ８０ | 脇野沢村外崎沢（１） | 縄文後期の有茎石鏃２点に付着。 | 156 |
| ８１ | 川内町不備無 | 縄文晩期の石槍・石棒・土偶等に付着、ほかに小石大の塊あり。 | 172 |
| ８２ | 川内町鞍越 | 縄文中期末～後期の異形石器（石銛状石器）１点に付着。 | 153 |
| ８２ | 川内町鞍越 | 縄文後期中葉（十腰内Ⅲ式）の縦形石匙つまみ部１点に付着（SI-32竪穴住居跡）。 | 154 |
| ８３ | 川内町板子塚 | 縄文晩期の垂玉破片に付着。 | 172 |
| ８３ | 川内町板子塚 | 弥生中期の石鏃46点のうち４点に付着（第２号土壙墓）。 | 54、図７-39･40 |
| | | 弥生中期の石鏃６点のうち５点に付着（第７号土壙墓）。 | 54 |
| ８４ | 川内町熊ヶ平 | 縄文後期とみられる有茎石鏃・スクレイパー基部各１点に付着。 | 58 |
| ８５ | 川内町高野川（３） | 縄文後期の石鏃25点のうち４点に付着。 | 53 |
| ８６ | 川内町戸沢川代 | 弥生前期（砂沢式主体）の石鏃14点のうち柳葉形１点に付着。 | 152 |
| ８７ | むつ市大湊近川 | 縄文後期後葉（十腰内Ⅳ・Ｖ式）の注口土器（第107号竪穴住居跡）、注口部に付着（第120号土坑）。化学分析。 | 29、図６－６ |
| ８８ | むつ市最花貝塚 | 縄文中期末の鹿骨製刺突具３点に付着。最花Ｄ貝塚。 | 159、図7-37･38 |
| ８８ | むつ市最花貝塚 | 縄文中期末の鹿骨製刺突具２点に付着。最花Ｄ貝塚。 | 160 |
| ８９ | 大畑町水木沢（１） | 縄文中～後期の石鏃18点のうち２点に付着。 | 8 |
| ９０ | 東通村前坂下(13) | 縄文前期初頭の可能性がある縦形石匙１点に付着。 | 17、図７－32 |
| ９１ | 横浜町桧木 | 縄文晩期前半の石鏃36点のうち９点、石匙５点のうち３点に付着。 | 147 |
| ９２ | 六ヶ所村富ノ沢（１） | 縄文中期後半（円筒上層ｄ～最花式）の石鏃72点のうち有茎等19点に付着。 | 2 |
| ９２ | 六ヶ所村富ノ沢（１） | 縄文中～後期の石鏃茎部１点に付着。 | 35 |
| ９３ | 六ヶ所村富ノ沢（２） | 縄文中期中葉（円筒上層ｄ式）の石鏃茎部１点に付着。 | 36 |
| ９３ | 六ヶ所村富ノ沢（２） | 縄文中期後半（円筒上層ｅ・榎林・最花式）の石鏃茎部に付着（住居跡）。 | 38 |
| ９３ | 六ヶ所村富ノ沢（２） | 縄文中期（円筒上層Ｃ～弥栄平式）の石鏃165点のうち30点と石錐２点（捨て場１）、遺構外の石鏃70点、石錐１点に付着。 | 40 |
| ９４ | 六ヶ所村富ノ沢（３） | 縄文中期前半（円筒上層Ｃ式）の石鏃基部１点に付着。 | 41 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| ９５ | 六ヶ所村大石平 | 縄文後期前葉(十腰内Ⅰ式)の石鏃99点のうち有茎等11点、石槍１点に付着。 | 28 |
| | | 縄文後期前葉(十腰内Ⅰ式)の壺形土器底部破片に付着したアスファルト塊あり。 | 28、図５－３ |
| ９６ | 六ヶ所村上尾駮(１)Ｃ地区 | 縄文晩期の石匙57点のうち横形３点のつまみ部に付着。 | 30 |
| ９７ | 六ヶ所村(２)Ｂ・Ｃ地区 | 縄文後期前葉(十腰内Ⅰ式主体)の石鏃148点のうち20点と尖頭器１点に付着。 | 31 |
| ９８ | 六ヶ所村弥栄平(１) | 縄文中期末～後期初頭の石鏃11点のうち２点に付着。 | 27 |
| ９９ | 六ヶ所村弥栄平(２) | 縄文中期末～後期初頭を主体とする石鏃２点に付着。 | 21 |
| １００ | 六ヶ所村幸畑(３) | 縄文期の有茎石鏃１点に付着。 | 67 |
| １０１ | 野辺地町槻ノ木(１) | 縄文中期初頭(円筒上層ａ式)の石鏃茎部に付着(第４号竪穴住居跡)。中期の石鏃350点のうち32点に付着。 | 49 |
| １０１ | 野辺地町槻ノ木(１) | 縄文中期末の石鏃茎部６点に付着。 | 19 |
| １０２ | 東北町大平(４) | 縄文後期の土器外面にアスファルト状物質付着。表面採集品。 | 148 |
| １０３ | 天間林村二ツ森貝塚 | 縄文中期の有茎石鏃２点に付着。表面採集品 | 87 |
| １０３ | 天間林村二ツ森貝塚 | 縄文中期後半の有茎石鏃茎部１点に付着。 | 85 |
| １０３ | 天間林村二ツ森貝塚 | 縄文中期中葉(円筒上層ｄ式)の石鏃茎部２点に付着(１点は土坑)。 | 150 |
| １０３ | 天間林村二ツ森貝塚 | 縄文中期後半(榎林式)の石鏃茎部３点に付着。 | 151 |
| １０３ | 天間林村二ツ森貝塚 | 縄文中期の骨角器に付着。 | 177 |
| １０４ | 三沢市野口貝塚 | 縄文後期後葉の注口土器１点、晩期の有茎石鏃９点、石匙５点に付着。 | 129 |
| １０５ | 三沢市小田内沼(１) | 縄文後期前葉(十腰内Ⅰ式)の石鏃茎部４点、石鏃１点(17号土壙)に付着。 | 126 |
| １０６ | 三沢市小山田(２) | 弥生前期の石鏃茎部１点に付着。 | 128 |
| １０７ | 三沢市猫又(１) | 縄文中期末(最花式)の抉入り石鏃１点、中～後期の縦形スクレイパー１点に付着。 | 127 |
| １０８ | 上北町古屋敷貝塚 | 縄文中期の石鏃１点に付着。 | 149 |
| １０９ | 十和田市寺山(３) | 縄文中～後期の石鏃３点のうち有茎石鏃１点に付着。 | 69 |
| １１０ | 十和田市明戸 | 縄文晩期の石鏃81点のうち有茎24点、石匙13点のうち４点に付着。 | 124 |
| １１０ | 十和田市明戸 | 縄文晩期の土器底部内に塊あり。晩期の土器底辺部の補修用に付着。晩期の石鏃161点のうち79点と石匙、土偶頭部、遮光 | 80,125 |
| １１０ | 十和田市明戸 | 器土偶腰部、土製垂飾各１点に付着。 | 125、図6-13、図7-35 |
| １１１ | 八戸市笹ノ沢(３) | 縄文中期初頭(円筒上層ａ式)の石鏃に付着。 | 実物を実見 |
| １１２ | 八戸市毛合清水(１)・(２) | 縄文後期前葉の有茎石鏃１点に付着。 | 108 |
| １１３ | 八戸市咽平 | 縄文後期前葉(十腰内Ⅰ式？)の土偶左腕部に付着。 | 112 |
| １１４ | 八戸市鶉窪 | 縄文後期初頭の土器底部内に塊あり。 | 18、図５－１ |
| １１５ | 八戸市鳥木沢 | 縄文中～後期の有茎石鏃１点に付着。 | 106 |
| １１６ | 八戸市牛ヶ沢(３) | 縄文中期末～晩期、晩期～弥生期の石鏃11点に付着。 | 23 |
| １１７ | 八戸市丹後谷地 | 縄文後期の石鏃224点うち石鏃３点(捨て場２・３等)に付着、後期前葉(十腰内Ⅰ式)の板状土偶首部１点に付着、同時期の | 105 |
| | | アスファルト入り土器１点(捨て場２)あり、後期中葉(十腰内Ⅱ式)の石匙基部に付着(第24号竪穴住居跡)、後期中葉(十腰 | 105、図５－２ |
| | | 内Ⅱ・Ⅲ式)の石鏃２点に付着(第27号竪穴住居跡)、後期後葉(十腰内Ⅳ式)の石器剥片６点に付着(第46号竪穴住居跡の柱穴)。 | 105、図7-27･33 |
| | | 化学分析。 | 105 |
| １１８ | 八戸市石手洗 | 縄文中期中葉(円筒上層ｄ・ｅ式)の有茎石鏃２点に付着。 | 109 |
| １１９ | 八戸市八幡 | 縄文晩期前葉の石鏃67点のうち２点、石錐１点、石匙12点のうち１点、土偶腕部１点に付着。 | 107 |
| １１９ | 八戸市八幡 | 縄文晩期～弥生期の輝緑岩製磨製石斧の基部１点に付着。 | 113, 図７－36 |
| １２０ | 八戸市是川中居 | 縄文晩期前半の注口土器ほかアスファルト入り土器２点。化学分析。 | 118,119 |
| １２０ | 八戸市是川中居 | 縄文後期末～晩期の石鏃１点に付着。 | 104 |
| １２０ | 八戸市是川中居 | 縄文後期後葉～晩期の土偶２点に付着。 | 117 |
| １２１ | 八戸市風張(１) | 縄文後期後半(十腰内Ⅳ式)の土偶片32点のうち９点に付着(とくに第15号竪穴住居跡の合掌土偶)。 | 110、図6-7･9 |
| | | 同時期の石鏃・石匙に付着。 | 110、図7-28･34 |
| １２１ | 八戸市風張(１) | 縄文後期後半(十腰内Ⅳ式)の土器注口･土偶･石鏃(文献120)、有茎石鏃に付着(第４・６・９号住居跡)。 | 111,120 |
| １２１ | 八戸市風張(１) | 弥生前期(二枚橋式)の有茎石鏃２点に付着(第７号住居跡)。 | 111 |
| １２２ | 八戸市西長根 | 縄文中期(円筒上層ｄ式以前)の石槍１点(第２号住居跡)、大木９式以前の石鏃２点(第４号住居跡)、石鏃11点(第10号住居 | 115 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | 跡)、大木８ｂ～９式以前(第11号住居跡)の石鏃１点に付着、円筒上層ｅ式(捨て場)の石鏃５２点・磨製石斧１点に付着。 | 11 |
| １２３ | 八戸市松ヶ崎 | 縄文中期後半(円筒上層ｅ～最花式)の石鏃に付着(第10・12・20号竪穴住居跡、第１号竪穴遺構)。 | 114、図７-25・31 |
| １２３ | 八戸市松ヶ崎 | 縄文中期後半(榎林式)の石鏃６点(第29号住居跡)、ほぼ同時期の大木９以前の石鏃１点に付着し、アスファルト塊？あり(第34号住居跡)、中期中葉(円筒上層ｅ式以前)の石鏃１点(第５号土壙)に付着。 | 116<br>116 |
| １２４ | 八戸市弥次郎窪 | 縄文中期後半～後期前半の石鏃23点のうち３点に付着。 | 34 |
| １２５ | 八戸市黒坂 | 縄文中期末～後期初頭の土器底部内に塊あり。 | 実物を実見 |
| １２６ | 八戸市鴨平(１) | 縄文後期前葉の石鏃茎部１点に付着。 | 16 |
| １２７ | 八戸市沢堀込 | 縄文前期初頭(早稲田６類)の石鏃に付着(Ｃ-４号住居跡)。<br>縄文後期末～晩期前葉の土器底部内に塊あり(Ａ-１号住居跡)。 | 39、図７－19<br>39,79、図５－４ |
| １２８ | 福地村館野 | 縄文前期中葉～末の石鏃茎部２点に付着。 | 33 |
| １２９ | 福地村西張(２) | 縄文後期初頭～晩期の石鏃８点のうち有茎１点に付着。 | 68 |
| １３０ | 福地村・八戸市昼巻沢 | 縄文後期前葉を主体とする石鏃８点のうち２点に付着。 | 22 |
| １３１ | 名川町剣吉荒町 | 縄文晩期末(大洞Ａ´)の石匙１点に付着。 | 83 |
| １３２ | 名川町虚空蔵 | 縄文晩期の石鏃・骨角器等に付着。 | 177 |
| １３３ | 三戸町杉沢 | 縄文晩期前半の岩偶１点と石鏃１点に付着。 | 86 |
| １３４ | 三戸町泉山 | 縄文晩期を主体とする石鏃62点のうち６点に付着。 | 6 |
| １３４ | 三戸町泉山 | 縄文中期中葉(円筒上層ｄ式)の有茎石鏃１点に付着(第30号土坑)。 | 55 |
| １３４ | 三戸町泉山 | 縄文晩期初頭(大洞Ｂ式)の注口部、晩期中葉の袖珍土器内面、晩期土偶132点のうち15点(11％)に付着。 | 56、図6-8・10～12 |
| １３４ | 三戸町泉山 | 縄文晩期前半の石鏃556点のうち基部40点に付着。 | 57 |
| １３５ | 三戸町松原(１) | 縄文晩期の石匙・Ｒフレイク各１点に付着。 | 86 |
| １３６ | 田子町石亀 | 縄文晩期前半の有茎石鏃31点(全体の40％)、石匙・スクレイパーのつまみ部、土偶脚部に付着。 | 163 |
| １３７ | 田子町野面平 | 縄文晩期前葉の土偶に付着。 | 170 |
| １３７ | 田子町野面平 | 縄文晩期中葉の石鏃・石匙・遮光器土偶に付着。 | 177 |
| １３８ | 階上町野場(５) | 縄文中期末(大木９・10式)の石鏃に付着。 | 43 |
| １３９ | 南郷村右エ門次郎窪 | 縄文晩期の石鏃茎部１点に付着。 | 15 |
| １４０ | 南郷村筋久辺 | 縄文後期前葉の石鏃茎部２点に付着。 | 44 |
| １４１ | 南郷村畑内 | 縄文前期後半(円筒下層式後半)の石鏃茎部に付着(袋状の第258号土坑)。 | 64、図７－21 |
| １４１ | 南郷村畑内 | 縄文中期初頭(円筒上層ａ式)の石鏃茎部１点に付着(第29号住居跡)。 | 52、図７－23 |
| １４１ | 南郷村畑内 | 弥生前期(砂沢式)の土器１点の胴部穿孔部に付着。 | 78 |

※なお、以上のほかに『青森県立郷土館資料目録第４集』(文献87)や寺田徳穂氏の報文(文献172)には下記の資料が記載されているが、不明な点があるため、一覧表や分布図には載せていない。

①弘前市大字石川(縄文期の有茎石鏃１点に付着。採集品。遺跡名不明)(文献87)。

②六ヶ所村大字鷹架(縄文期の有茎石鏃３点に付着。採集品。遺跡名不明)(文献87)。

③青森市大字岡町(縄文期の有茎石鏃１点に付着。採集品。遺跡名不明)(文献87)。

④川内町大字檜川の野家遺跡(縄文後期の石匙等に付着し、さらに小石大の塊あり(文献172)。ただし、青森県遺跡地図にないため位置不明。

⑤川内町大字檜川の上畑遺跡(縄文中期の小型石槍・石匙・スクレイパーに付着(文献172)。ただし、青森県遺跡地図にないため位置不明。

しかも日本海と奥羽山脈を結ぶ河川交通路としての米代川流域にあるため、その事実には注目せざるをえない。一方、津軽では古くから青森市西部の大釈迦[注18]・蟹田[注19]両油田が知られており、大釈迦油田では一部の試掘井から僅かながら出油をみている。アスファルト産出地は確認されていないものの、津軽の縄文人が地元産のアスファルトも利用していた可能性は残される。今後、本県域出土のアスファルト付着遺物の産出地を考える際には、単に従来どおりの昭和町槻木一帯と固定化して考えるのではなく、新産出地も含めて広い視野をもつことが必要になる。

理化学分析によるアスファルト産地同定は、北海道大学の小笠原正明氏を中心として、南茅部町豊崎N遺跡例以降積極的に進められ、最近では秋田県伊勢堂岱遺跡等の分析結果も発表されている[注20]。今後の理化学的方法による産地分析の進展に期待するところが大きい。

## 6．おわりに

以上、縄文・弥生時代における青森県域出土のアスファルト付着遺物について述べてきた。本県域で確認された関連遺物は、141ヶ所の遺跡から発見されている。この数は、『月刊考古学ジャーナル』の「アスファルト特集号」(No.452，1999年)によれば、秋田・岩手・宮城・山形４県域の事例は紹介されていないものの、北海道36ヶ所、新潟・福島各県域30ヶ所、新潟県域70ヶ所、長野県域を含めた関東地方全体14ヶ所(東京都、山梨・埼玉・神奈川各県域は未発見)とくらべて、突出して多いことがわかる。これは、本県域だけがとくに細かい資料調査を行なったということによるものではなく、東北地方北部の秋田・岩手両県域においても精査すればかなりの出土遺跡があることを予想させるものである。しかし、本県域に濃密に分布すると言う事実は変わらないであろう。この本州北辺地域のアスファルトの多消費状況は、アスファルトの流通条件と密接に結びつくものとみられる。本県域出土のアスファルトは大半が産地のある秋田県域から、陸路や海路によってもたらされたと考えられる。その流通条件は流通ルート上に占める地理的条件という意味であるが、本県域の立地・地形がまさにその好条件下にあったのである。

本県域は秋田県域というアスファルト産地に近接し、北は津軽海峡を介して北海道島という一大消費地域を結ぶ位置にあり、しかも陸奥湾という広い内湾も抱えている。さらに、東西も太平洋・日本海という広大な海域に面している。また、南は日本海と奥羽山脈を結ぶ米代川が流れ、この源流が奥羽山脈で、太平洋側地域を結ぶ河川とつながっている。この地理的条件は、遠距離交流の主役が舟であった先史時代には、まさにうってつけの条件であったと言えるであろう。とくに、本県の海域に面する地域は広く（海岸線の距離は、実に青森－東京間を越える722ｋｍもある)、海上交流のみを考えても、アスファルトの搬入・搬出には好条件を備えていたわけである。このような海上さらに内陸部の交通上の好条件が、双方のアスファルト物資の交流を活発化させてきた大きな要因であったとみられる。

アスファルトをめぐる交流の具体的な内容、たとえば津軽など本州北辺地域の縄文人の直接採取が当時主流であったのか、あるいは産地一帯を居住域とする縄文人との交換が主であったのか、あるいは秋田県域の縄文人の北上が行なわれたのか、あるいは第三者を介したものか。交換とすれば、何と交換したのか等々・・・、具体的な問題点があるが、これについては、考古学的にはなかなか明らかにすることができない。今後の課題として考えていきたい。

本稿をまとめるにあたって、参考文献・類例等のご教示について北海道余市町教育委員会の乾芳宏、秋田県埋蔵文化財センターの櫻田隆、青森県史編纂室の佐藤巧、青森県立郷土館の島口天、青森県教育庁三内丸山遺跡対策室の斎藤岳の各氏にお世話になった。さらに、青森県埋蔵文化財調査センター

の成田滋彦・木村鐵次郎・白鳥文雄・中嶋友文・小田川哲彦・笹森一朗・佐々木雅裕氏からもご教示いただいた。また、文化庁記念物課の岡村道雄氏には縄文時代のアスファルト利用調査のきっかけをつくっていただいた。心から感謝申しあげる次第である。

※なお、本稿で使用した遺物図は各引用文献に掲載されたものであり、図5の1は鶉窪(文献18)、2は丹後谷地捨て場2(文献105)、3は大石平(文献28)、4は沢堀込A－1号住居跡(文献39)の各遺跡、図6の5は隈無(6)第4号焼土(文献70)、6は大湊近川第107号竪穴住居跡(文献29)、7・9は風張(1)第25号·15号竪穴住居跡(文献110)、8、10～12は泉山(文献56)、13は明戸(文献125)、14は今津(文献26)、15は沢山Ⅰ号(文献175)、16は宇鉄(文献134)、17も宇鉄(文献133)、18は津山(文献66)の各遺跡、図7の19は沢堀込(文献39)、20は三内丸山(文献71)、21は畑内第258号土坑(文献64)、22は津山第9号竪穴住居跡(文献66)、23は畑内第29号住居跡(文献52)、24は三内丸山第91号住居跡(文献72)、25·31は松ヶ崎第1号竪穴遺構·第20号竪穴住居跡(文献114)、26は小牧野(文献97)、27·33は丹後谷地第27·24号竪穴住居跡(文献105)、28·34は風張(1)第30·7号竪穴住居跡(文献110)、29·30は今津(文献26)、32は前坂下(13)(文献17)、35は明戸(文献125)、36は八幡(文献113)、37·38は最花(文献159)、39·40は板子塚第2号土壙墓(文献54)、41·42は宇鉄第2号土壙墓(文献84)の各遺跡出土資料である。また、図8(写真)の1は鶉窪(文献18)、2は沢堀込A－1号住居跡(文献39)、5は三内沢部(文献79)、9は三内丸山(6)(昨年6月に竪穴住居跡から出土)の各遺跡例で、すべて当センターの調査によるものである。また、3は丹後谷地第46号竪穴住居跡(文献105。八戸市博物館蔵)、4は李平Ⅱ号フラスコ状ピット(文献174。尾上町教育委員会蔵。県立郷土館で展示)、6・7は観音林(文献123。五所川原市歴史民俗資料館蔵)、8は宇鉄第2号土壙墓(文献84。県立郷土館蔵)の各遺跡出土資料、10は秋田県昭和町槻木地区のアスファルト産地風景(筆者撮影)である。なお、遺物写真の縮尺はほぼ3分の2の大きさに統一している。

『注』

(1)ここでアスファルトとしたものは、(天然)アスファルト·タール(状物質)·ピッチ(痕)·膠着物、あるいは黒色物質などとして呼称·報告されているもので、大半は化学分析を経たものではない。このため、アスファルト以外のものが含まれている可能性がたかいことは承知している。実際に、宇鉄遺跡出土の玉象眼土製品(晩期)の付着物は、化学分析の結果、漆の可能性が大きいことが報告されている(文献134)。また、古くからアスファルトを塗ったとされていた木造町亀ヶ岡遺跡の縄文晩期の籃胎漆器例(文献161)について、国立歴史民俗博物館の永嶋正春氏は、宮城県根岸·山王遺跡、秋田県中山遺跡の5例を分析したところ、アスファルトがなくすべて漆であったという結果を紹介し、アスファルト産出地の秋田県昭和町槻木に近い場所にある中山遺跡例にも、アスファルト付着がなかった点を考慮して、従来言われてきた籃胎漆器へのアスファルト使用の可能性を否定するものと解釈できるとしている(注2)。なお、籃胎漆器にアスファルトを塗ったことを述べた文献には、ほかに(注3)がある。

(2)永嶋正春「縄文時代の漆工技術－東北地方出土籃胎漆器を中心にして－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第6集 1985年

(3)見城敏子「漆工」『縄文文化の研究第7巻 道具と技術』雄山閣出版 1983年

(4)福田友之「青森県のアスファルト利用状況」『月刊考古学ジャーナル』No.452 1999年

(5)佐藤傳蔵「本邦石器時代の膠漆的遺物に就て」『東京人類學会雑誌』第12巻第138号 1897年

(6)佐藤初太郎「石器土器に附着する膠漆様遺物に就いての愚見」『東京人類學会雑誌』第13巻第147号 1898年

(7)安孫子昭二「アスファルト」『縄文文化の研究 第8巻－社会·文化』雄山閣出版 1982年

(8)秋田県教育委員会『八木遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第181集 1989年

(9)中村良幸「岩手県大迫町八木巻イタコ塚遺跡」『月刊考古学ジャーナル』No.438 1998年

(10)昭和町誌編さん委員会『昭和町誌』昭和町 1986年

(11)文化庁編『発掘された日本列島'99新発見考古速報』朝日新聞社 1999年

(12)日本鉱業株式会社船川製油所『大畑台遺跡発掘調査報告書』 1979年

(13)恵山町教育委員会『日ノ浜砂丘１遺跡』 1986年
(14)玉川一郎「福島県のアスファルト利用状況」『月刊考古学ジャーナル』No.452 1999年
(15)(財)岩手県埋蔵文化財センター『赤坂田Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第58集 1983年
(16)南茅部町教育委員会『磨光Ｂ遺跡-縄文時代後期の集落跡とアスファルト加工工房址の調査』 1996年
(17)小笠原正明・櫻田　隆・能登谷宣康「二ツ井町富根字駒形不動沢地内のアスファルト滲出地について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第14号 1999年
(18)地質調査所『青森県大釈迦油田(第日本帝国油田第二十一区)地質及地形図説明書』 1925年
(19)地質調査所『青森県蟹田油田(第日本帝国油田第三十二区)地形及地質図説明書』 1936年
(20) a．小笠原正明・阿部千春・前川靖明・横山　晋「豊崎Ｎ遺跡出土の天然アスファルト塊」『月刊考古学ジャーナル』No.373 1994年
b．浅野克彦・伊東　潤・小笠原正明「北東北の『アスファルトの道』の解明」『日本文化財科学会第16回大会研究発表要旨集』 1999年
c．小笠原正明「アスファルトの化学分析と原産地」『月刊考古学ジャーナル』No.452 1999年
d．小笠原正明「小袋岱遺跡出土のアスファルトの成分分析」(秋田県埋蔵文化財センター『小袋岱遺跡』秋田県文化財調査報告第285集 1999年)
e．小笠原正明「伊勢堂岱遺跡出土のアスファルトの産地同定」(秋田県埋蔵文化財センター『伊勢堂岱遺跡』秋田県文化財調査報告第293集 1999年)

『文献』
(1)青森県教育委員会(以下、県教委とする)『中平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書(以下、県埋文報告書とする)第７集 1973年
(2)県教委『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報』県埋文報告書第９集　1974年
(3)県教委『亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第14集 1974年
(4)県教委『中の平遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第25集 1975年
(5)県教委『白山堂遺跡・妻の神遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第30集 1976年
(6)県教委『泉山遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第31集 1976年
(7)県教委『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)・三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第33集 1977年
(8)青森県埋蔵文化財調査センター(以下、県埋文センターとする)『水木沢遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第34集 1977年
(9)県教委『三内沢部遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第41集 1978年
(10)県教委『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅳ)』県埋文報告書第47集 1979年
(11)県教委『細越遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第49集 1979年
(12)県教委『永野遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第56集 1980年
(13)県教委『金木町神明町遺跡』県埋文報告書第58集 1980年
(14)県教委『板留(２)遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第59集 1980年
(15)県埋文センター『右エ門次郎窪遺跡・三合山遺跡・石ノ窪遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第69集 1982年
(16)県埋文センター『鴨平(１)遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第72集 1983年
(17)県埋文センター「前坂下(13)遺跡」『下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』県埋文報告書第75集 1983年
(18)県埋文センター『鶉窪遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第76集 1983年
(19)県埋文センター『松原遺跡・陣場川原遺跡・槻ノ木遺跡』県埋文報告書第77集 1983年
(20)県埋文センター『一ノ渡遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第79集 1984年
(21)県埋文センター『弥栄平(２)遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第81集 1984年
(22)県埋文センター『昼巻沢遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第83集 1984年
(23)県埋文センター『牛ヶ沢(３)遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第86集 1984年
(24)県埋文センター『垂柳遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第88集 1985年
(25)県埋文センター『尻高(２)・(３)・(４)遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第89集 1985年
(26)県埋文センター『今津遺跡・間沢遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第95集 1986年

(27)県埋文センター『弥栄平(１)遺跡』県埋文報告書第98集 1986年
(28)県埋文センター『大石平遺跡発掘調査報告書Ⅲ(第１分冊)』県埋文報告書第103集 1987年
(29)県埋文センター『大湊近川遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第104集 1987年
(30)県教委『上尾駮(１)遺跡Ｃ地区発掘調査報告書』県埋文報告書第113集 1988年
(31)県埋文センター『上尾駮(２)遺跡Ⅱ(Ｂ・Ｃ地区)発掘調査報告書(第１分冊)』県埋文報告書第115集 1988年
(32)県埋文センター『二ツ石遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第117集 1989年
(33)県埋文センター『館野遺跡』県埋文報告書第119集 1989年
(34)県埋文センター『弥次郎窪遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第128集 1990年
(35)県埋文センター『富ノ沢(１)・(２)遺跡Ⅲ』県埋文報告書第133集 1991年
(36)県教委『富ノ沢(２)遺跡Ⅳ』県埋文報告書第137集 1991年
(37)県埋文センター『鳴沢遺跡・鶴喰(９)遺跡』県埋文報告書第142集 1992年
(38)県埋文センター『富ノ沢(２)遺跡Ⅴ』県埋文報告書第143集 1992年
(39)県教委『沢堀込遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第144集 1992年
(40)県埋文センター『富ノ沢(２)遺跡Ⅵ(２)』県埋文報告書第147集 1993年
(41)県埋文センター『富ノ沢(３)遺跡』県埋文報告書第147集 1993年
(42)県埋文センター『野脇遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第149集 1993年
(43)県埋文センター『野場(５)遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第150集 1993年
(44)県埋文センター『筋久辺遺跡』県埋文報告書第151集 1993年
(45)県埋文センター『朝日山遺跡Ⅲ(第１分冊)-朝日山(１)遺跡遺物編』県埋文報告書第156集 1994年
(46)県埋文センター『朝日山遺跡Ⅲ(第２分冊)-朝日山(２)遺跡』県埋文報告書第156集 1994年
(47)県埋文センター『三内丸山(２)遺跡Ⅲ』県埋文報告書第166集 1994年
(48)県埋文センター『朝日山(３)遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第167集 1995年
(49)県埋文センター『槻ノ木(１)遺跡』県埋文報告書第169集 1995年
(50)県埋文センター『野尻(２)遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第172集 1995年
(51)県埋文センター『千苅(１)遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第174集 1995年
(52)県埋文センター『畑内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』県埋文報告書第178集 1995年
(53)県埋文センター『高野川(３)遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第179集 1995年
(54)県埋文センター『板子塚遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第180集 1995年
(55)県埋文センター『泉山遺跡発掘調査報告書(第１分冊)』県埋文報告書第181集 1995年
(56)県埋文センター『泉山遺跡発掘調査報告書(第２分冊)』県埋文報告書第181集 1995年
(57)県埋文センター『泉山遺跡発掘調査報告書Ⅲ(第４分冊)』県埋文報告書第190集 1996年
(58)県埋文センター『戸沢川代遺跡・熊ヶ平遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第192集 1996年
(59)県埋文センター『平野遺跡発掘調査報告書』県埋文報告書第193集 1996年
(60)県教委『三内丸山遺跡Ⅴ』県埋文報告書第204集 1996年
(61)県教委『三内丸山遺跡Ⅵ』県埋文報告書第205集 1996年
(62)県埋文センター『実吉遺跡』県埋文報告書第207集 1997年
(63)県埋文センター『隈無(４)遺跡』県埋文報告書第209集 1997年
(64)県埋文センター『畑内遺跡発掘調査報告書Ⅳ』県埋文報告書第211集 1997年
(65)県埋文センター『宇田野(２)遺跡・宇田野(３)遺跡・草薙(３)遺跡』県埋文報告書第217集 1997年
(66)県埋文センター『津山遺跡』県埋文報告書第221集 1997年
(67)県埋文センター『幸畑(10)遺跡・幸畑(６)遺跡・幸畑(３)遺跡』県埋文報告書第222集 1997年
(68)県埋文センター『西張(２)遺跡』県埋文報告書第233集 1998年
(69)県埋文センター『大和田遺跡・寺山(３)遺跡・平窪(１)遺跡・平窪(２)遺跡・伝法寺館遺跡』県埋文報告書第235集 1998年
(70)県埋文センター『隈無(１)遺跡・隈無(２)遺跡・隈無(６)遺跡』県埋文報告書第237集 1998年
(71)県教委『三内丸山遺跡Ⅸ(第１分冊)』県埋文報告書第249集 1998年
(72)県教委『三内丸山遺跡Ⅹ(第１分冊)』県埋文報告書第250集 1998年
(73)県教委『三内丸山遺跡Ⅹ(第３分冊)』県埋文報告書第250集 1998年
(74)県教委『三内丸山遺跡ⅩⅠ』県埋文報告書第251集 1998年
(75)県埋文センター『安田(２)遺跡』県埋文報告書第255集 1999年

(76)県埋文センター『山下遺跡・上野尻遺跡』県埋文報告書第258集 1999年
(77)県埋文センター『十腰内(1)遺跡』県埋文報告書第261集 1999年
(78)県埋文センター『畑内遺跡Ⅴ』県埋文報告書第262集 1999年
(79)県埋文センター『青い森の縄文人とその社会-縄文時代中期・後期編』図説ふるさと青森の歴史シリーズ② 1992年
(80)県埋文センター『北の誇り・亀ヶ岡文化-縄文時代晩期編』図説ふるさと青森の歴史シリーズ③ 1991年
(81)青森県立郷土館(以下、県立郷土館とする)『宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』県立郷土館調査報告第6集(考古-3) 1979年
(82)県立郷土館『亀ヶ岡石器時代遺跡』県立郷土館調査報告書第17集(考古-6) 1984年
(83)県立郷土館『名川町剣吉荒町遺跡(第2地区)発掘調査報告書』県立郷土館調査報告第22集(考古-7) 1988年
(84)県立郷土館『三厩村宇鉄遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)－弥生甕棺墓の第4次調査』県立郷土館調査報告第25集(考古-8) 1989年
(85)県立郷土館『小川原湖周辺の貝塚－三沢市山中(2)貝塚・天間林村二ツ森貝塚発掘調査報告』県立郷土館調査報告書第31集(考古-9) 1992年
(86)県立郷土館『馬淵川流域の遺跡調査報告書』県立郷土館調査報告第40集(考古-11) 1997年
(87)県立郷土館『青森県立郷土館収蔵資料目録第4集 考古編』 1994年
(88)県立郷土館『青森県立郷土館収蔵資料目録第8集 補遺編』 1998年
(89)県立郷土館『津軽海峡縄文美術展図録』 1988年
(90)青森市教育委員会(以下、○○市町村教委とする)『大浦遺跡調査報告書』青森市の埋蔵文化財7 1971年
(91)青森市教委『長森遺跡発掘調査報告書』 1985年
(92)青森市教委『田茂木野遺跡発掘調査報告書』 1986年
(93)青森市教委『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書(以下、市埋文報告書とする)第16集 1991年
(94)青森市教委『小三内遺跡発掘調査報告書』市埋文報告書第22集 1994年
(95)青森市教委『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』市埋文報告書第23集 1994年
(96)青森市教委『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』市埋文報告書第24集 1995年
(97)青森市教委『小牧野遺跡発掘調査報告書』市埋文報告書第30集 1996年
(98)青森市教委『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』埋文市報告書第35集 1997年
(99)青森市教委『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』市埋文報告書第36集 1998年
(100)青森市教委『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』市埋文報告書第45集 1999年
(101)青森市蛍沢遺跡発掘調査団『青森市蛍沢遺跡発掘調査報告書』 1979年
(102)弘前市教委『砂沢遺跡発掘調査報告書本文編』 1991年
(103)弘前市教委『弥生平遺跡、東岩木山(2)・(3)・(5)遺跡、山田遺跡、福村城跡』 1997年
(104)八戸市教委『是川中居遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書(以下、市埋文報告書とする)第10集 1983年
(105)八戸市教委『丹後谷地遺跡発掘調査報告書』市埋文報告書第15集 1986年
(106)八戸市教委『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』市埋文報告書第17集 1986年
(107)八戸市教委『八幡遺跡発掘調査報告書』市埋文報告書第26集 1988年
(108)八戸市教委『毛合清水(1)・(2)遺跡』市埋文報告書第29集 1989年
(109)八戸市教委「石手洗遺跡」『八戸市内遺跡発掘調査報告書1』市埋文報告書第36集 1990年
(110)八戸市教委「風張(1)遺跡Ⅰ」『八戸市内遺跡発掘調査報告書2』市埋文報告書第40集 1991年
(111)八戸市教委『風張(1)遺跡Ⅱ』市埋文報告書第42集 1991年
(112)八戸市教委『咽平遺跡発掘調査報告書』市埋文報告書第43集 1991年
(113)八戸市教委『八幡遺跡発掘調査報告書Ⅱ』市埋文報告書第47集 1992年
(114)八戸市教委「松ヶ崎遺跡」『八戸市内遺跡発掘調査報告書6』市埋文報告書第60集 1994年
(115)八戸市教委「西長根遺跡」『八戸市内遺跡発掘調査報告書7』市埋文報告書第61集 1995年
(116)八戸市教委「松ヶ崎遺跡第2次C地点」『八戸市内遺跡発掘調査報告書8』市埋文報告書第65集 1996年
(117)八戸市教委『是川中居遺跡』市埋文報告書第82集 1999年
(118)八戸市博物館『目で見る八戸の歴史5-縄文の美』是川中居遺跡出土品図録第2集 1988年
(119)八戸市博物館『開館5周年記念特別展図録-縄文の漆工芸』 1988年
(120)八戸市博物館『国重要文化財指定記念-特別展「風張遺跡の縄文社会」』 1997年
(121)黒石市教委『花巻遺跡』市埋蔵文化財報告4 1986年
(122)五所川原市教委『観音林遺跡(第5次発掘調査報告書)』市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集 1987年

(123)五所川原市『五所川原市史 史料編1』 1993年
(124)十和田市教委『明戸遺跡発掘調査概報』市埋蔵文化財調査報告第2集 1983年
(125)十和田市教委『明戸遺跡発掘調査報告書』市埋蔵文化財調査報告第3集 1984年
(126)三沢市教委『小田内沼(1)・(4)遺跡発掘調査報告書』市埋蔵文化財調査報告書第10集 1992年
(127)三沢市教委『猫又(1)遺跡』市埋蔵文化財調査報告書第16集 1998年
(128)三沢市教委『小山田(2)遺跡・天狗森(3)遺跡』市埋蔵文化財調査報告書第17集 1999年
(129)三沢市教委『野口貝塚出土品図録』市歴史民俗資料館図録第1集 1982年
(130)平内町『平内町史 上巻』 1977年
(131)橘 善光・工藤竹久「青森県東津軽郡今津遺跡調査概報」『平舘村史』 1974年
(132)三厩村教委『宇鉄Ⅲ遺跡発掘調査報告』三厩村教委 1983年
(133)葛西 勵編『宇鉄遺跡発掘調査報告書(第1分冊)』三厩村教委 1996年
(134)葛西 勵編『宇鉄遺跡発掘調査報告書(第2分冊)』三厩村教委 1996年
(135)深浦町教委『深浦町一本松遺跡発掘調査報告書-第2次』 1980年
(136)深浦町教委『日和見山遺跡発掘調査報告書』町埋蔵文化財調査報告書第5集 1998年
(137)森田村教委『石神遺跡』 1997年
(138)大鰐町教委『上牡丹森遺跡発掘調査報告書』町文化財調査報告書第1集 1986年
(139)平賀町教委『堀合Ⅱ号遺跡発掘調査報告書』 1972年
(140)葛西 勵編『平賀町井沢遺跡発掘調査報告書』町埋蔵文化財報告書第5集 1976年
(141)村越 潔・葛西 勵編『石郷遺跡(本文・実測図編)』町埋蔵文化財報告書第7集 1979年
(142)葛西 勵・高橋 潤『平賀町堀合Ⅰ遺跡発掘調査報告書』町埋蔵文化財報告書第9集 1981年
(143)葛西 勵・高橋 潤・山岸英夫『木戸口遺跡』町埋蔵文化財報告書第12集 1983年
(144)葛西 勵・高橋 潤『四戸橋遺跡(Ⅱ)』碇ヶ関村教委 1998年
(145)板柳町教委『土井Ⅰ号遺跡』 1993年
(146)小泊村教委・早稲田大学文学部考古学研究室『縄文沼遺跡発掘調査報告書』村文化財調査報告第2集 1991年
(147)横浜町教委『桧木遺跡発掘調査報告書』 1983年
(148)東北町教委『東北町遺跡詳細分布調査報告書』町埋蔵文化財調査報告書第3集 1993年
(149)上北町教委『上北町古屋敷貝塚・Ⅰ(遺物編)』町文化財調査報告書第1集 1983年
(150)天間林村教委『二ツ森貝塚』村文化財調査報告書第5集 1997年
(151)天間林村教委『二ツ森貝塚』村文化財調査報告書第6集 1999年
(152)葛西 勵・高橋 潤『戸沢川代遺跡発掘調査報告書』町教委 1991年
(153)葛西 勵編『鞍越・袰川遺跡発掘調査報告書』町教委 1993年
(154)葛西 勵編『鞍越遺跡発掘調査報告書』町教委 1996年
(155)橘 善光編『八幡堂遺跡発掘調査報告書(2)』 村教委 1997年
(156)葛西 勵・高橋 潤『家の上・外崎沢(1)遺跡発掘調査報告書』村文化財報告書第1集 1979年
(157)西野 元編『青森県脇野沢村瀬野遺跡(2分冊)』脇野沢村 1998年
(158)西野 元編『青森県脇野沢村稲平遺跡(3分冊)』脇野沢村 1998年
(159)金子浩昌・牛沢百合子・橘 善光・奈良正義「最花貝塚第1次調査報告」『むつ市文化財調査報告』第4集 1978年
(160)金子浩昌・橘 善光・奈良正義「最花貝塚第3次調査報告」『むつ市文化財調査報告』第9集 1983年
(161)三田史学会『亀ヶ岡遺蹟-青森県亀ヶ岡低湿地遺蹟の研究』有隣堂出版 1959年
(162)伊東信雄・須藤 隆『瀬野遺跡』東北考古学会 1982年
(163)渡辺 誠・南 博史編『青森県石亀遺跡における亀ヶ岡文化の研究』古代學研究所研究報告第5輯 1997年
(164)今井富士雄「小森山東部遺跡」『岩木山-岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』(以下、『岩木山』とする)岩木山刊行会 1968年
(165)村越 潔・渡辺兼庸・田村誠一・磯崎正彦「大森勝山遺跡」『岩木山』岩木山刊行会 1968年
(166)村越 潔「薬師Ⅰ号遺跡」『岩木山』岩木山刊行会 1968年
(167)田村誠一「大曲Ⅲ号遺跡」『岩木山』岩木山刊行会 1968年
(168)佐藤傳蔵「陸奥國亀ヶ岡発掘報告」『東京人類學会雑誌』第118号 1896年
(169)佐藤傳蔵「陸奥國亀ヶ岡第二回発掘報告」『東京人類學会雑誌』第125号 1896年
(170)加藤泰男「三戸郡田子町野面平遺跡発掘調査略報」『じゅずかけ』第4号 1962年

(171)北林八洲晴『青森市の原始時代研究録１』 1968年
(172)寺田徳穂「ピッチ付石鏃について」『東奥文化』第41号 1970年
(173)鈴木克彦･松岡敏美「小泊村大澗遺跡の出土遺物」『とひょう』 4号 1983年
(174)青森山田高等学校考古学研究部「尾上町李平Ⅱ号遺跡発掘調査報告書」『撚糸文』第９号 1980年
(175)青森山田高等学校考古学研究会「青森市沢山(１)遺跡の出土遺物」『撚糸文』第21号 1995年
(176)児玉大成「玉象嵌土製品について」『野村崇先生還暦記念論集－北方の考古学』 1998年
(177)江坂輝弥「天然アスファルト」『新版考古学講座 第９巻』雄山閣出版 1971年

# 縄文時代住居跡の出入り口
## －青森県の事例を中心として－

成 田 滋 彦

### １ はじめに

現代において家を新築する際に、玄関を西側にとかトイレは南側に設置してはいけないという家相学というものが、いまだ一部に存在しています。

また、アイヌ民族の家屋の建て方は、神窓を川上方向及び東側に設置し、川下には出入り口部を設ける(更科1968)という規則性がみられます。

そこで、縄文時代においては住居跡の出入り口の設置に一定の規制が存在していたのか、それとも無かったのか、縄文時代の住居の出入り口の構造や方位について、青森県内の資料を用いて、論考してみたいと思う。

県内の遺跡で、出入り口部構造を検出した１．大面遺跡(成田1980)・２．十腰内(1)遺跡(赤羽・神1999)・３．神明町遺跡(杉山1980)・４．牛潟(1)遺跡(新谷1991)・５．尻高(4)遺跡(岡田1985)・６．三内丸山遺跡(小笠原1998)・７．水木沢遺跡(古市・市川・大湯1977)・８．袰川遺跡(葛西・児玉1992)・９．大石平遺跡(成田1985)・10．上尾駮(2)遺跡(畠山・岡田1988)・11．富ノ沢(2)遺跡(畠山・中嶋1992)・12．古屋敷貝塚(鈴木1986)・13．丹後谷地遺跡(藤田・宇部・村木・小笠原1986)・14．田面木平遺跡(1)(藤田・宇部・村木1988)・15．丹後平(2)遺跡(宇部1988)・16．風張(1)遺跡(藤田・宇部・小笠原・村木1991)・17．坂中遺跡(小笠原1995)・18．弥次郎窪遺跡(遠藤1990)・19．野場(5)遺跡(畠山・成田・三浦1993)・20．鶉窪遺跡(福田1983)・21．沢堀込遺跡(木村1992)・22．右エ門次郎窪遺跡（相馬1982)の22の遺跡を用いて住居跡の出入り口部の分析を行いたいと思う。

### ２ 住居跡の出入り口部の認定

住居跡の出入り口は、報告書の記述をみるとピットの間隔がひろい箇所や、床面の固い部分を出入り口としてる報告書もみられるが、固さのみで出入り口と判断すること(注1)は、発掘調査及び技量の差もあり出入り口として誤解する点もあるため、出入り口としては認定しない。

そこで本論では、地山等を用いて段を有するもの(注2)、張り出し部をもつもの溝及びピット等を用いて住居跡の内外に構築しているものなどを出入り口施設として認定した。

図１ 遺跡位置図

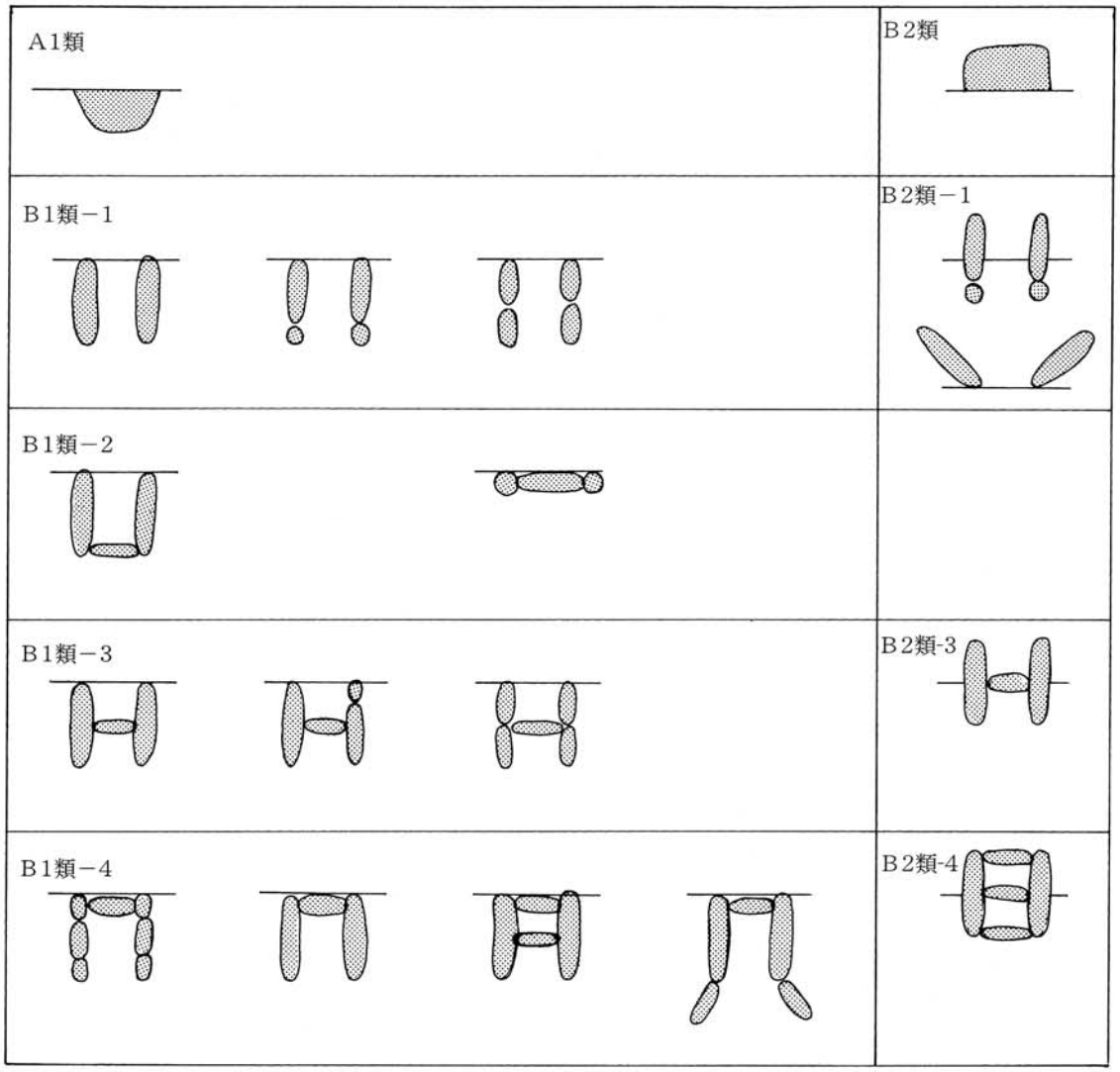



図2　出入り口部の構造

なお、溝及びピットを持つ施設は石野氏(石野1995)が『…階段があったとすれば階段の裾をとめた小さな柱穴…』と指摘しているように筆者も両脇に溝及び小ピットを有するものを階段の裾の部分であると理解した。

## 3　出入り口部の構造（図2）

この施設は構造から、段をもって構築しているもの（A類）・溝及びピットで構築している（B類）と二つに大きく分類した。

また、屋内に位置しているものをⅠ型、屋外及び住居跡の内と外に位置しているものをⅡ型に分け、B類は構造にバラエティーがあるため、1～4と更に細分して分類している。

A類　段及び張り出しをもつ構造のもの（図2）

段をもつA1類は、形態が楕円形・方形を呈する。野場(5)遺跡(畠山他1993)の第26号住居跡、弥次郎窪遺跡(遠藤1990)の第2号竪穴住居跡は、住居跡の側縁部に出入り口が設置しているが、他は端部に位置している。

## 縄文時代住居跡出入り口一覧表

大面遺跡（成田滋彦1980）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(m²) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第10号住居跡 | A1類 | 25×57 | N−50°−W | 無 | 3.1×4.3(9.54m²) | 前期(円筒下層b式) | |

神明町遺跡（杉山式1980）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(m²) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第5号住居跡 | B1−4類 | 84×106 | N−90°−E | 84 | 6.3×7 | 後期(十腰内Ⅲ式) | 信仰的な施設 |

鶉窪遺跡（福田友之1983）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(m²) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第1号竪穴住居跡 | B1−1類 | 55×73 | N−115°−E | 31 | 3.94×3.73 | 後期(十腰内Ⅰ式) | 焼失家屋 |

尻高(4)遺跡（岡田康博1985）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(m²) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第2号竪穴住居跡 | B1−4類 | 80×85 | N−150°−W | 65 | 4.4×5.4(18.3m²) | 後期(十腰内Ⅳ式) | |
| 第3号竪穴住居跡 | B1−1類 | 40×80 | N−162°−W | 110 | 3.8×3.9(12m²) | 後期(十腰内Ⅳ式) | |
| 第6号竪穴住居跡 | B1−1類 | 165×105 | N−153°−W | 85 | 7.6×8.1(45.6m²) | 後期(堂林式) | 板状の炭化材出土 |

大石平遺跡（成田滋彦1985）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(m²) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第2号竪穴住居跡 | A1類 | 73×55 | N−118°−E | 67 | 2.3×2.7(4.2m²) | 後期(十腰内Ⅰ式) | |
| 第5号竪穴住居跡 | B1−1類 | 98×110 | N−40°−E | 37 | 3.7×4.2(11.5m²) | 後期(十腰内Ⅰ式) | |
| 第8号竪穴住居跡 | B1−2類 | 67×98 | N−130°−E | 110 | 4×5(13.1m²) | 後期(十腰内Ⅰ式) | |

古屋敷貝塚（鈴木克彦1986）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(m²) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第5a号遺構 | A2類 | 91×84 | N−70°−W | 無 | 3×3.83 | 前期(円筒下層d式) | 壁面から埋没土器 |
| 第7号遺構 | A2類 | 70×56 | N−90°−E | 無 | 4.16 | 時期不明 | |

弥次郎窪遺跡（遠藤正夫1990）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(m²) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第2号竪穴住居跡 | A1類 | 54×96 | N−30°−E | 60 | 3.3×4.1(10.67m²) | 後期(牛ヶ沢式) | |

上尾駮(2)遺跡（畠山昇・岡田康博1988）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(m²) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| CJ6A号竪穴住居跡 | B1−1類 | 140×90 | N−130°−E | 35 | 3.86×4.3(13.2m²) | 後期(十腰内Ⅰ式) | 袖部から埋設土器 |
| CJ102号竪穴住居跡 | B1−1類 | 75×110 | N−178°−E | 30 | 3.85×3.95(9.8m²) | 後期(十腰内Ⅰ式) | |

丹後平遺跡(2)（宇部則保1988）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(m²) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第5号竪穴住居跡 | B1−3類 | 79×115 | N−152°−E | 73 | 4.6×4.75(14.4m²) | 後期(十腰内Ⅱ・Ⅲ式) | ピットから板状の炭化材 |
| 第8号竪穴住居跡 | B1−3類 | 79×110 | N−48°−E | 115 | 6.5×6.8(30.5m²) | 後期(十腰内Ⅲ式) | |
| 第10号竪穴住居跡 | B1−1類 | 42×85 | N−135°−E | 145 | 5×5(21m²) | 後期(十腰内Ⅱ・Ⅲ式) | |
| 第11号竪穴住居跡 | B1−1類 | 67×85 | N−147°−E | 61 | 3.8×4(10.2m²) | 後期(牛ヶ沢式) | 炉と出入口の間が踏み固めている |

田面木平(1)遺跡（藤田亮一・宇部則保・村木淳1988）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(m²) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第4号竪穴住居跡 | B1−2類 | 73×85 | N−114°−E | 67 | 3.75×4.1(10.5m²) | 後期(十腰内Ⅰ式) | P1とP2の間が固い |
| 第5号竪穴住居跡 | B1−1類 | 43×98 | N−98°−E | 67 | 3.26×3.76(8.4m²) | 後期(十腰内Ⅰ式) | |
| 第6号竪穴住居跡 | B2−4類 | 104×80 | N−93°−E | 31 | 3.4×3.5(8m²) | 後期(十腰内Ⅰ式) | |
| 第33号竪穴住居跡 | B1−1類 | 37×55 | N−82°−E | 31 | 3.15×3.15(6.2m²) | 後期(十腰内Ⅰ式) | |

右ェ門次郎窪遺跡（相馬信吉1982）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(m²) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第3号住居跡 | B2−1類 | 30×111 | N−135°−E | 42 | 2.9×2.6(5.8m²) | 晩期(大洞C2式) | |

丹後谷地遺跡（藤田亮一・宇部則保・村木淳・小笠原善範1986）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(m²) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第20号竪穴住居跡 | B1−2類 | 146×153 | N−121°−E | 116 | 6.6×7.3(31.6m²) | 後期(十腰内Ⅰ式) | |
| 第22号竪穴住居跡 | B1−4類 | 92×128 | N−102°−E | 85 | 6.6×6.9(32.4m²) | 後期(十腰内Ⅱ式) | |
| 第23号竪穴住居跡 | B1−4類 | 116×110 | N−100°−E | 67 | 5.6×5.8(22.5m²) | 後期(十腰内Ⅰ式) | |
| 第24号竪穴住居跡 | B1−3類 | 98×122 | N−127°−E | 92 | 5.9×6.6(30m²) | 後期(十腰内Ⅱ式) | |
| 第28号竪穴住居跡 | B1−2類 | 73×85 | N−102°−E | 55 | 3.5×3.5(10.9m²) | 後期(十腰内Ⅰ式) | |
| 第32号竪穴住居跡 | B1−3類 | 85×116 | N−153°−E | 79 | 4.9×5.6(19.9m²) | 後期(十腰内Ⅱ式) | |
| 第34号竪穴住居跡 | B2−3類 | 55×79 | N−130°−E | 128 | 4.2×4.36(12.5m²) | 後期(十腰内Ⅱ式) | |
| 第35号竪穴住居跡 | B1−1類 | 37×122 | N−152°−E | 103 | 4.5×5.1(14.2m²) | 中期(最花式) | |
| 第36号竪穴住居跡 | B2−1類 | 67×98 | N−135°−E | 55 | 3.46×4(9.5m²) | 後期(十腰内Ⅰ式) | |
| 第42号竪穴住居跡 | B2−1類 | 146×110 | N−103°−E | 37 | 5.6×6.2(22.5m²) | 中期(大木10式併行) | 溝の末端に礫2個 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第45号竪穴住居跡 | B２－３類 | 67×110 | N－152°－E | 79 | 3.3×3.3(7.4㎡) | 後期(十腰内Ⅰ式) | |
| 第46号竪穴住居跡 | B１－１類 | 67×92 | N－91°－E | 153 | 5.9×6.5(25.8㎡) | 後期(十腰内Ⅳ式) | |
| 第48号竪穴住居跡 | B１－４類 | 79×134 | N－68°－E | 85 | 7.4×8.4(42.4㎡) | 後期(十腰内Ⅳ式) | |
| 第49号竪穴住居跡 | B１－２類 | 37×55 | N－156°－E | 67 | 2.7×2.9 | 後期(十腰内Ⅱ式) | |
| 第54号竪穴住居跡 | B１－１類 | 104×98 | N－82°－E | 12 | 4.5×4.5(13.5㎡) | 後期(十腰内Ⅱ式) | |

沢堀込遺跡（木村鉄次郎1992）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(㎡) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| C－10号住居跡 | A１類 | 70×35 | N－157°－E | 無 | 3×3.5 | 前期(早稲田６) | |

富ノ沢(2)遺跡（畠山昇・中嶋友文1992）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(㎡) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第10号住居跡 | A１類 | 144×36 | N－240°－E | 180 | 3.9×4.4(12.8㎡) | 中期(円筒上層ｅ式) | |
| 第276号住居跡 | A１類 | 168×102 | N－200°－E | 168 | 15.5×7.3(76.5㎡) | 中期(円筒上層ｅ式) | |

水木沢遺跡（古市豊司・市川金丸・大湯卓二1977）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(㎡) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第１号竪穴住居跡 | A２類 | 112×144 | N－138°－E | 264 | 7.3×8.9(49.3㎡) | 後期(十腰内Ⅴ式) | |
| 第５号竪穴住居跡 | A２類 | 120×176 | N－82°－E | 200 | 6.8×6 | 後期(十腰内Ⅴ式) | |
| 第８号竪穴住居跡 | A２類 | 140×135 | N－90°－E | 288 | 6.2×5.2(27㎡) | 後期(十腰内Ⅴ式) | |
| 第９号竪穴住居跡 | A２類 | 82×126 | N－38°－E | 164 | 6×6 (32.2㎡) | 後期(十腰内Ⅴ式) | |
| 第17号竪穴住居跡 | A１類 | 60×70 | N－160°－E | 165 | 5.25×6(26.4㎡) | 前期(円筒下層ｄ式) | |
| 第19号竪穴住居跡 | A１類 | 50×45 | N－130°－E | 163 | 4×4.12(14.2㎡) | 前期(円筒下層ｄ式) | |

野場(5)遺跡（畠山昇・三浦孝仁・成田悟1993）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(㎡) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第４号住居跡 | B１－１類 | 225×170 | N－126°－E | 25 | 5 (10.6㎡) | 中期(最花式) | |
| 第11号住居跡 | B１－２類 | 85×50 | N－88°－E | 175 | 7.5×9.98(57㎡) | 中期(最花式) | 大形住居 |
| 第26号住居跡 | A１類 | 125×70 | N－195°－E | 135 | 3.4×3.78(9.5㎡) | 中期(大木10式併行期) | |

坂中遺跡（小笠原善範1995）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(㎡) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第３号住居跡 | B１－１類 | 61×79 | N－130°－W | 37 | 3.26×3.42 | 後期(十腰内Ⅰ式) | |
| 第４号住居跡 | A２類 | 31×85 | N－25°－E | 無 | (2.9㎡) | 後期(十腰内Ⅰ式) | |

十腰内(1)遺跡（赤羽真由美・神康夫1999）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(㎡) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第３号竪穴住居跡 | B１－１類 | 90×80 | N－50°－E | 500 | 13×13(136.16㎡) | 晩期(大洞ＢＣ式) | 大形住居跡 |

三内丸山遺跡（小笠原雅行1998）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(㎡) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第181号住居跡 | B１－１類 | 70×55 | N－88°－E | 80 | 3.1×3.34(4.81㎡) | 中期(円筒上層ｅ式) | |

風張(1)遺跡（藤田亮一1991・小笠原善範・村木淳1991）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(㎡) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第９号竪穴住居跡 | B１－３類 | 91×103 | N－50°－W | 97 | (5.32) | 後期(十腰内Ⅳ式) | |
| 第13号竪穴住居跡 | B１－３類 | 67×97 | N－60°－W | 79 | 5.1×6.2 | 後期(十腰内Ⅳ式) | |
| 第15号竪穴住居跡 | B１－３類 | 79×110 | N－180°－E | 97 | 5.07×6.55 | 後期(十腰内Ⅴ式) | 合掌土偶出土 |
| 第16号竪穴住居跡 | B１－１類 | 36×67 | N－176°－W | 115 | 3.62×4.1 | 後期(十腰内Ⅴ式) | |
| 第20号竪穴住居跡 | B１－１類 | 67×97 | N－141°－E | 127 | 6.08×8.32 | 後期(十腰内Ⅳ式) | |
| 第25号竪穴住居跡 | B１－１類 | 42×103 | N－34°－W | 140 | 6.05×7.27 | 後期(十腰内Ⅴ式) | |
| 第27号竪穴住居跡 | B１－１類 | 30×91 | N－57°－W | 18 | 5×5.87 | 後期(十腰内Ⅴ式) | |
| 第28号竪穴住居跡 | B１－４類 | 91×73 | N－20°－W | ? | (5.2) | 後期(十腰内Ⅳ・Ⅴ式) | |
| 第29号竪穴住居跡 | B１－２類 | 55×73 | N－146°－W | 49 | 4.68×5.84 | 後期(十腰内Ⅴ式) | |
| 第35号竪穴住居跡 | B１－４類 | 61×79 | N－170°－W | 97 | 4.71×4.92 | 後期(十腰内Ⅳ式) | |
| 第37号竪穴住居跡 | B１－１類 | 72×85 | N－176°－E | 85 | 4.7×5.1 | 後期(十腰内Ⅳ式) | |
| 第４号竪穴住居跡 | B１－３類 | 49×104 | N－105°－W | 201 | 5.5×6.2 | 後期(十腰内Ⅳ式) | |
| 第６号竪穴住居跡 | B１－４類 | 110×146 | N－135°－W | 146 | 5.87×7.14 | 後期(十腰内Ⅳ式) | |
| 第50号竪穴住居跡 | B１－４類 | 67×98 | N－144°－E | 120 | 5×5 | 後期(十腰内Ⅴ式) | |

袰川遺跡（葛西励・児玉大成1992）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(㎡) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第１号竪穴遺構 | A１類 | 42×60 | N－47°－W | 120 | 7.16×8.8 | 前期(円筒下層ｃ式) | |

牛潟(1)遺跡（新谷雄蔵1991）

| 遺構名 | 分類 | 長さ×幅(cm) | 方位 | 炉との距離 | 住居跡の規模(㎡) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第３号住居跡 | A２類 | 70×180 | N－172°－W | ? | 6×6.2 | 前期(円筒下層ｄ式) | |

張り出しをもつＡ2類は、形態が方形・楕円形を呈する。底面は段を有するものが主体を占めるが、古屋敷貝塚(鈴木1986)の第５ａ号遺構は底面がスロープ状を呈している。出入り口部は住居跡の側縁部に位置している。

Ｂ類　溝及びピットをもつ構造のもの（図２）

本類は、構造の形態差から１～４種と更に細分される。

Ｂ1類－１・Ｂ2類－１（二条の溝のものである。）

住居跡における位置は、屋内と屋外に位置している。

溝のタイプのもの、溝と末端にピットをもつタイプのもの、ピットの連続のタイプのものがあり、類型の中では一番多く検出されるタイプである。

上尾駮(2)遺跡(畠山･岡田1988)のCJ－６号竪穴住居跡では、ピットの末端部に埋設土器を有する。

尻高(4)遺跡(岡田1985)の第６号住居跡は、長さが165㎝を測り、大石平遺跡(成田1985)の第５号住居跡は幅が110㎝を測り、本類型の中でも最長を測る。

Ｂ1類－２（ ⊔ 字型のものである）

本類型は屋内のみに存在するものである。

二条の溝の末端を横に連結した ⊔ 字形の形態をなすものを、本類型とした。風張(1)遺跡(藤田1991)の第29号住居跡は末端部が連結せずに ⊔ 形を呈するものである。

野場(5)遺跡(畠山他1993)の第11号住居跡は、長さが85㎝を測り、大石平遺跡(成田1985)の第８号竪穴住居跡は、幅が98㎝を測り本類型の中で最長を測る。

Ｂ1類－３・Ｂ2類－３（Ｈ字型のものである。）

本類型は、屋内と屋外に存在するものである。

二条の溝及びピットの中央部を横に連結したＨ字形を呈するものを本類型とした。

屋外のＢ2類は、丹後谷地遺跡(藤田他1986)の第34号竪穴住居跡である。本類型の出入り口は壁に接して構築されているのが主体であるが、風張(1)遺跡(藤田1991)の第13号竪穴住居跡で壁より48㎝、丹後谷地遺跡(藤田他1986)の第24号竪穴住居跡で壁より24㎝離れて構築している。

丹後谷地遺跡(藤田他1986)の第24竪穴号住居跡は、長さ98㎝・幅122㎝を測り本類型の中でも最長を測る。

Ｂ1類－４・Ｂ2類－４（ ⊓ 字型・鳥居型・日字状型のものである。）

本類型は屋内と屋外に存在するものである。屋外のＢ2類は田面木平(1)遺跡(藤田他1988)の第６号竪穴住居跡１軒である。

構造は、二条の溝及びピットを横に連結した ⊓ 字型のタイプが主体で、 ⊓ 字型の中でも末端が広がるもの風張(1)遺跡(小笠原･村木1991)の第６号住居跡もみられる。また、横に二条の溝を連結した鳥居型のタイプ、日字状型のタイプの３種類が確認される。

丹後谷地遺跡(宇部1988)の第23号住居跡は長さ116㎝を測り、風張(1)遺跡(小笠原･村木1991)の第６号住居跡は幅146㎝を測り、本類型の中で最長を測る。

## 4　出入り口部の変遷

出入り口部の構造を各時期毎に把握する。現在、出入り口部構造がわかるのは縄文時代前期からであり、縄文時代早期の段階では検出していない。

－縄文時代前期－

【A1類・A2類を検出している】

県内で最も古い出入り口の施設は、沢堀込遺跡(木村1992)のC－10号住居跡であり、時期は前期初頭期の早稲田6類である。構造はA1類の屋内に段を有する構造である。なお、屋外の張り出しをもつものは、古屋敷貝塚(鈴木1986)の第5ａ号遺構であり、前期（円筒下層ｄ式）から構築される。

前期は、A類のみの検出であり、住居跡の壁寄りにステップ状に段を有するタイプが主体を占める。

－縄文時代中期－

【A1類・B1類－1類・B1－2類を検出している】

中期の段階では、A1類の屋内に段を有する構造が、前段階の前期から引き継がれており、その構造は類似している。A2類の屋外の構造はみられない。

なお、この時期にいたってB1類－1が出現する。野場(5)遺跡(畠山他1993)の第4号住居跡、三内丸山遺跡(小笠原1998)の第181号住居跡であり、ピット及び溝の間が落ち込む構造を呈している。構築時期は野場(5)遺跡が最花式、三内丸山遺跡が円筒上層ｅ式であり、中期中葉～後葉の時期にB1類が出現すると思われる。

－縄文時代後期－

【A1類･A2類･B1－1類・B1－2類・B1－3類・B1－4類・B2－1類・B2－3類・B2－4類と分類したすべての出入り口を検出している。】

後期は、県内で検出した出入り口施設の75％を占めており、出入り口施設が多く作られる時期である。

後期初頭の牛ケ沢式では、A1類とB1－1類を検出している。

十腰内Ⅰ式では、B1－3類を除きすべて検出しており、B1類の屋内の施設を盛んに構築する時期である。また、屋外のB2類も十腰内Ⅰ式の時期に限定される。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| $A_1$ | | | | |
| $A_2$ | | | | |
| | | | | |
| $B_1$－1 | | | | |
| $B_1$－2 | | | | |
| $B_1$－3 | | | | |
| $B_1$－4 | | | | |
| | | | | |
| $B_2$－1 | | | | |
| $B_2$－3 | | | | |
| $B_2$－4 | | | | |
| | 前　期 | 中　期 | 後　期 | 晩　期 |

図3　出入り口部変遷図

十腰内Ⅳ・Ⅴ式は、Ｂ1類の屋内施設を構築するとともに、水木沢遺跡（古市他1977）で検出したＡ2類の屋外の張り出しタイプの出入り口部も構築されている。

ー縄文時代晩期ー

【Ｂ1－１類・Ｂ2－１類を検出している。】

十腰内(1)遺跡（赤羽・神1999）の第３号竪穴住居跡のＢ1－１類と、右エ門次郎窪遺跡（相馬1982）の第３号住居跡のＢ2－１類の２軒である。

とくに右エ門次郎窪遺跡の出入り口は、ハの字状に広がる施設であり、県内に類例がみられず、関東地方の出入り口施設の構造と類似している。

## 5　出入り口と炉との関係（図４）

出入り口と炉は、基本的に住居内においては、直線上の配置が基本である。一方、大石平遺跡（成田1983）の第２号竪穴住居跡・水木沢遺跡（古市他1977）の第19号竪穴住居跡は、直線上の配置ではなく斜位に配置している。特にＡ1類の出入り口施設によくみられる。

各時期毎に概観すると、縄文時代前期では類例が少ないが150㎝前後に集中する。縄文時代中期では、150㎝前後のグループと、50㎝前後のグループの二つのグループが現れる。縄文時代後期に至っては、出入り口施設の類例が多い時期である。初頭期の牛ケ沢式では50㎝のグループのみが、十腰内Ⅰ式で50㎝のグループと100㎝前後の二つのグループが現れる。

この二つのグループは、後期の十腰内Ⅳ・Ⅴ式に至って間隔が広くなる傾向がみられる。縄文時代晩期では、２基と類例が少ないが二つのグループが存在する。

以上の事から炉と出入り口は、一体化した存在であると指摘できる。炉と出入り口の距離であるが。500㎝を測る十腰内(1)遺跡（赤羽・神1999）の第３号竪穴住居跡は、大形住居跡という点から例外であるが、他の住居跡をみると住居跡規模の大小と距離は比例せず、その距離に二つのグループが存在したとという事を指摘したい。

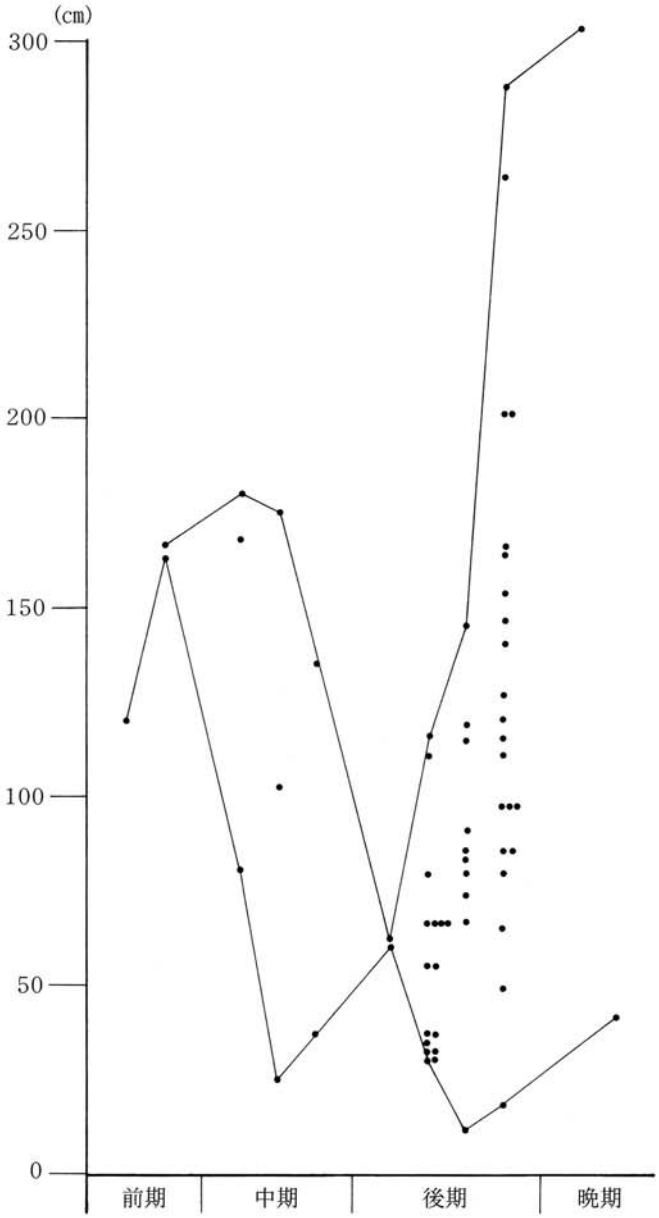
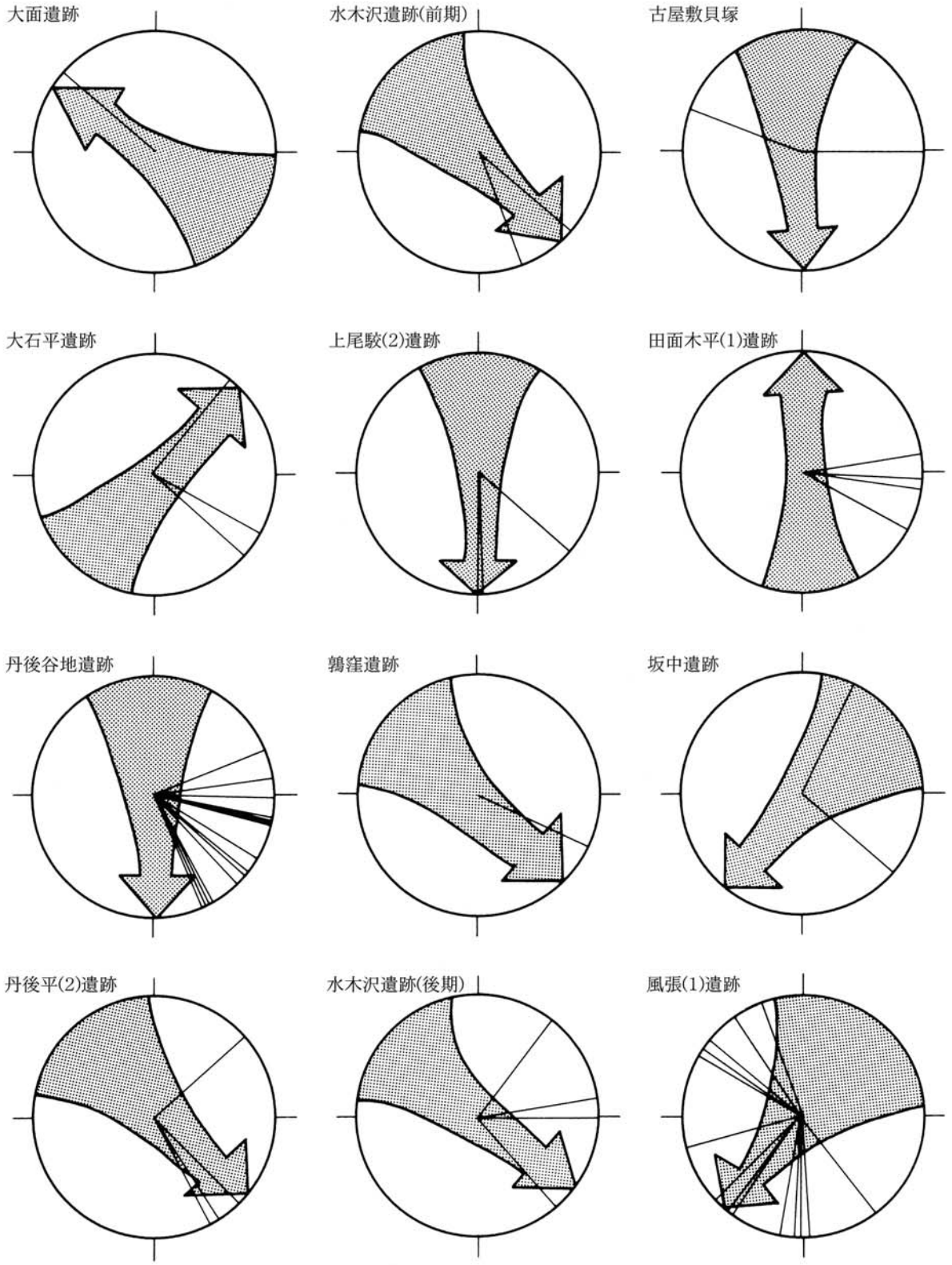



図４　出入り口と炉との距離




スクリーントーンは、台地の斜面方向
図の上が北

図5　出入り口部の方位

６　出入り口部の方位（図５）

図５は、出入り口を円グラフとしたものであり、スクリートーンは矢印部が台地斜面の下位方向を表している。

出入り口部の設置した地点をみると、北東が十腰内(1)遺跡・弥次郎窪遺跡・神明町遺跡、南東が水木沢遺跡（前期）・上尾駮(2)遺跡・田面木平遺跡・鶉窪遺跡・沢堀込遺跡・右エ門次郎窪遺跡・牛潟(1)遺跡、北西が大面遺跡、南西が富ノ沢(2)遺跡・尻高(4)遺跡、北東～南東が大石平遺跡・丹後平(2)遺跡･丹後谷地遺跡・坂中遺跡・水木沢遺跡（後期）・袰川遺跡、北東～南西が野場(5)遺跡、北西～南東が風張(1)遺跡である。

検出した出入り口を全体的に概観すると、真北はみられず北東～南東にかけて多くみられ南側を意識していると思われる。また、遺跡毎に出入り口の位置が決められるという特徴を有している。

また、台地斜面と位置を比較すると、台地斜面下位方向の風張(1)遺跡・水木沢遺跡(前期)・十腰内(1)遺跡 と斜面下位方向の90°脇に存在する田面木平(1)遺跡・丹後谷地遺跡の二つのグループが存在し、その設置する位置は斜面の下位方向で南側という決められた規定が存在していたと考えられる。

７　おわりに（図６～８）

このような出入り口施設については、A類のステップ状の施設については、水木沢遺跡(古市他1977)に代表されるように1970年代から出入り口として肯定されてきた。一方、B類の溝状及びピットについては、1980年代の前半期の鶉窪遺跡(福田1983)では、積極的に出入り口としては認定しておらず、神明町遺跡(杉山1980)では第５号住居跡の出入り口について『…出入り口でなく、むしろ、信仰的な色彩の強い施設の跡と考える…』として、出入り口施設より祭祀施設として把らえられていた。

その後、尻高(4)遺跡(岡田1985)の調査で第２号竪穴住居跡から『…柱穴列にはさまれた床面は、他の床面と比較すると非常に柔らかく、直接床面の上を歩いて出入りしていたとは考えられず、むしろ階段やスロープ等の施設痕と考えるべきであろう…』として、出入り口施設として認識し、第６号竪穴住居跡から『…２列の柱穴列に渡るように床面から板状の炭化材が出土した…』としている。このことから、B類は出入り口施設として認定すべきであると考えられ、1985年代からB類の施設を出入り口と認定してきた。

A類のステップは、青森県では大面遺跡(成田1980)の第10号住居跡の円筒下層ｂ式からであるが、宮本氏(宮本1980)は、北海道で縄文時代早期の住居跡から出現するとしており、本県の場合も前期から出入り口施設が構築されたというより、早期の段階までさかのぼる可能性がある。

B類の施設に関しては、林氏(林1997)は、伊勢堂岱遺跡の環状列石はハの字形出入り口をもつ住居と類似し、その時期を中期～後期初めとしているが、本県のハの字形出入り口をもつものは、右エ門次郎窪遺跡(相馬1982)の第３号住居跡の縄文時代晩期１軒のみであって、伊勢堂岱遺跡の環状列石と関連があるかは疑問である。

ただし、伊勢堂岱遺跡の環状列石を形成する十腰内Ⅰ式の集落で、多くの出入り口施設の住居を作ることは事実である。

今回は、各時期毎の詳細な分析はできなかったが、武藤氏は縄文時代中期の住居跡で検出される特殊施設について出入り口として考えており、特殊施設内のピットを『…上屋中位に設けられた出入り口に連結して丸太梯子等を据えた昇降施設の可能性が考えられる…』(武藤1997)としている。

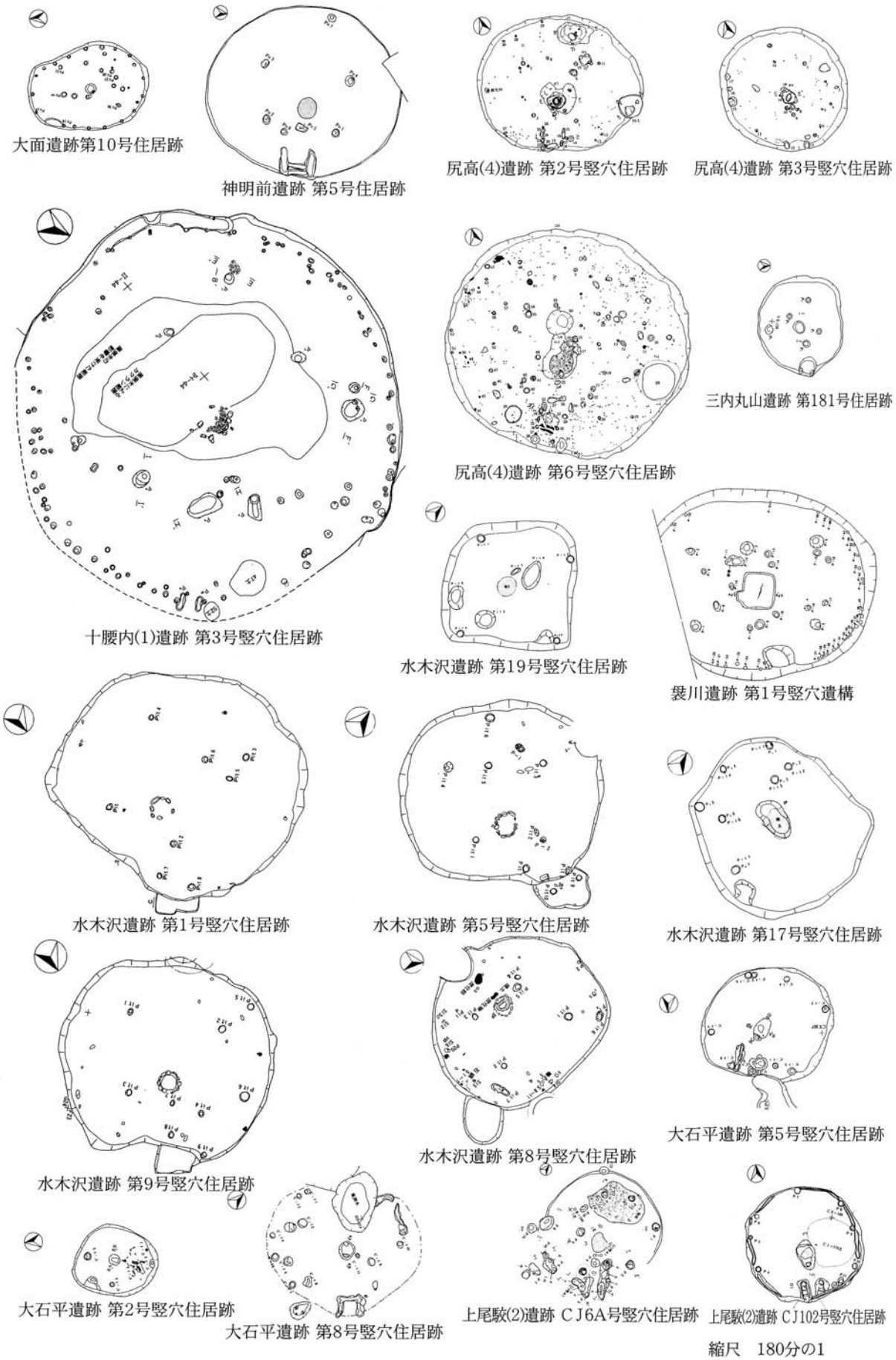

大面遺跡第10号住居跡
神明前遺跡 第5号住居跡
尻高(4)遺跡 第2号竪穴住居跡
尻高(4)遺跡 第3号竪穴住居跡
十腰内(1)遺跡 第3号竪穴住居跡
尻高(4)遺跡 第6号竪穴住居跡
三内丸山遺跡 第181号住居跡
水木沢遺跡 第19号竪穴住居跡
袰川遺跡 第1号竪穴遺構
水木沢遺跡 第1号竪穴住居跡
水木沢遺跡 第5号竪穴住居跡
水木沢遺跡 第17号竪穴住居跡
水木沢遺跡 第9号竪穴住居跡
水木沢遺跡 第8号竪穴住居跡
大石平遺跡 第5号竪穴住居跡
大石平遺跡 第2号竪穴住居跡
大石平遺跡 第8号竪穴住居跡
上尾駮(2)遺跡 CJ6A号竪穴住居跡
上尾駮(2)遺跡 CJ102号竪穴住居跡
縮尺　180分の1

図6　住居跡集成（1）

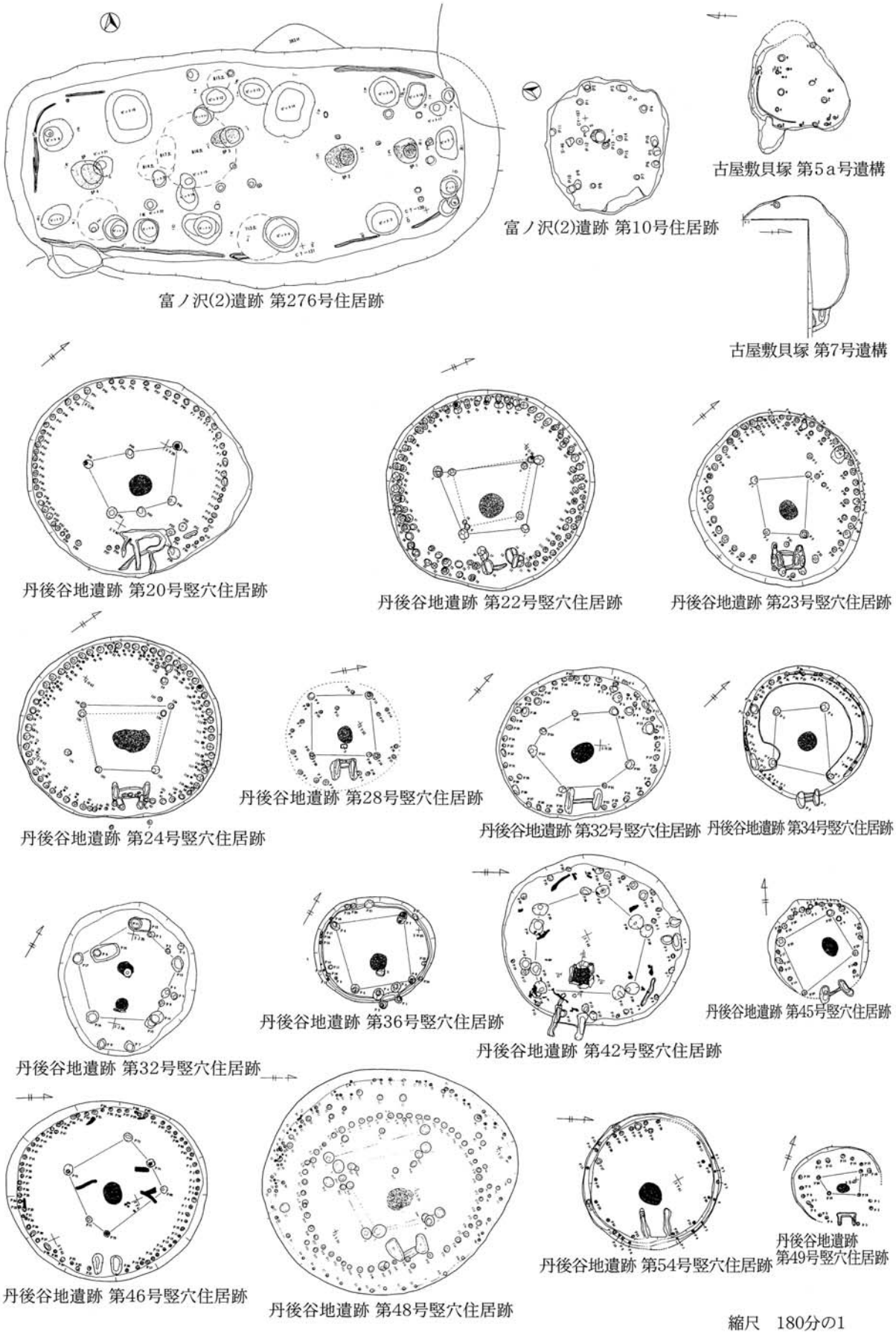

富ノ沢(2)遺跡 第276号住居跡
富ノ沢(2)遺跡 第10号住居跡
古屋敷貝塚 第5a号遺構
古屋敷貝塚 第7号遺構
丹後谷地遺跡 第20号竪穴住居跡
丹後谷地遺跡 第22号竪穴住居跡
丹後谷地遺跡 第23号竪穴住居跡
丹後谷地遺跡 第24号竪穴住居跡
丹後谷地遺跡 第28号竪穴住居跡
丹後谷地遺跡 第32号竪穴住居跡
丹後谷地遺跡 第34号竪穴住居跡
丹後谷地遺跡 第32号竪穴住居跡
丹後谷地遺跡 第36号竪穴住居跡
丹後谷地遺跡 第42号竪穴住居跡
丹後谷地遺跡 第45号竪穴住居跡
丹後谷地遺跡 第46号竪穴住居跡
丹後谷地遺跡 第48号竪穴住居跡
丹後谷地遺跡 第54号竪穴住居跡
丹後谷地遺跡 第49号竪穴住居跡
縮尺 180分の1

図７ 住居跡集成（２）

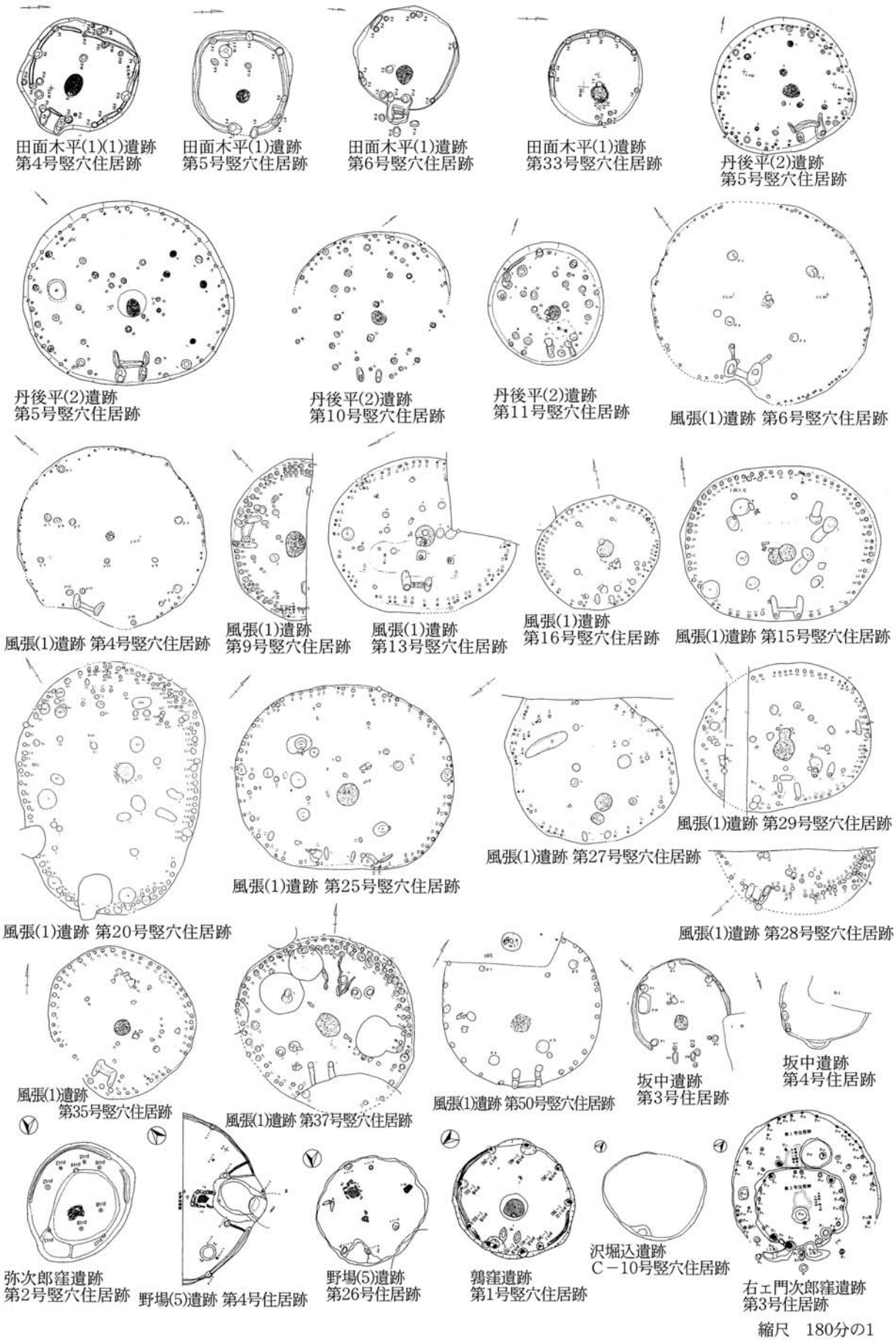

田面木平(1)(1)遺跡
第4号竪穴住居跡
田面木平(1)遺跡
第5号竪穴住居跡
田面木平(1)遺跡
第6号竪穴住居跡
田面木平(1)遺跡
第33号竪穴住居跡
丹後平(2)遺跡
第5号竪穴住居跡
丹後平(2)遺跡
第5号竪穴住居跡
丹後平(2)遺跡
第10号竪穴住居跡
丹後平(2)遺跡
第11号竪穴住居跡
風張(1)遺跡 第6号竪穴住居跡
風張(1)遺跡 第4号竪穴住居跡
風張(1)遺跡
第9号竪穴住居跡
風張(1)遺跡
第13号竪穴住居跡
風張(1)遺跡
第16号竪穴住居跡
風張(1)遺跡 第15号竪穴住居跡
風張(1)遺跡 第20号竪穴住居跡
風張(1)遺跡 第25号竪穴住居跡
風張(1)遺跡 第27号竪穴住居跡
風張(1)遺跡 第29号竪穴住居跡
風張(1)遺跡 第28号竪穴住居跡
風張(1)遺跡
第35号竪穴住居跡
風張(1)遺跡 第37号竪穴住居跡
風張(1)遺跡 第50号竪穴住居跡
坂中遺跡
第3号住居跡
坂中遺跡
第4号住居跡
弥次郎窪遺跡
第2号竪穴住居跡
野場(5)遺跡 第4号住居跡
野場(5)遺跡
第26号住居跡
鶉窪遺跡
第1号竪穴住居跡
沢堀込遺跡
C－10号竪穴住居跡
右ェ門次郎窪遺跡
第3号住居跡
縮尺　180分の1

図8　住居跡集成（3）

この特殊施設に関しては、畠山氏(畠山1993)が富ノ沢(2)遺跡の特殊施設を分析して、祭祀施設として把らえており、筆者も同様に考えている。

しかし、中期の住居跡の出入り口構造は、B類の遺構が明確でない点や、出入り口施設が少ない点など、中期の住居跡の出入り口について特殊施設も含めて再検討する必要があると思われる。

今回の集成にあたって出入り口施設をもつ住居跡の特徴として、富ノ沢(2)遺跡第276号住居跡・十腰内(1)遺跡第3号住居跡の大型住居跡や、風張(1)遺跡の第15号住居跡では出入り口の奥壁から合掌土偶が出土している点などがあげられるが、それほどの住居跡の特徴を提示できない。

最後に出入り口施設は、集落内の住居跡のすべてに存在する訳ではなく、出入り口施設を有する住居跡と無い住居が遺跡内で存在する。

つまり、集落の住居構造はすべて一定ではなく、住居の変化は社会集団の中での変化が存在していたことを意味するのではなかろうか。この事は、縄文時代後期に至って環状列石の出現・呪術遺物の増加・再葬墓の発展など、縄文時代の変革期であり、このような社会現象の中で出入り口施設も増加しており、社会の変革期と出入り口施設とになんらかの接点があったと思われる。

注

注1　石野氏(石野1995)は住居跡内の床面の固さで出入り口部を想定しているが、出入り口の中央部は階段等の施設があった為に軟らかく、固さだけという感覚的な判断は危険である。

注2　床面が一段高いベット状遺構及びテラス状遺構と呼ばれたものについては、筆者は出入り口としては認定していない。

注3　本論では、縄文時代中期の検出例を詳細に分析していない。また、三内丸山遺跡の復元家屋は出入り口が北側と西側の二方向に設置しており、北と西の相反する設置が興味深い。

注4　風張(1)遺跡の報告書では、時期を明示していないため、土器形式の認定は、筆者の判断でおこなった。

《引用参考文献》

1　新谷雄蔵(1991)『牛潟(1)遺跡発掘調査概要』車力村文化財調査報告書第2集　車力村教育委員会
2　赤羽真由美・神康夫(1999)『十腰内(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第261集　青森県教育委員会
3　石野博信(1995)『古代住居のはなし』吉川弘文館
4　宇部則保(1988)『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ　－丹後平遺跡(2)－』八戸市埋蔵文化財調査報告書第27集　八戸市教育委員会
5　遠藤正夫(1990)『弥次郎窪遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第128集　青森県教育委員会
6　岡田康博(1985)『尻高(4)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第89集　青森県教育委員会
7　小笠原善範・村木淳(1991)『風張(1)遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集　八戸市教育委員会
8　小笠原善範(1995)『八戸市内遺跡発掘調査報告書7－坂中遺跡－』八戸市埋蔵文化財調査報告書第61集　八戸市教育委員会
9　小笠原雅行(1998)『三内丸山遺跡X』青森県埋蔵文化財調査報告書第250集　青森県教育委員会
10　葛西励・児玉大成(1992)『鞍越・袰川遺跡発掘調査報告書』川内町教育委員会
11　木村鉄次郎(1992)『沢堀込遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第144集　青森県教育委員会
12　小宮恒雄(1990)『特集古代の住居－住まいの入り口－』季刊考古学32号　雄山閣
13　更科源蔵(1968)『歴史と民俗アイヌ』社会思想社
14　杉山 武(1980)『金木町神明町遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第58集　青森県教育委員会
15　鈴木克彦(1986)『上北町古屋敷貝塚Ⅱ－遺構編－』上北町教育委員会
16　相馬信吉(1982)『右エ門次郎窪遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第69集　青森県教育委員会
17　成田滋彦(1980)『大面遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第55集 青森県教育委員会
18　成田滋彦(1985)『大石平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第90集　青森県教育委員会
19　畠山昇・岡田康博(1988)『上尾駮(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第115集　青森県教育委員会
20　畠山昇・中嶋友文(1992)『富ノ沢(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第143集　青森県教育委員会
21　畠山昇(1993)『富ノ沢(2)遺跡Ⅵ』「特殊施設について」青森県埋蔵文化財調査報告書第147集　青森県教育委員会
22　畠山昇・三浦孝仁・成田悟(1993)『野場(5)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第150集　青森県教育委員会
23　福田友之(1983)『鶉窪遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第76集　青森県教育委員会

24　藤田亮一・宇部則保・村木淳・小笠原善範（1986）『丹後谷地遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集　八戸市教育委員会
25　藤田亮一・宇部則保・村木淳(1988)『田面木平遺跡(1)』八戸市埋蔵文化財調査報告書第20集　八戸市教育委員会
26　藤田亮一(1991)『風張(1)遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第40集　八戸市教育委員会
27　古市豊司・市川金丸・大湯卓二(1977)『水木沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第34集　青森県教育委員会
28　宮本長二郎(1984)『縄文時代の竪穴住居跡』季刊考古学第７号　雄山閣
29　武藤康弘(1997)『住の考古学』「縄文時代前期・中期の大型住居の研究」　同成社

－資料再発掘－

# 縄文時代の灯明具？
## －小型土器の用途のひとつとして－

白 鳥 文 雄

当センターでは平成11年度から、過去20数ヶ年に及ぶ発掘調査で出土した収蔵遺物の収蔵替え作業を行ってきた。この移動作業において、一瞥した程度ではあるが、過去に報告された多くの遺物に接する機会に恵まれた。特に特別収蔵庫に収蔵されていたセンター発足当時の復元土器については梱包のために直接手にするものも多く、報告当時は着目されていなかったようなことがらについても新たな視点で観察することができた。こうした観察を通して新たに発見できた情報もいくつかあったが、今回はその中の１点について取り上げてみたい。

今回紹介する資料は、昭和52年度に刊行した『熊沢遺跡』（青森県埋蔵文化財調査報告書第38集）に所収されている土器で、報告書中では、縄文時代前期の円筒下層ａ式の小型土器として分類された内の１点である。器高 7.8㎝、口径 8.8cm、底径 6.4cmの器外面及び底部に綾絡文が施文された完形品で、報文中では土器の特徴及び写真（134Ｐ、PL77－73－370Ｐ）は記載されているものの、実測図は掲載されていない。

今回、新たに取り上げた理由は、内面の炭化物の付着状況が最近認識されてきた平安時代の「灯明具」のものと酷似していたためである。

本資料における炭化物の付着を概観すると、炭化物は全体に黒色の煤状のもので、内外面とも数カ所に付着しており特に内面で顕著である。

最も付着の度合いが高い部分は、口唇部の小さな凹み部分を中心とした範囲で、内面の口縁部から逆台形状に付着がみられ、部分的に塊状のざらついた炭化物が付着している。また、外面の炭化物も、この凹み部分を頂点とする亀裂に沿って付着している。

凹み部分は、意図的な加工か被熱に起因したかは不明であるが、逆三角形に抉れ、器壁も薄くなっている。

（内面俯瞰）

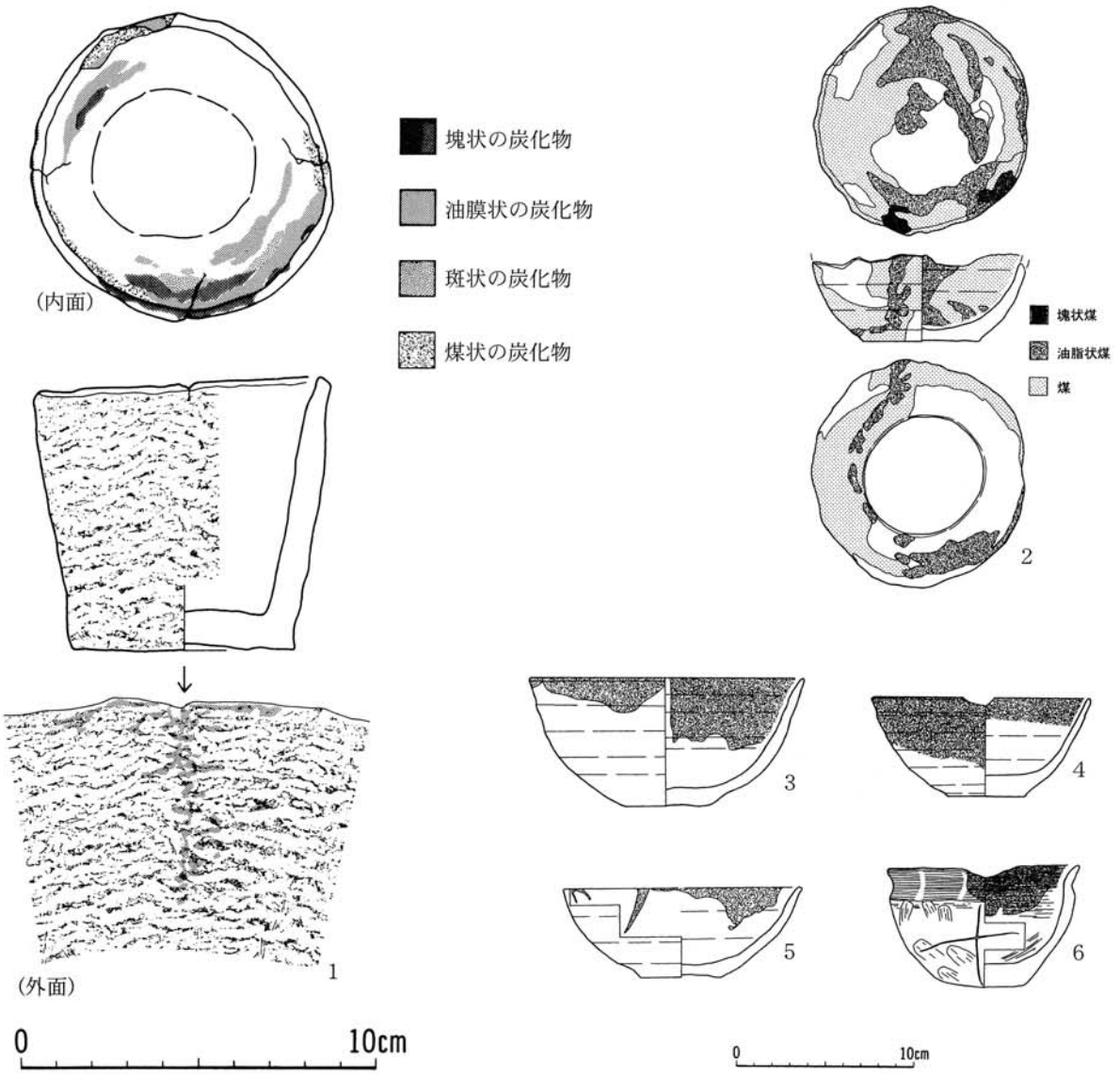
（外面）

（反対側）

図１　炭化物の付着状況

これらの炭化物は、土器の外面には被熱の痕跡がないことから、いわゆるスープ状炭化物と呼称される煮炊きに伴うものとは考えられず、むしろ、土器内部における油脂または樹脂の燃焼に伴う煤状炭化物と考えたほうがより妥当である。燃焼部分としては最も被熱の痕跡が著しい口唇部の凹み部分が考えられる。また、外面の炭化物もタール状のものが滴下したか、あるいは亀裂からしみ出た油分によって多くの煤が吸着したものと考えられる。

「灯明具」として認識された平安時代の土師器（図２－２～６）と比較してみると、本資料と同様に口縁部付近に炭化物の付着が集中していることが理解される。特殊な例かもしれないが、２は非常に多量の炭化物の付着が認められる土器で、これも本資料と同様に塊状の炭化物の付着が目立つものである。また、他の平安時代のものも口唇部の一部に凹みがみられるものが多い。ただし、坏や皿のような口径が大きいものを使用していることから、本資料や２のように外面に垂下したような炭化物の付着は少ないようである。




（２～６、朝日山(1)遺跡出土
『朝日山遺跡Ⅲ』県埋文報第156集）

図２　炭化物付着状況及び平安時代の「灯明具」

これらの状況から、本資料は、平安時代の「灯明具」に類似または同様の使用が考えられる。

ただ、本資料の確認後に、特別収蔵庫内の小型の円筒土器及び他の時期の小型土器を概観したが、口縁部に小範囲の炭化物が付着しているものは数点あったものの、内面に明瞭な痕跡のみられるものは確認できなかった。特別収蔵庫内の限られた資料の検索であったことから、他の収蔵庫内の破片資料や、最近の出土資料にはほかにも存在する可能性は考えられる。しかし現段階では、このような痕跡を持つ土器は、知り得る限りではこの１点である。このため、はたして日常的な「灯火」用として機能していたかどうかは疑問が残るところである。

ここで推論にすぎないが、本稿を書くに当たって思い当たった疑問点と所見を述べてみたい。

まず、用途については、「灯明具」的な使用が妥当と考えられるが、確認点数が少ないことから、現段階では特殊な類と考えたい。「灯火」用とすれば、祭祀を含め特別な時に使用されたものの可能性が高く、また他の使用法としては、たとえばアスファルト等の膠着剤の軟化・溶解用の熱源などが考えられる。

次に燃料となる油脂に関しては、ある程度の流動性を持ったものが妥当と考えられる。鉱物性のもの（石油類）は揮発性があり使用時までの保存に難があり、また、大型獣や海獣の油脂は常温で固結することから、「魚油」がもっとも可能性が高いものと考えられる。ただし、その当時に植物油の圧搾が行われていたとすれば、この限りではない。

なんら結論めいたことは述べらず、単に資料紹介の域に留まってしまったが、縄文時代前期に平安時代の「灯明具」と同様の使用痕跡を持った土器が存在していたことは、小型土器の用途について考える上で何らかの手がかりになるものと思われる。

今後、縄文時代の各時期を問わず、類似資料の増加が期待されるところであり、個人としても、折に触れ類例を集めていきたいと考えている。

また、自分自身も過去において多くの見落としがあったことも反省材料として、出土土器の観察においては、施文原体や土器型式に終始するだけではなく、さまざまな視点からの観察所見も今に増して記載することを提案したい。

# 南郷村畑内遺跡出土のすり石について

茅　野　嘉　雄

## 1　はじめに

縄文時代の遺跡から出土する石器には様々な種類が知られているが、特に礫石器に関していうならば、石斧、凹み石、すり石などが主要な種類としてあげられる。筆者は平成９年度に南郷村水吉遺跡の整理作業に携わったが、その過程において前述の３つの石器のうち、特にすり石と呼ばれる石器の量の多さと折損率が高いこと、そして折れているものの中に付着する特徴的な使用痕に気が付いた。本稿は水吉遺跡と近接する縄文時代前期～中期初頭の大集落遺跡である南郷村畑内遺跡出土資料のうち、過去に整理された分を対象として、縄文時代の中におけるすり石のあり方の一端を明らかにしようとするものである。

## 2　遺跡の概要とすり石の出土状況

畑内遺跡は青森県と岩手県の県境に位置する南郷村に存在し、岩手県九戸村を源流とする新井田川の東岸の河岸段丘上に位置している。遺跡からは平成11年度の調査終了時点の累計で竪穴住居跡133軒、土坑507基、埋設土器80基、円筒下層式期の捨て場６箇所が確認されており、出土遺物の総数は4,000箱を越える。これまで報告された分での礫石器の石器組成は図１のとおりであり、礫石器の中におけるすり石の占める割合（42％）がかなり大きいことがわかる。また、遺構内・外を問わず出土しているようである（捨て場からは大量に出土している）。

## 3　すり石の種類と折損率について

さて、本稿で取り扱うすり石の範囲であるが、次のように定めたいと思う。「素材に砂岩や輝緑岩、凝灰岩などの石材を使用し、側面にある程度の幅のあるすり面を持つもの。」

素材についてなぜこのようにしたかというと、畑内遺跡に限らず円筒土器文化の遺跡には、半円状扁平打製石器という形状の似た石器が存在するからである。半円状扁平打製石器については、粘版岩や頁岩などの板状摂理により割れやすい石材を使用する傾向があり、また、使用辺の稜線は平坦な面をあまり持たないため、すり石とは別にしたものである。すり面についてはある程度の幅のすり面が側辺全体に広がるものと、断続的に繋がるもの、すり面がなく稜線が続くものとがある。これについては前者が使用の最終段階、中、後者はすり面側から大きめの剥離が施されている例が多いことから、機能面再生によるすり面の減少と再使用の状態と考えられる。以上のような遺物は畑内遺跡から319点出土しており、大きく次のように分類される（図２）。１類：側面２に両面からの加工を施し、半円状に仕上げているもの。２類：側面２に加工がないもの。３類：１と２の中間的なもの。４類：所謂三角柱状磨石・特殊磨石などと呼称されるもの（各部位の名称については図３を参照）。以上であるが、１類と３類の側面２の加工については、機能に関係する加工というよりは２類のような形をイメージし、半円状に形を整えるためと考えられる（しかしながら、側面２に敲打痕を持つものも存在するためこの面を使用しているものもある）。各類の比率は次の通りである。１類33％、２類50％、３類８％、４類９％。

次に各類の折損率（折れた状態で出土したものの割合）であるが、全体の比率は42％であり、類別ごとの比率は１類39％、２類31％、３類48％、４類52％となっている。（４類と３類は個体数が少ないため多く欠損しているように見える）ここではさらに折れ方についても注意を払ってみる。折れ方の模式図は図４に示す。折れる部位としては多くが器体中央部付近で２つに割れているという状態で

あるが、折れ方としては大きく以下の２つに分けることができた。A類：折れ面と正面がほぼ直角に交わっているもの。B類：折れ面と正面が浅い角度で交わっているもの。なお、A類については側面１との角度を計測し、分布を調べてみた（図５）。概ね80度～88度に分布の中心がきていることがわかる。A類とB類の比率はそれぞれ76％・34％である。また、B類には折れ面に使用痕が付着しないという結果が得られた。

## 4　折れ面に観察される特徴的な使用痕について

前項まではすり石の折れ方と折損率についてまとめたが、ここではその折れた面に観察される使用痕についてまとめることとする。

使用痕の付着位置とその観察

使用痕は次のような位置に付着していた（図５）。ａ：折れ面の側面１側の端部。ｂ：ａとその反対側。ｃ：折れ面端部に密着しないもの。ｄ：その他。以上があるが、８割以上がａの位置に付着している。また、接合資料等をみると、使用痕が付着しているところはすり減っていることがわかる（図７）。使用痕の肉眼観察では、次のような特徴がみられた。１：表面はすり石の使用痕と違い、かなり滑らかであり、若干光沢を持っている。２：折れ面の凸部だけではなく凹部にも使用痕が付いている。３：使用痕の端部から反対方向に向かうに従って使用痕は明瞭ではなくなる。４：２に関係して、使用痕表面は折れ面の凹凸に沿ってなめらかに波打っているものがある。また、顕微鏡で折れ面の使用痕を観察してみたが、若干の光沢が観察されただけで、使用に伴う線条痕等は観察されなかった（条件の良いものであれば見えるかもしれないので、今後出土した資料に関しては注意を要する）。なお、使用痕の付着率は20％（１～３類の合計値）となっている。４類については全く付着しないという結果がでた。

分布域と帰属時期

現在このような使用痕の観察されるすり石は青森県下で７遺跡を確認している（表１）。また、隣県である岩手県では９遺跡を確認している。時期的には県内では縄文前期円筒下層式期（下層ｄ式期が多いか？）を中心に縄文中期円筒上層式期まで確認されている。岩手県では県北部で円筒下層ｄ式～上層ａ式に伴ってまとまって確認され、県央では盛岡周辺で大木６式～８式に伴って、県南では大木８式に伴って確認されている。早期、後期、晩期の確実な資料はまだない。県内外を問わず縄文時代前期中葉～中期中葉にかけての資料がほとんどである（北海道・秋田県・宮城県・山形県に関しては確認されなかった）。ただし、中期中葉（円筒下層ａ～ｂ式期）の確実な例はまだない。

## 5　まとめ

本稿では主に畑内遺跡の出土遺物を中心にすり石の折れについて検証した。すり石（縄文時代前期～中期のもの）には次の特徴があることがわかった。１、欠損率が他の礫石器（磨製石斧を除く）に比べて高い。２、器体中央部から折れるものが多い。３、折れ面に使用痕が付着するものがある。以上である。本稿では手元ですぐみられる資料と報告書に掲載のある資料のみを扱ったために、見落としはかなりあると思われる。また、すり石そのものの使用法についても、折れ方に密接に関わるものと考えられるが、今回は深く追求できなかった。今後の課題である。

参考文献

青森県教育委員会1998　『水吉遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第245集

沼宮内陽一郎1998「半円状扁平打製石器の機能面について」『桜峯(1)遺跡』青森市埋蔵文化財調査報告書第36集

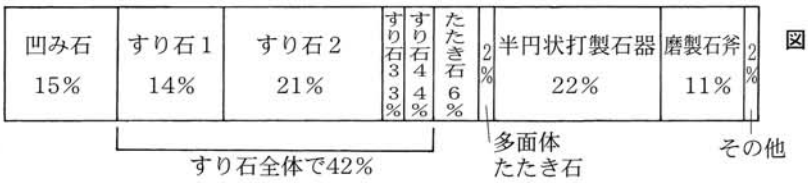
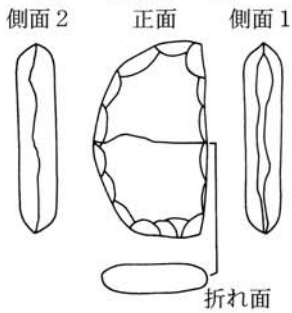
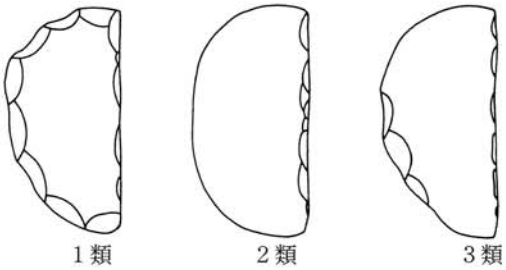



図1　礫石器器種組成

図3　各部位の呼称



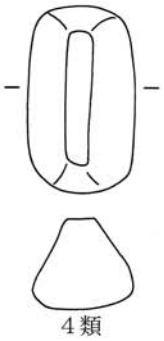




図2　形態分類図

図4　折れ方

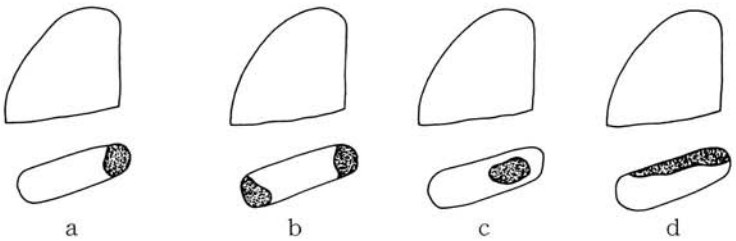



図5　使用痕の付着位置

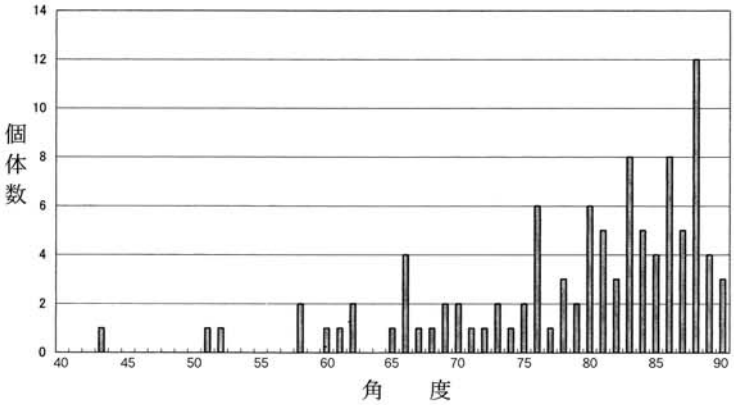



図6　折れ面角度分布

表1 折れ面に使用痕のあるすり石出土遺跡

青森県

| 遺跡名 | 出土状態 | 時期 | 点数 | 市町村 | 出典 |
|---|---|---|---|---|---|
| 水吉遺跡 | 包含層 | | 4 | 南郷村 | 青森県245 |
| 桜峯(1)遺跡 | 住居跡 | 円筒下層d2 | 1 | 青森市 | 青森市36 |
| 明戸遺跡 | 包含層 | 円筒下層d | 1 | 十和田市 | 十和田市3 |
| 三内丸山(6)遺跡 | 土坑内・包含層 | 中期中葉 | 3 | 青森市 | 青森県257 |
| 畑内遺跡 | 住居・土坑・捨て場 | 円筒下層 | 24 | 南郷村 | 青森県161・178・187・211・262 |
| 三内丸山遺跡 | 包含層 | 中期中葉 | 1 | 青森市 | 青森県251 |
| 近野遺跡 | 遺構外 | 円筒上層e | 1 | 青森市 | 青森県47 |

岩手県

| 遺跡名 | 出土状態 | 時期 | 点数 | 市町村 | 出典 |
|---|---|---|---|---|---|
| 西田遺跡 | 遺構外 | 大木6～8b | 2 | 紫波町 | 岩手県51 |
| 下谷地・元御所Ⅰ・Ⅱ | 遺構外 | 円筒・大木6～7a | 35 | 零石町 | 岩埋文28 |
| 塩ガ森Ⅰ・Ⅱ遺跡 | 遺構外 | 円筒、大木 | 75 | 零石町 | 岩埋文31 |
| つなぎ遺跡 | 遺構外 | | 1 | 盛岡市 | 58年概報 |
| 大館遺跡群 | 遺構外 | 大木8a？ | 1 | 盛岡市 | 58年概報 |
| 成田遺跡Ⅱ | 住居跡 | 大木7b | 1 | 北上市 | 北上市3 |
| 大日向Ⅱ遺跡 | 遺構外 | | 1 | 軽米町 | 岩埋文273 |
| つなぎ遺跡 | 遺構外 | | 1 | 盛岡市 | 平成5・6年度概報 |
| 崎山貝塚 | 遺構外 | 大木7新 | 1 | 宮古市 | 宮古市44 |
| 鳩岡崎 | 住居跡 | 大木6～8a | 1 | 江釣子村 | 岩埋文 |

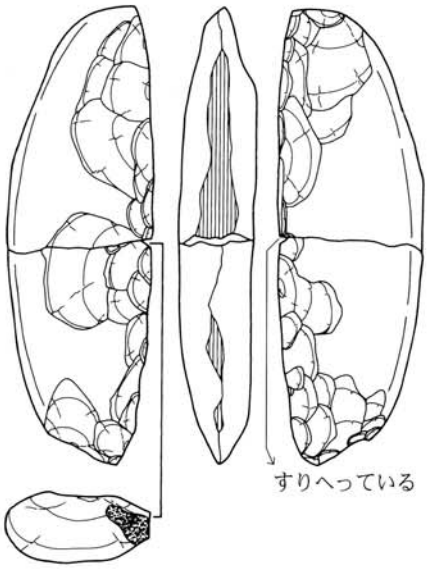



図7　第140号土坑出土すり石
(再実測)

# 東北地方北部の青木畑式土器

永 嶋 豊

## １ はじめに

東北地方北中部の弥生時代前期初頭の土器型式は、津軽地方を中心に分布する『砂沢式』、東北地方中部太平洋側を中心とする『山王Ⅳ上層式』、日本海側の庄内地方で確認されている『生石2式』があげられる。『砂沢式』に続くものとして『五所式』(村越 1965津軽地方中心に分布)・『二枚橋式』(下北上北地方中心)、『山王Ⅳ上層式』に続くものとして『青木畑式』→『山王Ⅲ層式』の流れが考えられている。

青木畑式土器は宮城県一迫町青木畑遺跡出土資料を基準資料とし、山王Ⅳ上層式に後続し、山王Ⅲ層式に先行することが型式設定当初から指摘されていた(佐藤1980 加藤1982)が、近年の東北大学による岩手県中神遺跡の調査における層位的出土によって実証された(須藤1997)。青木畑式土器は北上川流域を中心に仙台平野・岩手県三陸沿岸に主体的に分布し、山形県内陸の村山地方の蟹沢遺跡出土土器群も高坏の形態に青木畑式と共通性を有する。東北地方北部では、青木畑式に先行するとされる砂沢式期の水田跡が青森県弘前市砂沢遺跡で検出されて久しい。遠賀川系土器の存在もあわせ、遠く西日本に由来する水田稲作技術の導入期は、現段階では砂沢式期またはそれ以前と考えられよう。生石２式は、山形県庄内地方で確認されている。砂沢式の分布範囲は、秋田県北部域・青森県域・馬淵川・新井田川流域までと考えられる。福島県を除けば、この生石２式・砂沢式の分布範囲と弥生時代前期初頭の遠賀川系土器の分布範囲は一致している。弥生時代前期初頭(砂沢式期)の遠賀川系土器は、生石2式・砂沢式に伴うと考えられ、山王Ⅳ上層式の分布範囲と考えられる北上川流域・三陸沿岸・宮城県域にはほぼ皆無であることが明らかになっている(佐藤嘉広1989･1991･1992･1994)。東北地方中部太平洋側では東北地方日本海側や馬淵川・新井田川流域より1型式期遅れ、青木畑式段階で、それらの要素が受容されると考えられている。東北地方北部では、近年、弥生時代前期土器及び竪穴住居跡等の検出例の増加から、資料数は着実に増加しているが、土器の編年的位置付けに関しては、縄文時代晩期末(大洞A'式)～弥生時代前期として報告されている例が多い。その中には砂沢式以後・青木畑式期の土器を含むものも多く、特に該期の新井田川・馬淵川流域は土器型式の接触地域と考えられてきただけに、社会変化の様相を把握する為には、その時期決定の指標ともなる土器型式内容に対する正しい評価を示す必要があろう。

今回、東北地方北部の該期の時間軸の整理に、主要分布圏が異なる青木畑式土器を中心に扱った理由は、北上川流域の青木畑式→山王Ⅲ層式という流れが確立されたものであるということと、津軽地方の砂沢式以後とされる五所式土器(村越1965)の基準資料が量的に乏しく、型式内容が必ずしも明らかになってはいない為である。現在では、『五所式』は津軽地方の砂沢式土器以後の段階を示す概念として既に定着しており、新資料を用いての型式内容の再整理が望まれる。本論では馬淵川・新井田川流域の資料を多く扱い、３型式とも分布域である為、時期の呼称には砂沢式期・青木畑式期・山王Ⅲ層式期を用いた。

各地の出土資料より、青木畑式土器は砂沢式に近い段階･青木畑式単純段階･山王Ⅲ層式に近い段階が存在すると考えられる為、それぞれ青木畑式(古)段階･青木畑式(中)段階･青木畑式(新)段階と仮称

する。青木畑式(古)段階は砂沢式期の一部を含み、(新)段階は山王Ⅲ層式期の一部を含む。本論では、東北地方北部の青木畑式的な土器群をピックアップし、大まかな新旧関係を明らかにした上で、特徴的な細別器種の分布範囲を把握することによって、土器の動きの特性を明らかにしたいと考えている。

## 2 青木畑式土器の基準資料

青木畑遺跡は、宮城県栗原郡一迫町の一迫川・長崎川が形成した沖積平野西端部の自然堤防上に位置する。佐藤信行が大洞A'式と山王Ⅲ層式の間に入る土器群として、表採品等を発表している(佐藤1980)。1972年に宮城県教育委員会により発掘調査が行われ、その型式学的特徴から、大洞A'式に後続し山王Ⅲ層式に先行する土器型式に位置付けられた(加藤道男1982)。須藤隆は、「東北地方の初期弥生土器－山王Ⅲ層式－」中で、山王Ⅲ層式と共に青木畑式にも触れ、青木畑式は変形工字文C1型主体・山王Ⅲ層式は変形工字文C2型主体であることや細別器種の有無など相違点は存在するが、器種類型・組成比率は極めて良く共通していることを指摘している(須藤　1983)。また須藤は、岩手県花泉町中神遺跡の調査において、従来から確実視されていた青木畑式の編年的位置を層位的出土例から実証した(須藤1997)。佐藤・加藤・須藤の考える青木畑式土器の編年的位置・型式学的特徴はほぼ共通している。以上３人の研究者の考え方を参考にし、各型式間の相違点をまとめたものが表１である。

表１　砂沢式→青木畑式→山王Ⅲ層式の変化点

| | 砂沢式・山王Ⅳ上層式段階→青木畑式段階の変化点 | 青木畑式段階→山王Ⅲ層式段階の変化点 |
|---|---|---|
| 新出器種 | 蓋・上膨筒形土器・有段高坏 | 坏部全体が直線式に広がる高坏 |
| 甕・甕用蓋 | 平坦口縁の甕と粗製の蓋のセットが出揃う。<br>深鉢・甕の口唇部キザミは少数 | 平坦口縁の甕形が増加し、蓋とのセットがより多くみられるようになる。肩部が張り出し、頸部がより大きく外反するものも増加する。 |
| 変形工字文 | 変形工字文Ａ型→Ｃ１型へ変化し、底角部が丸みを持って反転し上下幅を有する | 変形工字文Ｃ２が盛行（底角反転部の上下幅が大きくなる） |
| 変形工字文各要素 | 変形工字文各部の彫り込みやそれに伴う粘土粒の貼付が非常に少なくなる。 | 変形工字文各部の彫り込みやそれに伴う粘土粒の貼付がほぼ消滅する |
| 高坏脚部 | 高坏脚部が大型化し、内彎気味に立ち上がる。平行沈線や２～３条一組の波状文や横型の変形工字文Ｃ１型が施される。 | 波状文が盛行し、高杯脚部の他に、高杯・鉢や壷の体部にも見られ、３～４条一組と多条化する傾向がみられる。 |
| 磨消縄文 | 極少数 | 磨消縄文が盛行し、重填縄文も見られる |
| その他 | 高坏突起には大きなものがみられる<br>変形工字文の沈線がふるえ途中で途切れるものが見られる | 高坏・鉢・壷などの装飾的な精製土器には、北上山地起源と考えられる金雲母が多量に混和される。<br>篦ミガキの多用・沈線の細線化・有段高杯も存在 |

佐藤・加藤・須藤が用いた基準資料は北上川中下流域の宮城県域のものが中心である。これを地域性を異にするであろう馬淵川・新井田川流域に適用させることは問題があろうが、土器型式として確立している北上川中下流域と対比することは、馬淵川・新井田川流域の土器群の時間的組列確立の近道であろうし、互いの地域性を浮き彫りにもできよう。

## 3　各地の青木畑式期土器

津軽地方・馬淵川流域を中心に青木畑式期の土器・土器群をあげ、その帰属時期を考えてみたい。しかし遺物の一括性・同時性が高い土器群が、非常に少ないことが問題としてあげられる。良好な一括性を有していそうな遺構内出土資料も、床面出土と覆土出土とでは、その廃棄・埋没ケースによってそれぞれの同時代性は異なるであろうし、厳密な意味での一括土器は、焼失住居床面出土資料や一時期に複数個がおさめられた埋設土器等に限定されるため、一般に資料数は限られてくる。また床面出土と埋土出土の認定も、調査担当者によって異なる。特に報告段階で、出土層位や資料の一括性に触れないものも多く、非常に悩まされた。そのため今回は、住居跡の場合は、まとまりを持つ床面出土

資料を基本としながらも、覆土中のものや包含層出土のものでも同一型式内の特徴と見られるものは、同時期と考えたものもある。もうひとつの問題点として、型式変化のとらえ易い属性を有する一部の器種(高坏・浅鉢等)が、多くの場合、土器群全体の帰属時期決定の指標となることである。

青木畑式期の特定の細別器種は、山王Ⅲ層式期に継続するものが多い。また両型式の特徴を有する土器が同じ遺跡で出土している場合も多く、両者の分離が困難であった。このことは型式変化が基準資料から基準資料への変化といった急激な変化ではなく、両型式が一時期において、同時性を有する可能性を示唆している。須藤隆は、青木畑式と山王Ⅲ層式古段階の関係は若干の時間差もしくは同一段階とみている(須藤1983)。その中でも、青木畑遺跡の資料は、他型式をほとんど含まずに、比較的単純な状態で検出されており、東北北部でも該期社会の把握には、基準となりうる資料の選択・確立が必要であろう。

【青森県津軽地方～秋田県内陸北部】

**[砂沢遺跡]** 青森県弘前市

砂沢式土器の標式遺跡であるが、砂沢式またはそれに後続する土器群に伴って、青木畑式または山王Ⅲ層式期のものと考えられる高坏が出土しており(4)、金雲母を含むものもある(1・3)。1992年刊行の『弘前の文化財ー砂沢遺跡ー』中に、報告書未掲載であったA10区出土資料が報告されている。これは本報告において矢島敬之がA8区出土土器群と共に砂沢式に後続する土器群に分類し、五所式期・井沢式期に位置付けたものであり、一括性は不明であるがA10区土器には青木畑式的な高坏が2点みられる(2・5)。

**[宇田野 (2)遺跡]** 青森県弘前市

砂沢遺跡の南2ｋｍの地点で、岩木山の麓の大石川が本流岩木川と合流する地点より西方2ｋｍの標高30～40m程の中位段丘上に位置する。石鏃やベンガラが出土した、5基の土坑墓が検出されている。墓域から50m程南の谷地形の遺物密集地点から、縄文時代前中期の土器などと混じって弥生時代前期の土器が出土している。砂沢式の高坏や鉢や無文帯を有する煮沸用の深鉢・鉢が出土している。しかし砂沢式期よりも新しい要素を含む土器も多い。鉢に施された楕円文の存在(11)、流水状工字文(8・10)・変形工字文(13)の底角部が丸みを帯び反転し上下幅を有すること・変形工字文の斜辺が多条化(変形工字文B型化)するように見えるものの存在(6・7)・やや内湾しながら立ち上がり、平行沈線文と無文部で装飾される高坏台部の存在(14・15)・口頸部に波状文が施された鉢の存在(9)等である。これらの土器群は砂沢式以後と考えられる。当遺跡にも砂沢遺跡同様、岩手県域からもたらされたと考えられる金雲母を多く含む土器が見られる。観察したところ、報告書掲載土器中、高坏3点と壷1点が確認できた(12・15・16・報告書中84)。12は変形工字文が施される平坦口縁の高坏、15は3条一組の平行沈線文が施される脚部である。16は口縁部に平行沈線や平行工字文が施される縄文時代晩期後葉からの伝統的な壷である。出土状態は、各土器混在であるので、同時代性は明らかではないが、砂沢式期の土器を含みながらも、新出要素または青木畑式的様相を示すものもあり、青木畑式(古)段階と考えたい。

**[上牡丹森遺跡]** 青森県南津軽郡大鰐町

縄文時代後期後葉の住居跡と重複している第2号住居跡から、青木畑式期と考えられる遺物が出土している。18の頸部無文となる鉢も砂沢式以後の要素であろうし、17の肩部の張り出しもやや新しい

要素であろう。また19の高坏は大型の台部に平行沈線が施され、坏部が緩やかに内湾しながら立ち上がり平坦口縁となり、青木畑式～山王Ⅲ層式期に北上川流域や馬淵川・新井田川で認められる形態である。遺構外からではあるが、遠賀川系の可能性のある壷の肩部破片も出土している。高坏・小型鉢(20・21・22)の細線化が進んでおり、青木畑式の新しい段階と考える。

**［諏訪台C遺跡］** 秋田県大館市

米代川の支流である長木川流域の標高102～105m程の舌状台地上に位置する。砂沢式前後の竪穴住居跡が6軒検出されている。住居跡内からは良好な一括出土土器が3群確認され、報告者の利部修によってそれぞれ縄文時代晩期末葉～中間的な土器群～弥生時代初頭の土器に比定されている。その中に金雲母を含む土器として4点の土器があげられており、岩手県域からの搬入の可能性が高いとされている。SI61の27の高坏は金雲母を含み、坏部は平坦口縁となり反転部の上下幅の広い縦型流水状工字文が施され、台部は3条の平行沈線2組で装飾されている。青木畑式期に近い段階の土器であろうか。また遺構外出土の29の高坏も同様の台部を有し、変形工字文も大日向Ⅱ遺跡出土の高坏(67)と同様に長楕円を基本線としたものであり、砂沢式期以後の要素と考えられよう。28の高坏は、脚部文様間に刺突が施され、砂沢式的である。脚部に鋸歯文が施される例は東北地方北部で散見され、波状文へと変化していくものと考えられる。その他SI61出土の鉢23の横長楕円文とSN床出土鉢26の沈線が途切れる変形工字文は生石2遺跡や青木畑遺跡に、24と25の全面に横走沈線が施される鉢は生石2遺跡や君成田下野場遺跡や下北郡川内村戸沢川代遺跡に類例がある。砂沢式的な土器に、青木畑式的土器も含まれ、青木畑式期(古)段階に位置付けたい。

**【下北地方・青森県東南部～岩手県内陸北部】**

**【戸沢川代遺跡】** 下北郡川内村

戸沢川によって侵食された海岸段丘が、舌状に南方に張り出した丘陵突端に位置する。該期の遺物は、すべて遺構外からの出土である。掲載されている実測図の鉢の文様は、横型の流水文を多用(33・34・36・38)すること、変形工字文斜辺が波状文による構成である(32・35・37)こと、変形工字文間に斜辺と刺突が充填されることなど、砂沢式よりは後出の土器群であり、二枚橋式以前の土器群と考えられる。

**［八幡遺跡］** 青森県八戸市

馬淵川の右岸標高6～20mの低位段丘上に位置する。昭和62年度の調査で、弥生時代前期土器と共に、遠賀川系土器の甕と壷が出土している。この中には砂沢式段階のものと砂沢式に後出する段階のものが含まれている。また平成2年度の調査で、第12号住居跡床面直上(2層)の土壌から、コメ・オオムギ・コムギ・アワ・ヒエ・キビなどの栽培植物の種子が検出されている。分析者の吉崎昌一は栽培植物種子278粒中129粒は確実にコメが含まれることから、12号住居居住者のコメに対する強い関心を指摘している。床面直上とされる2層から弥生時代前期土器が多く出土しており、39の高坏の変形工字文の幅広の反転部・41や42の平坦口縁甕・40の有段状の高坏は青木畑式的である。その他、木目状列点文が施された遠賀川系壷と壷用の蓋が見られる。

**［弥次郎窪遺跡］** 青森県八戸市

弥生時代前期の竪穴住居跡が2軒検出されている。7号住居跡では、石囲土器埋設炉＋壁柱穴が検出され、炉体土器の(台付？)鉢(49)には、砂沢式～二枚橋式に見られる比較的単純な構成の波状工字文

が施され、肩部が強く張り出す。類例は、馬場野Ⅱ遺跡LⅥ04住居から出土しているLⅥ0086Cがあげられる。肩部が下がり張り出す小型壷(50)は、縦型の流水状工字文が施され、平坦口縁甕も出土している。類似した小型壷は軽米町和当地Ⅰ遺跡E14住居跡の波状文が描かれるものや津軽地方日本海沿岸の深浦町津山遺跡第1号住居跡で出土している。津山遺跡例は変形工字文が多条化しており、沈線の細線化と口縁内面沈線の多条化といった五所式と類似した特徴を有する高坏又は鉢と共に出土している。9号住居跡は覆土中から山王Ⅲ層式期の高坏(52)が出土している。耕作による破壊の為、残存しないが9号住居も7号住居同様に土器埋設炉が想定されており、壁柱穴も検出されている。

**[田面木平遺跡]** 青森県八戸市

弥生時代前期の住居跡1軒と遺構外から遺物が出土している。36号住居跡では、石囲土器埋設炉＋壁柱穴が検出されている。土器は床面出土から2点、1層出土から2点が掲載されている。楕円文が横位に連続する高坏(46)と、肩部に列点文が施された長胴の広口壷(48)である。48の広口壷は、縄文地文に平行沈線と列点文で施文され、津軽の井沢式の装飾に類似している。1層出土の鉢(47)は短沈線が横位･斜位に描かれており、諏訪台C遺跡で出土している平行沈線が全面にめぐる鉢に類似する。また土器底面に沈線が施される例は、深浦町津山遺跡の第2号住居跡出土の小型壷があげられる。44は小型の甕であるが、口頸部が上下幅を持ち発達し、砂沢式以後であることが想像できる。46の横位に連続する楕円文や47の沈線で全面が埋まる鉢は青木畑式期と考えたいが42の壷の帰属時期が新しそうなこと、44の甕の口頸部が発達することからやや新出の可能性がある。遺構外からは、沈線が多条化･細線化した変形工字文が施される高坏が出土している。変形工字文内外の中点部は彫去や粘土粒貼付といった古い要素もみられるが、青木畑式の新しい段階と考える。

**[牛ヶ沢(4)遺跡]** 青森県八戸市

竪穴住居跡が4軒検出されている。4軒とも、壁柱穴と4本の主柱と石囲炉を有し、炉は3軒までが、土器埋設炉またはその痕跡が残る。各住居跡出土の甕や高坏から砂沢式以後の特徴を持つことは確実である。第6号住居跡床面から出土した高坏(53)は、比較的細めの沈線で、変形工字文C1型→C2型への中間的文様が施される。また大日向Ⅱ遺跡SA32住居跡から出土している高坏(64)は、牛ヶ沢(4)例とは文様モチーフは異なるが、同様に中間的文様と考えられる。高坏の文様から青木畑式の新しい段階と考えたい。

**[風張(1)遺跡]** 青森県八戸市

弥生時代前期の住居跡が8軒検出されている。すべて砂沢式期以降の遺物を含むが、遺物数は少数である。7号住居跡では、石囲土器埋設炉＋壁柱穴が検出され、床面や床面に近い2層中から、平行工字文風の文様を有する鉢や無文の大型壷が出土している。馬場野Ⅱ遺跡出土土器群に類似した土器や二枚橋式土器(54)も出土している。甕は肩部が強く張り出し、平坦口縁となる。54は結節沈線や変形工字文B型が施文された二枚橋式期の高坏である。当地域が南北の土器型式の接触地域であることが理解でき、青木畑･山王Ⅲ層式的な土器が在地で生産され、下北地方から二枚橋式がもたらされたのであろう。37号住居跡では、山王Ⅲ層式期の高坏(55)と波状文を有する台付深鉢(2)が出土している。北上川流域と下北地方と系譜を異にする、両器種が器種構成をなすのは、当地域の特徴である。変形工字文と波状工字文と主文様は異なるが、文様の描き順は共通するようで、それぞれの平行沈線部と斜線部を描出後に、反転部を描き文様を完成させている。

**［畑内遺跡］** 青森県三戸郡南郷村

岩手県との県境、新井田川(雪谷川)の右岸の河岸段丘上に位置する。平成４年から継続的な調査が行われており、砂沢式～山王Ⅲ層式期の集落跡や捨て場が検出されている。

第９号住居跡からは、石囲土器埋設炉が検出されている。床面出土の有文深鉢(57)の横型流水工字文、59の浅鉢は変形工字文Ａ型であり古い要素であるが、体部下半に縄文が施されさらにその中位付近に平行沈線が２条施される装飾は、青木畑式期に認められるものである。砂沢式よりやや新しい段階と考えたい。床面出土の58の有文深鉢は、砂沢式期に比べて無文帯が上下に間延びし、文様帯の幅が器高の1/2程度にひろがり、それに伴い最大径も器高の中位付近に下がっている。60の有文深鉢は、長楕円文中に横走沈線が施されており、青木畑式期の鉢にみられる文様構成である。遠賀川系壷が床面から出土した第53号住居跡は、石囲土器埋設炉が２つ確認されている。住居跡内出土土器より、砂沢式またはその直後の可能性が考えられよう。第54号住居跡も石囲土器埋設炉である。畑内遺跡では、弥生時代前期の住居跡では、八戸地方と同様に、石囲土器埋設炉が用いられる。第54号住居出土の縦型流水工字文が施される壷(63)や、頸部の屈曲が大きく、肩部が強く張り出す甕(61･62)は、山王Ⅲ層式的である。縦型流水工字文が施文された壷は、馬場野Ⅱ遺跡(ＬⅥ04住・ＬⅤ11住)に類例がみられる。馬場野Ⅱ遺跡ＬⅥ04住居跡からは、波状工字文間に刺突が充填される台付鉢(報告書中173-4)・肩部に波状文と刺突が施される壷(84)・円板状突起を有する高坏(85･86)・沈線が多条化した変形工字文が施された高坏(83)などが出土しており、山王Ⅲ層式期であろうか。畑内遺跡では捨場と考えられる遺物包含層からも、青木畑式～山王Ⅲ層式期の土器が砂沢式期の土器に混じって出土しており、第54号住居跡出土土器と同一時期の可能性が高い。

**［大日向Ⅱ遺跡(第２次～第５次調査)］** 岩手県九戸郡軽米町

数棟の弥生時代前期の竪穴住居跡からは、青木畑式～山王Ⅲ層式的な要素を有する土器が見られる。床面ではなく埋土中からであるが、SA24住居跡からは遠賀川系壷が、SA29住居跡からは壷用の蓋が出土している。SA32住居跡では青木畑式期に特徴的な、崩れた変形工字文C1型が施された鉢(66･65)が見られ、高坏(64)は沈線細線化と器表面のミガキが見られ、文様構成は変形工字文C1型→C2型の中間的形態と考えられる。集落跡から100ｍ程離れた遺物集中区SX01からは、大型の遠賀川系壷の肩～胴部破片が出土しており、共伴とされる土器の中には、青木畑式または山王Ⅲ層式期の壷が認められる。

**［大日向Ⅱ遺跡(第６次～第８次調査)］** 岩手県九戸郡軽米町

２～５次調査の集落跡から120ｍ以上、遺物集中区SX01から60ｍ以上離れたＦⅣ区を中心に弥生時代前期の土器が出土している。煮沸用の有文深鉢の無文帯が間延びしたもの(69)や肩部から強く内湾するもの(70)、変形工字文の三角形部斜辺の描出工程が底辺と完全に分離し、長い波状文が描かれる鉢(73･74)、三角形を基本としない変形工字文(67)や斜辺と底辺描出の分離(72)や流水状工字文(68)が施される高坏は、砂沢式期よりも後出する要素であろう。67の高坏は横長の楕円文をベースに変形工字文(風)の文様が施されるが、諏訪台Ｃ遺跡の遺構外出土の高坏にも、同様の文様が描かれる。71の深鉢や75の壷は、変形工字文の底角部が丸みを帯び、三角形部が長楕円状に見える。長楕円をベースにその内側に横走沈線が加えられる文様は、青木畑式期の鉢に描かれ、青木畑遺跡や北上市蔵屋敷遺跡で見られる。高坏または鉢の口唇部を押圧で装飾する要素も見られる。これらの土器群は２～５

次調査出土土器群よりは古い様相を示し、、山王Ⅲ層式ほどは細線化しておらず、青木畑式期と考えたい。

**［君成田下野場遺跡］** 岩手県九戸郡軽米町

新井田川の上流瀬月内川の支流郷坂川の右岸、標高約200mの段丘面に立地する。君成田Ⅳ遺跡は、西方200mに位置する。1964年の発掘資料を、佐藤嘉広が資料紹介している(佐藤 1994)。佐藤はこの土器群の編年的位置付けを、弥生Ⅰa期(ほぼ青木畑式期相当か？)としている。横型流水工字文が施される鉢や浅鉢・有段状高坏・平行沈線が数条単位で施される高坏台部・甕用蓋・壷用蓋の存在より、青木畑式期ではあろうが、変形工字文A型(76・77)が若干残ること・甕頸部の外反の度合いがあまり強くないことから青木畑式期でも古い段階と考えたい。

**［馬場野Ⅱ遺跡］** 岩手県九戸郡軽米町

雪谷川と瀬月内川支流の郷坂川に挟まれた標高200～250mの丘陵上に位置する。弥生時代前期の住居跡が11棟検出されており、青木畑式～山王Ⅲ層式段階の土器が多く住居跡より出土している。円板状突起が施された高坏など青木畑式的な土器も多く認められるが、沈線文が細線化したものも多く高坏脚部の波状文も4条のものが存在する。報告によれば磨消縄文が施された高坏は無いようである。高坏の変形工字文の各交点に刺突や彫去や軽い粘土の盛りあがりが認められるが、粘土粒の貼付は見られない。沈線は全体的に細線化、断面形は鋭角的であり、無文部は良く磨かれている。脚部文様は平行沈線だけのものと、波状文の組み合わせのものがみられる。甕類は、平坦口縁や山形突起が付され、頸部で“くの字”状に外傾・外反し、口頸部無文で体部以下に横走・斜行縄文が施される器高35～50cm程度のものと、山形突起が多く付され平行沈線・変形工字文が施される器高30cm以下のものに分類されている。平坦口縁とセットになる甕用蓋は、北上川流域には多く認められ、同じ軽米町内の、明らかに馬場野Ⅱ遺跡に先行する段階の君成田下野場遺跡では、甕用蓋が見られるが、当遺跡では見られない。当遺跡内での青木畑式的な土器群と山王Ⅲ層式的な土器群が同段階のものなのか、型式学的特徴どおりに時期的に分離されるものなのかは今後の検討課題である。遺跡内での遺構の新旧関係や型式学的な分析、北上川流域の土器との比較によるこの土器群の見直しと整理が必要であろう。

**［和当地Ⅰ遺跡］** 岩手県九戸郡軽米町

瀬月内川流域の段丘から続く標高215～222mの緩斜面上に位置し、東方を北流する瀬月内川との比高差は約44mとされる。2軒の弥生時代前期の竪穴住居跡が検出されている。焼失住居であるD12№1住居跡では、弥生時代前期の土器が床面・埋土中・炉内から出土している。住居内埋設土器が1基と石囲土器埋設炉が検出されている。上層に縄文時代晩期の遺物を含む土層が流れ込むが、それを除く弥生時代の土器は時間的にも限定された良好な資料と考えられる。81の変形工字文の要素の欠落(各中点の彫り込みや粘土粒貼付が欠落)や、80の高坏に見られる大型の脚部や平行沈線＋無文部という文様は、明らかに砂沢式よりは後出要素である。口縁部に平行工字文を有する壷の体部上半に縄文が施されることも砂沢式期にはあまり見られない要素である。82は山王Ⅲ層式に多い変形工字文C型中に縄文が施されており、その中に刺突が充填される。住居内埋設土器の蓋として利用されていた彫り込みや粘土粒貼付を伴わない変形工字文が重層する鉢(81)は、畑内遺跡の遺構外出土土器(1997報告書中35)や文様モチーフは異なるが馬場野Ⅱ遺跡LⅤ11住居跡・上牡丹森遺跡(22)・砂沢遺跡(報告書中P161・201)にみられる。畑内遺跡例は第54号住居跡または遺構外出土の青木畑式～山王Ⅲ層式期の

遺構外土器と同時期であると考えられる。弥生時代前期と考えられるＥ14住居跡は、報告によればＤ12住居焼失後に、構築されたものとされる。

【東北地方北部の青木畑式期土器の時間的関係】

表２　東北地方北部砂沢式～山王Ⅲ層式期編年表

| | 津軽地方 | 馬淵川・新井田川流域 |
|---|---|---|
| 山王Ⅲ層・五所式期 | 津山（１住）・砂沢（Ａ10区） | 馬場野Ⅱ・大淵・風張(1)（７住）・弥次郎窪・和当地Ⅰ・畑内(54住) |
| 青木畑式(新)期 | 上牡丹森・砂沢(Ａ10区) | 馬場野Ⅱ・牛ヶ沢(4)（６住）・大日向Ⅱ（ＳＡ32） |
| 青木畑式期 | 砂沢 | 大日向Ⅱ（ＦⅣ区）・畑内（９住） |
| 青木畑式(古)期 | 砂沢・宇田野(2)・諏訪台Ｃ | 君成田下野場・戸沢川代・前坂下(3) |
| 砂沢式・山王Ⅳ上層式期 | 砂沢 | 是川堀田・畑内(99報告－遺構外)・君成田Ⅳ（Ｊ55住） |

量的に少ない土器群など時期の認定が困難であったが、各土器群の比較によって考えた東北地方北部の青木畑式期前後の土器群の時間的関係を表２にまとめた。その結果、青木畑式期に属する土器群が、津軽･馬淵川･新井田川流域地方共に少数である。これは、まず宮城県地方と馬淵川･新井田川流域地方の地域性を把握できず、その為、各土器群の持つ地域性を時期差と誤認した可能性があげられる。馬淵川･新井田川流域を介在させて、東北地方北部と中部の時間的対応関係の理解も期待したが、不完全と言わざるを得ない結果となった。地域内での前後関係はある程度整合性を持つと考えているが、地域間での同時代性にはズレが生じている可能性は否定できない。

## ４　特定細別器種の分布と土器の動き

青木畑式～山王Ⅲ層式に特徴的な細別器種を抜き出し、その分布を概観することで該期の土器の動きと広がりを把握したい。

①平坦口縁で、平行沈線と無文帯で装飾される高坏

坏部が緩やかに内湾し、平坦口縁を有する高坏。脚部の装飾が３条一組の平行沈線のものが多い。青森県砂沢･上牡丹森･牛ヶ沢(4)･田面木平･畑内(三林1997･茅野2000)、岩手県軽米町和当地Ⅰ･馬場野Ⅱ･都南村(現盛岡市)手代森･湯田町本内Ⅱ(山王Ⅲ層式期？)･大船渡市上甲子･長谷堂貝塚･陸前高田市中沢浜貝塚、宮城県一迫町青木畑･気仙沼市田柄貝塚で出土している。青木畑式の分布圏全域に存在し、圏外の津軽地方にも持ち込まれている。

②平坦口縁で、変形工字文が施される高坏

坏部が緩やかに内湾し、平坦口縁を有する。これも平行沈線と無文帯を有する高坏と同様に、青木畑式分布圏全域に存在し、津軽地方の砂沢遺跡や下北半島の脇野沢村瀬野遺跡･大館市諏訪台Ｃ遺跡･秋田市湯ノ沢Ｆ遺跡でもみられる。砂沢遺跡･瀬野遺跡例は金雲母を含み、岩手県域からの搬入品の可能性が高い。砂沢遺跡例の1点(1)は変形工字文Ａ型が施され、青木畑式期でも古手の様相を示す。大日向Ⅱ遺跡のＦⅣ区でも、横型の流水状工字文が施されたもの(68)が出土している。

③有段高坏

生石2式に特徴的なこの形態は、太平洋側の青木畑遺跡などでも見られ、北上川流域及び新井田川・馬淵川流域や三陸地方にも分布する。二枚橋式・山王Ⅲ層式にもこの器形は見られる。生石2式ではこの有段タイプが高坏の主体をなすのに対し、二枚橋式を除く他地域ではそれ以外が主体的である。

青木畑式期のものは青木畑・君成田下野場(78)・八幡(40)、青木畑～山王Ⅲ層式期のものは畑内・馬場野Ⅱ・砂沢・田面木平遺跡などで出土している。古い段階での有段高坏は、後述する丸底鉢と文様帯・文様構成において共通点が多く、東北地方中部日本海側では両者が共存するが生石2遺跡では圧倒的に有段高坏が多い。

④丸底鉢

縄文時代晩期終末～弥生時代前期に、宮城県～福島県北部・山形県・秋田県南部の東北地方中部を中心に分布するものである。青木畑遺跡では、表採資料に含まれているが、装飾からみて青木畑式期と考えられる。東北地方北部では、剣吉荒町・君成田Ⅳ遺跡で出土している。丸底鉢は、口頸部と胴屈曲部の上下２つの文様帯を有し、その中間部には無文帯が存在する。この文様帯の構成は、上記の有段高坏と共通し、またそれぞれの文様帯の文様も類似する。

⑤上部で膨らみを有する筒形の土器(上膨筒形土器)

青木畑式・生石2式を構成し、東北地方中部を中心に、丸底鉢よりは狭いが同様の分布をみせる。馬淵川・新井田川流域や三陸地方では存在しないようである。山形県生石2・上竹野・蟹沢・地蔵池・観音岩、秋田県上熊ノ沢・梨ノ木塚・湯ノ沢A、宮城県青木畑・鱸沼、福島県藤堂塚遺などで見られる。系統不明の土器で、突如として現れるようである。

【まとめ】

①と②は青木畑式の高坏の移動範囲を、④と⑤は東北地方中部の青木畑式期の地域圏を示していると考えられる。金雲母を多く含む土器に関しては、須藤隆や利部修によって注意され、花崗岩の崩落土を産する北上山地地方からの搬入品であることが指摘されていた。金雲母を含み、橙色系の色調を帯びるものは岩手県域からの搬入品と考えられそうであるが、このような土器は、八戸地方だけでなく、津軽下北地方・秋田県北部にももたらされている。山王Ⅲ層式期に盛んに混和されるようであるが、その前段階の青木畑式期にも、奥羽山脈を超えていることは確実であり、また諏訪台C遺跡では砂沢式期の可能性もある。岩手県域から、津軽・秋田北部地方に持ち込まれた土器は、平行沈線と無文帯又は流水工字文・変形工字文A型が施された高坏と縄文時代晩期後葉からの伝統的な壷の２器種に限られる。また反対に、断面半円形の太い沈線と器表面の光沢をもたらす丁寧なミガキを特徴とする、砂沢式の鉢類は津軽地方以外へもたらされている。八戸・岩手北部地方の砂沢式とされる土器には鉢・有文深鉢・台付鉢・壷等がある。これらは八戸地方での製作であろうが、特徴的に砂沢式と呼べそうな土器は、在地の土器中に少量混じる程度である。砂沢式に特徴的な無文帯を有する煮沸用の有文深鉢は馬淵川・新井田川流域でも定着している。

青木畑式が土器型式としてまとまりをもって、分布するのは仙台平野・三陸沿岸部・北上川流域・馬淵川・新井田川流域であろう。馬淵川・新井田川流域は、砂沢式・二枚橋式との接触域であり、北の土器型式の要素を多分に有するが、北上川流域との共通性が高いことも事実である。北上川流域は、遠賀川系土器の受容が、日本海沿岸部・津軽地方・馬淵川・新井田川中下流域より一段階遅れるとされている。しかし、最近では馬淵川中流域の二戸市足沢遺跡で、大洞A'式に伴った「板付Ⅱa式」の壷肩部破片の出土が報告されている(須藤1999)。青木畑式の前段階からの、奥羽山脈の東西の交流の結果が、金雲母を含む土器や砂沢式土器の相互移動として確認される。当初、東北地方北部の青木畑式期の、土器群の大まかな前後関係と土器の動きを把握したいと考えていたが、量的に少ない土器群での時間

軸の整理は、時期尚早の感はある。自分なりに設定した段階に各土器群をあてはめたのであるが、青木畑式併行の東北北部の土器群が僅かなものとなった。北上川流域の山王Ⅳ上層式から山王Ⅲ層式までの細かな変遷を私自身理解できていなかったことと、特に津軽地方に関しては青木畑式の分布圏外であり、馬淵川･新井田川流域を介在させなくてはならず、その為直接的に時間的位置が確定できなかった。地域内での緻密な編年の確立後に、他地域との比較もより意味のあるものとなろう。変革期の様相の追及には課題は多く、砂沢遺跡･馬場野Ⅱ遺跡･生石２遺跡など豊富な資料の再検討、該期の秋田県中南部内陸と山形県･岩手県の関係、恵山式土器と共通点を有する二枚橋式土器の存続期間、五所式の型式内容と存続期間、在地土器の細かな編年による遠賀川系土器の時期決定、瀬野遺跡で出土した遠賀川系壷の評価、渡島半島をはじめとする北海道との関係、列島内外での東北地方の該期社会の評価等があげられよう。埋蔵文化財の調査・保護に携わるものとして、今後も該期の究明にあたり、改めて稿を起こしたいと考えている。

本稿の作成にあたり、多くの方々にご協力・ご指導をいただきました。特に文献の入手にあたって、畠山昇氏、仙庭伸久氏、矢島敬之氏、木村高氏、藤井誠二氏、菅原哲文氏、茅野嘉雄氏、佐藤智生氏にはご配慮いただきました。感謝申し上げます。

『参考文献』

安部　　実　1986　『生石２遺跡発掘調査報告書（２）』　山形県埋蔵文化調査報告書第99集
伊東　信雄・須藤　隆 1982 『瀬野遺跡』
岩見　和彦　1991　「東日本における稲作の受容－宮城県－」第１回東日本埋蔵文化財研究会
小笠原善範　1992　『八幡遺跡』　八戸市埋蔵文化財調査報告書第47集
利部　　修　1990　「諏訪台Ｃ遺跡のⅠ･Ⅱ類土器群－土器の観察を通して－」秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第５号
葛西　　励　1991　『戸沢川代遺跡発掘調査報告書』青森県川内町教育委員会
加藤　道男　1982　『青木畑遺跡』　宮城県文化財調査報告書第85集
金子　昭彦　1999　『長谷堂貝塚発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第296集
木村鐵次郎　1989　『西津軽郡鰺ヶ沢町大曲遺跡発掘調査報告』青森県立郷土館調査研究年報　第13号
工藤利幸他　1986　『馬場野Ⅱ遺跡』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第99集
小林　圭一　1997　『北柳１・２遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第48集
小林　　克　1991　「東日本における稲作の受容－秋田県－」第１回東日本埋蔵文化財研究会
齋藤邦夫他　1995　『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書－第2次～第5次調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集
酒井　宗孝　1986　『駒板遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 98集
笹森　一朗　1997　『津山遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第221集
佐藤　信行　1980・81　「東北南部における縄文晩期とその直後の土器文化(上)・(下)」『考古風土記』5・6
佐藤　嘉広　1989　「東北地方北部における弥生文化受容期の様相－北上川中流域の土器群の分析を中心に－」『岩手県立博物館研究報告第7号』
佐藤　嘉広　1991　「東日本における稲作の受容－岩手県－」第1回東日本埋蔵文化財研究会
佐藤　嘉広　1992　「東北地方における遠賀川系土器の受容と製作」　『東北文化論のための先史学歴史学論集』
佐藤　嘉広　1994　「岩手県二戸市金田一川遺跡出土の遠賀川系土器について」『岩手考古学』6
須藤　　隆　1983　「東北地方の初期弥生土器」『考古学雑誌』68－3
須藤　　隆　1990　「東北地方における弥生文化」『考古学古代史論攷』伊東信雄先生追悼論文集
須藤　　隆　1997　「東北地方における弥生文化成立過程の研究」　『歴史』第89号
須藤　　隆　1998　『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究』
須藤　　隆・太田　昭夫　1999　「第三章　弥生時代」『仙台市史　通史編１　原始』
高瀬　克範　1999　「東北弥生社会の住居と居住単位」　『古代文化』55
高木　　晃　1998　『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書 －第6次～第8次調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第273集
三林　健一　1997　『畑内遺跡Ⅳ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第211集
永嶋　　豊　1999　『畑内遺跡Ⅴ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第262集
茅野　嘉雄　2000　『畑内遺跡Ⅵ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第276集

中川重紀他 1996 『和当地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第259集
野村 信生 1997 『宇田野(2)・(3)、草薙(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第217集
秦 光次郎 1998 『見立山(1)遺跡・弥次郎窪遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第238集
八戸市教育委員会 1988 『田面木平遺跡(1)』
八戸市教育委員会 1990 『風張(1)遺跡Ⅱ』
福田友之他 1986 『上牡丹森』 大鰐町文化財調査報告書第1集
松本 建速 1998 「大洞A'式土器を作った人々と砂沢式土器を作った人々」 『北方の考古学』野村崇先生還暦記念論集
村木 淳 1996 『牛ヶ沢(4)遺跡Ⅰ』 八戸市教育委員会
村越 潔 1965 「東北北部の縄文式に後続する土器」 『弘前大学教育学部紀要』第14号
矢島 敬之・松本 建速 1988・1990 『砂沢遺跡発掘調査報告書－本文編・図版編－』

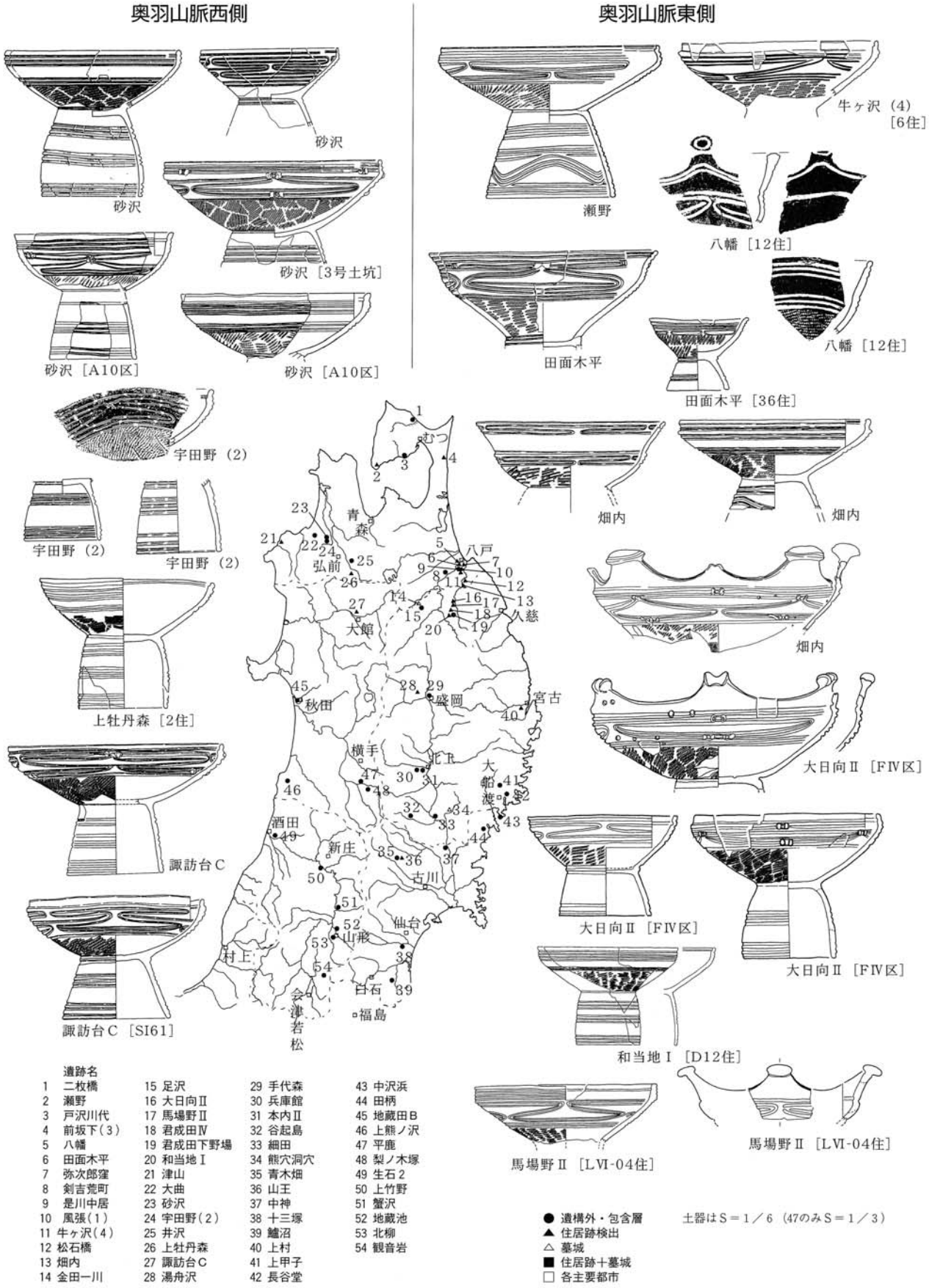



図1　東北地方北部　青木畑式高杯

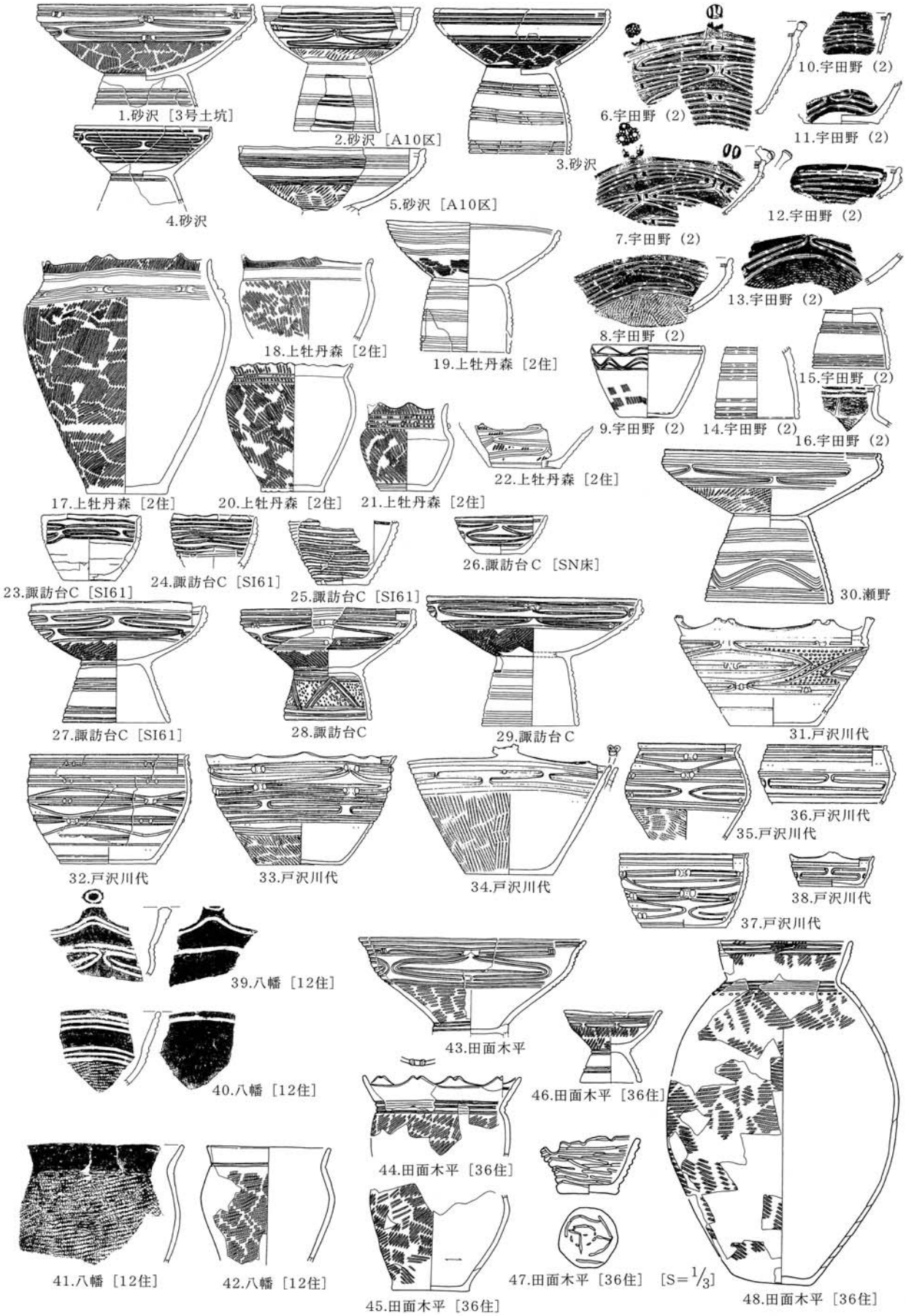



図2　津軽・下北・八戸地方（馬淵・新井田川流域）の青木畑式期土器

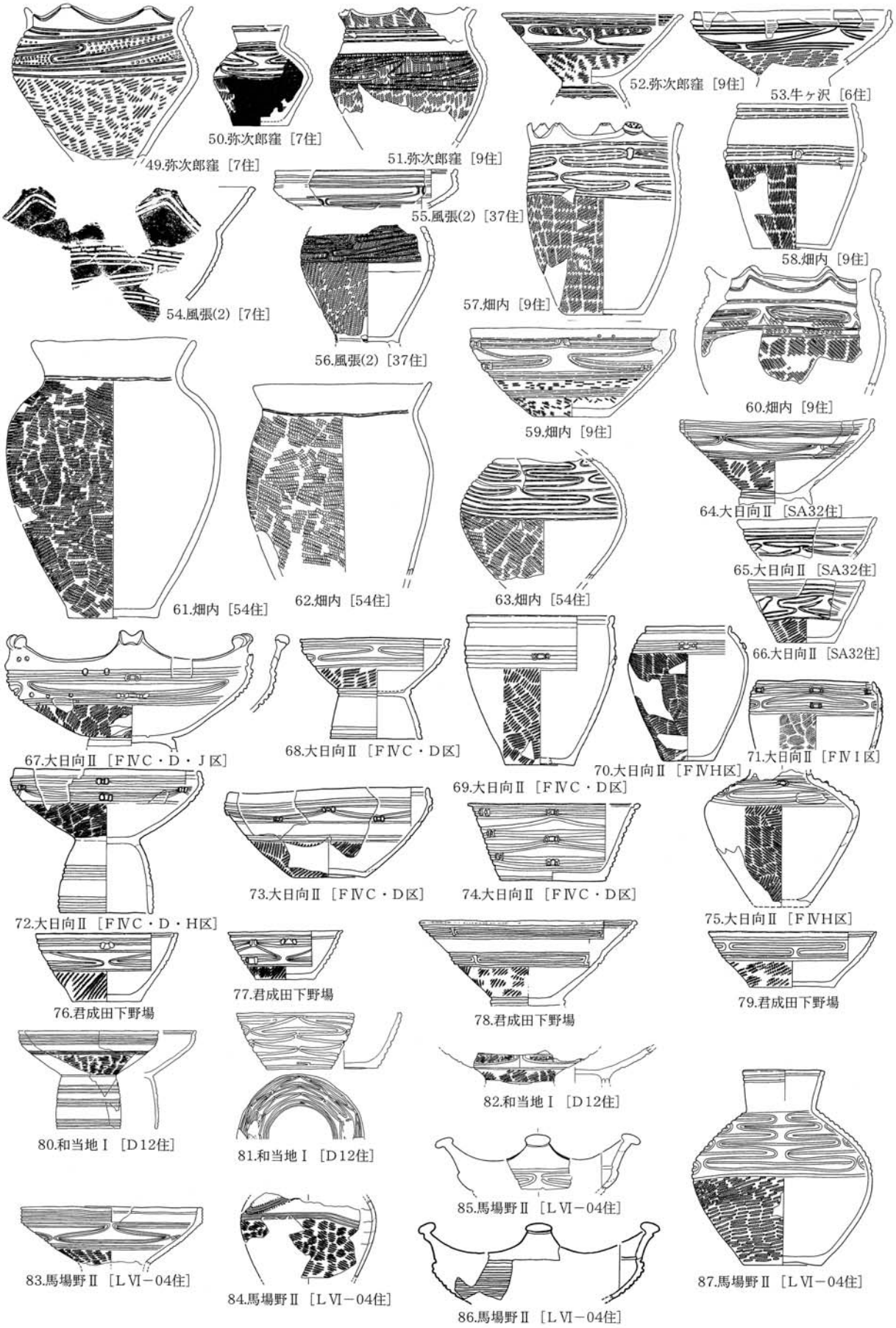



図3　八戸地方（馬淵・新井田川流域）の青木畑式期土器

# 大光寺城跡の歴史景観復元について

齋藤　正

## １　はじめに

開発等により失われた過去の景観を復元する方法には、文献史料を利用する方法、発掘調査で検出された遺構からの検討がある。しかし、すべての地域に文献史料が残っているわけではく、むしろ残っている方が少ないことがほとんどである。発掘調査による景観復元も、面的に限りがあり完全であるとはいえないのが現状である。これらの方法の他に地籍図、地形図、絵図を使って景観を復元する歴史地理学的方法がある。

大光寺城は、１４世紀から津軽地方の中世史に姿を現し、１６世紀には石川城（弘前市）と共に南部氏の津軽地方支配の拠点であった城跡である。平賀町教育委員会による発掘調査により、城跡が機能していた時期、城内での生活様式など解明されている状況である。しかし、景観については、ほとんど明らかにされていない状態である。

今回は、絵図、地籍図等から戦国時代に南部氏の津軽地方支配の一端を担った大光寺城の景観について紹介していく事にする。

## ２　位　置（図１）

大光寺城は、青森県南津軽郡平賀町大光寺字三村井に所在し、平賀町の中心部から北西１㎞に位置する。中世には、東方に浪岡方面に通じる乳井通、南西に大鰐・碇ヶ関を経由して鹿角方面に通じる羽州街道と交通の要衝に立地していた。城跡は標高約３８ｍの微高地にあり周囲の水田とは比高差約２～３メートルの平城である。西側を流れる六羽川を天然の堀にしている。

城跡の所在する大光寺地区は、宅地造成や道路建設といった開発により景観が急激に変貌している地区であり、城跡は宅地化が進み、旧状を知ることは困難になりつつある。

## ３　歴　史

元弘４年（１３３４）正月１０日沙弥道為軍忠状（註１）に「大光寺楯」と記載されていることに始まる。暦応２年（１３３９）５月２０日曾我貞光申状（註２）に南部氏、小笠原氏、倉光氏の攻撃により「大光寺外楯打落之処」の記述がみられる。１４世紀前半には大光寺に城館が存在したと思われる。なお、曾我貞光は鎌倉時代に津軽入りした曾我氏の子孫であり、その本拠地は岩楯・大光寺であった。その後、１４世紀後半に曾我氏は南部氏により攻め滅ぼされる。

１６世紀に奥州藤原氏滅亡後、奥州総奉行となった葛西三郎清重の子孫と言われる葛西頼清が大光寺城主なる。文亀２年（１５０２）（註３）と天文２年（１５３３）（註４）に南部氏に討たれた記述がみられる。年代に差があるが大光寺城が南部氏の攻撃を受け、支配下に置かれたことは確かであろう。

天文１５年（１５４６）に北畠氏により編纂された『津軽郡中名字』（註５）には

「(略) 鼻和郡三千八百町ハ大浦ノ屋形南部信州源盛信ト申也、平賀郡二千八百町ハ大光寺南部遠州源政行ト申也、田舎郡二千八百町奥法郡二千余町沼深保内一千貫ハ伊勢国司浪岡御所源具永卿也(略)」とある。

記述からは鼻和郡大浦城に大浦盛信、田舎郡浪岡御所（浪岡城）に北畠具永、平賀郡大光寺城に南

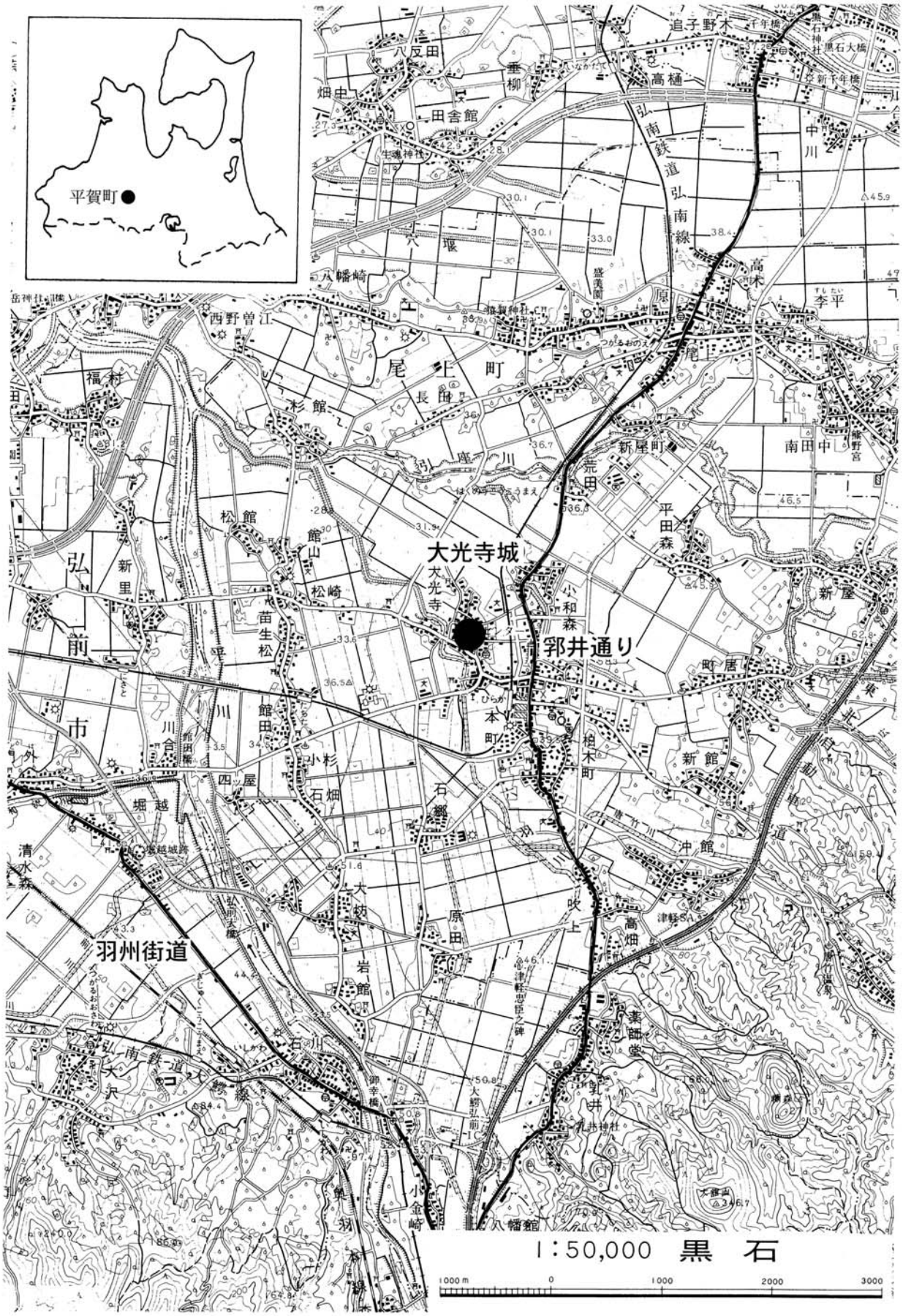



図1　大光寺城位置図

部政行が居城していたことを示して、津軽地方が３郡に分かれ支配されていたことが窺える。

政行が大光寺城に居城した後は、南部氏一族、或いは家老とも言われる滝本播磨守重行が城主となる。天正３年と４年（１５７５～１５７６）の二度にわたり大浦為信に攻められて大光寺城は落城し、滝本播磨守重行は南部に逃れた（註６）。

落城した大光寺城は、天正10年頃、南部氏に奪われた模様である（註７）が再び大浦氏の支配下となり慶長４年（１５９９）為信の娘婿、津軽左馬之助建広が城主となる（註８）が、慶長１５年（１６１０）弘前城築城に伴い、取り壊され廃城となる（註９）。

## ４　大光寺城の景観復元

大光寺城の景観復元には、地形、地名と次の諸資料から合わせて行った。

①地籍図

②弘前広域都市計画図（平賀町）平成９年修正

③天和４年大光寺村書上絵図・本町村書上絵図（註10）

④津軽諸城の研究（註11）

このうち、①の地籍図については明治時代の地租改正法に基づく地籍図を入手出来なかったために近年の地籍図（註12）を使用せざるを得なかったことを断っておきたい。これから水田等を省いて作成したものが図３である。③の天和の絵図は近世の絵図ではあるが村名、道路、用水堰、寺社等が記載されており、文献史料の乏しい県内の中世を知るうえで大きな手がかりとなる。

### （１）城館の構造

大光寺城跡は『津軽諸城の研究』において北郭・二ノ郭（主郭）・一ノ郭・袖郭の４郭で構成されていたとされている。しかし、沼館氏が踏査を行った終戦当時ですら、郭内には民家が建ち並び、城跡を巡る堀は殆ど埋められ、一ノ郭と二ノ郭の間、二ノ郭と北郭の間の堀跡も埋め立られ道路となるなど遺構等はほとんど確認出来ない状態にあった。現在、当時より開発が進んでいることから、４郭及び堀等の遺構を知ることはさらに困難な状況である。

しかし、図２から城跡を詳細に観察すると、一ノ郭と二ノ郭の間の道路から城南、城西を通り二ノ郭と北郭の間の道路にかけて、畑地や果樹園となり、住宅地より約２メートルから４メートル低く巡っている所が確認できる。図３で見ると地割が異なっているのが読みとれ、城跡を巡る堀跡と考えられる。第３図では、一ノ郭と二ノ郭の間の道路北側にも異なった地割が認めれることから堀跡と考えられる。堀跡と考えられるこの地割は途中で途切れるが、さらに延びて先ほどの地割と結びつき城跡を四周する堀の地割を呈するものと思われる。

一ノ郭と二ノ郭の間、二ノ郭と北郭の間の堀跡は道路の下にあり、図３からも明らかではない。しかし、発掘調査において二ノ郭の南北にある２つの道路付近から堀跡が検出されたことから道路が堀跡であったことが確認されている（註13）。

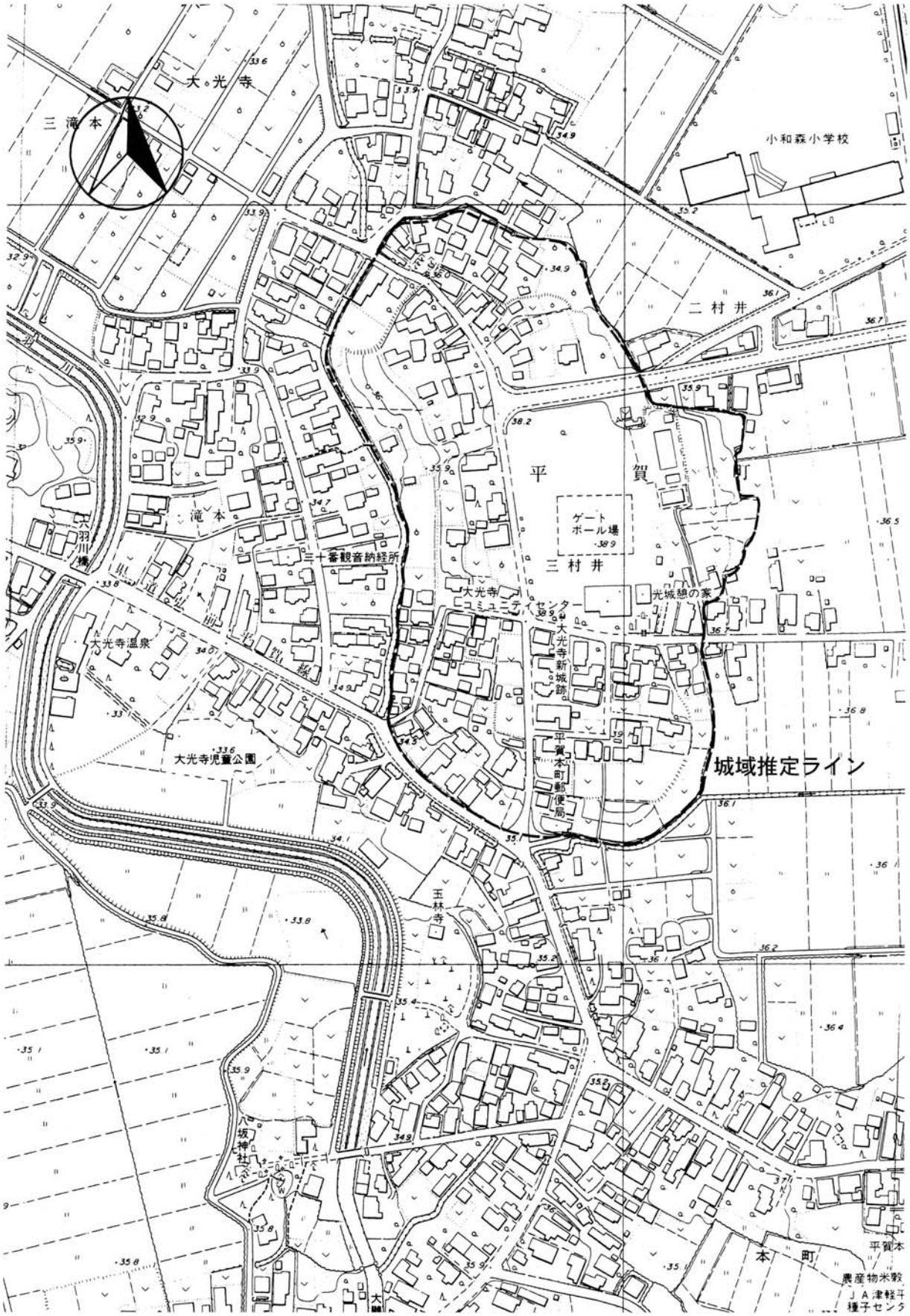



図２　大光寺城の推定範囲

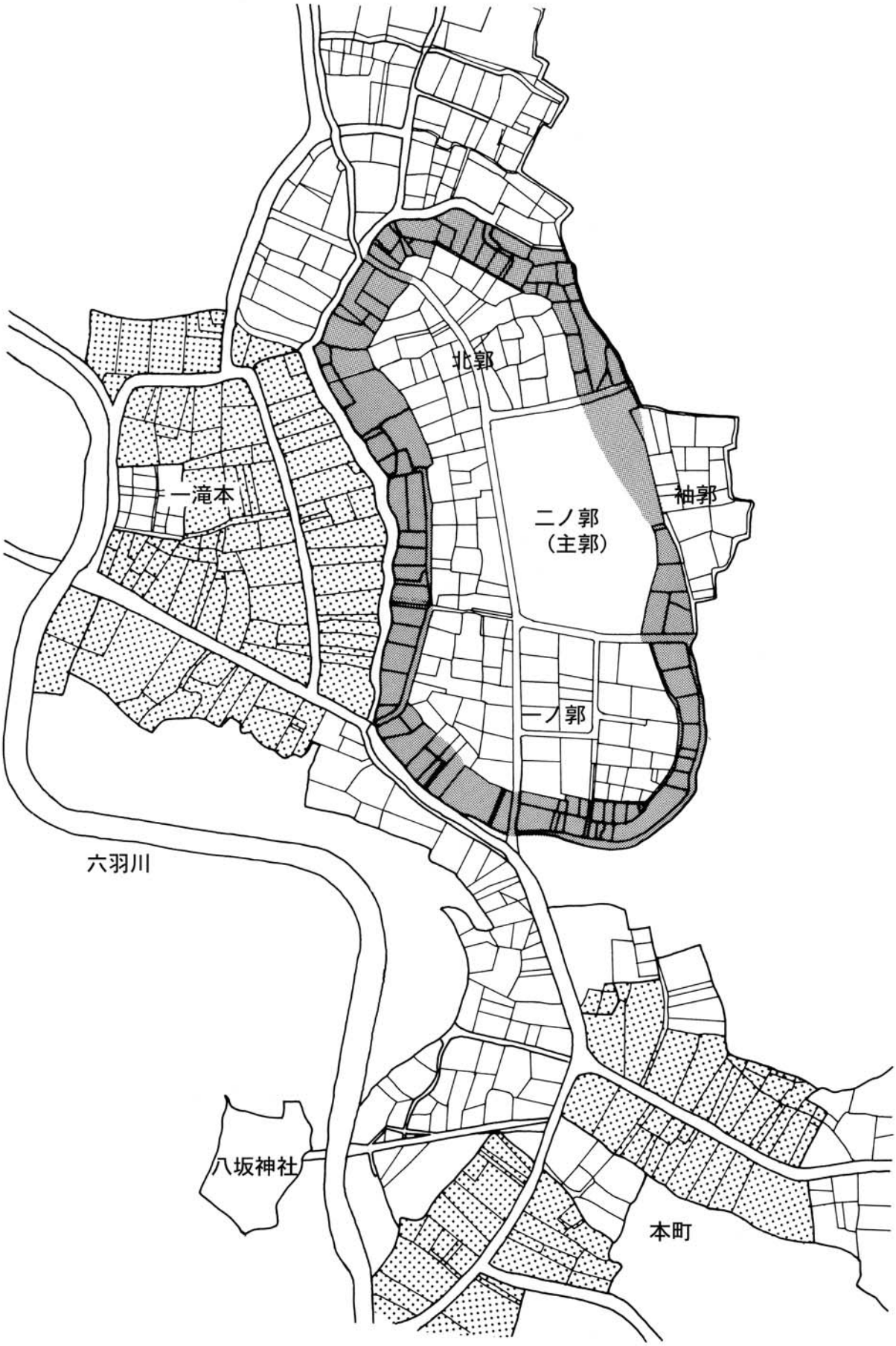
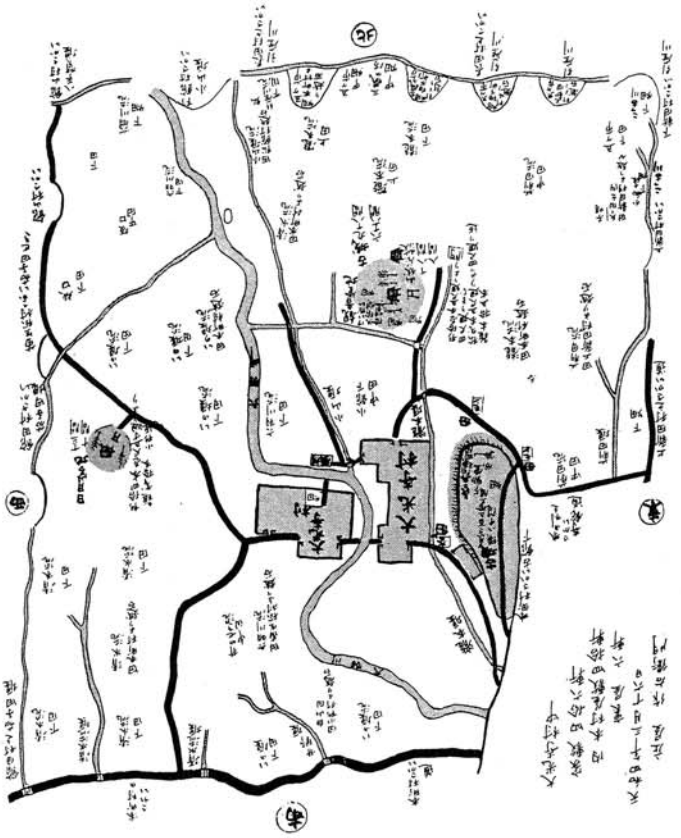
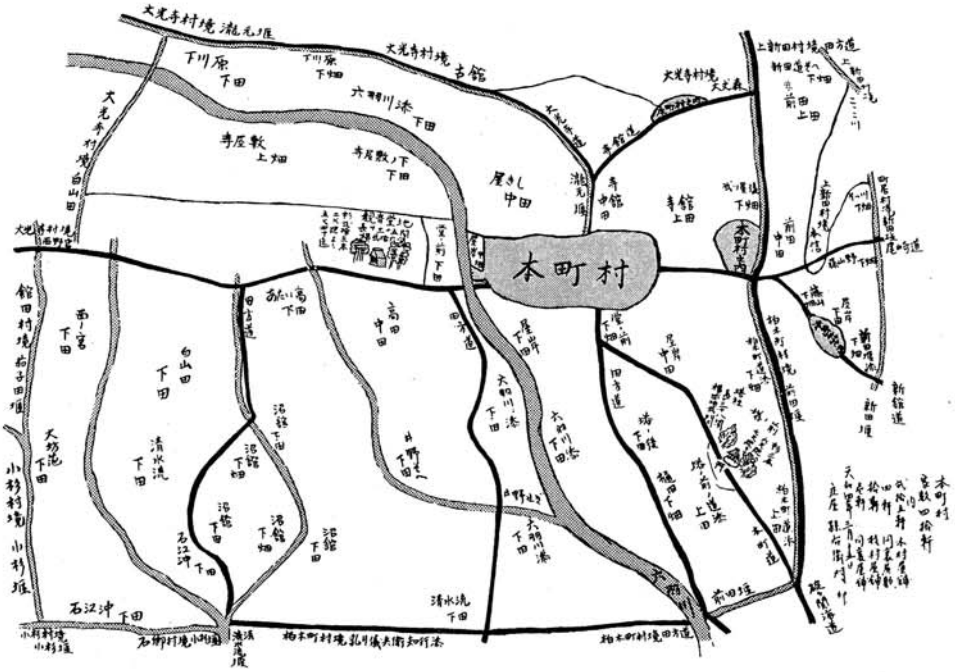



図3　大光寺城城下町推定復元図



大光寺村書上絵図




本町村書上絵図

図４　天和４年の絵図（平賀町誌上巻より転載）

（２）大光寺城周辺の景観

大光寺城は『津軽郡中名字』にあるように南部氏の平賀郡支配の拠点であった。従って、町場（城下町）が存在したと考えられる。『津軽諸城の研究』にも「侍屋敷は城西で、（略）本町は城下町である。」と記されているので、復元してみることにする。

城跡の西側には用水堰を隔て「滝本」と思われる「一滝本」の小字名がある。図３から分かるように「一滝本」の中を一巡りする道沿いには、大小の「短冊型地割」がびっしり見られる。「短冊型地割」は中世の町場に見られることから、中世からのものだったとみて間違いないと思われる。滝本は大浦為信に攻められた際の城主滝本氏に由来していると考えられ、一族・直属家臣団階級の人間が生活していた町場と思われる。

「本町」の小字名は城跡の南側にある。滝本から続く道が南東・南西の二手に分かれた道沿いに「短冊型地割」が２カ所見られ、町場が存在したと考えて間違いないと思う。

天和４年（１６８４）の大光寺村書上絵図（図４）には「古城」（大光寺城跡）の西側に「大光寺村」（一滝本）の集落があり、道が集落内を通って北・南東・西の３方向に延びている状況が描かれている。本町村書上絵図（図４）からは「本町村」（本町）の集落があり、大光寺道を含めて４方向から道が通っているのが見て取れる。２つの絵図に描かれた集落や道の様子は図３に記載されている短冊型地割・道とほとんど変わらずに一致する。大光寺城落城後、津軽氏の支配により整備が行われた可能性もあるが、基本的には、津軽氏支配以前に成立していたと考えて間違いないであろう。

以上のように、大光寺城は、城の西側（一滝本）には城・直属家臣団居住区、南側（本町）に町場を持ち、城・直属家臣団居住区と町場が並立する（註14）戦国期城下町の姿を持っていたことが考えられる。

## ５　まとめ

南部氏の津軽支配の拠点であった大光寺城は、「短冊型地割」の町並みを持った戦国城下町であったことが窺える。『津軽郡中名字』に記述されているように平賀郡の拠点としての位置付けは可能であると推察される。

しかし、景観の復元というには、明治時代の地籍図を使用していない点などから不十分であった感じは否めない。今後は平賀町教育委員会による発掘調査や地籍図による町場の範囲の確認、絵図から古道の検討、寺社配置などを厳密に行い、広く解明していくことが今後の課題となるであろう。

筆者の勉強不足のため、多くの誤解等が見られるものと思う。先学諸氏のご教示を賜りたいと思う次第である。

なお、本稿は平成９年度國學院大學に提出した卒業論文の一部を修正したものである。記すにあたり、千々和　到先生、浪岡町史編纂室の工藤清泰氏には様々な形でご指導いただいた。また、平賀町郷土資料館の小笠原　豊氏、渡部　学氏には資料提供や現地踏査で多大なお力添えをいただいた。末筆ながら厚くお礼申し上げる次第です。

註

（1）弘前市　1995「南部家文書」『新編弘前市史資料編1（古代・中世編）』630（文書番号）
（2）弘前市　1995「南部家文書」『新編弘前市史資料編1（古代・中世編）』680
（3）弘前市　1995「館越日記」『新編弘前市史資料編1（古代・中世編）』875他
（4）弘前市　1995「前代歴譜」『新編弘前市史資料編1（古代・中世編）』898他
（5）弘前市　1995「津軽郡中名字」『新編弘前市史資料編1（古代・中世編）』915
（6）弘前市　1995「永禄日記」『新編弘前市史資料編1（古代・中世編）』1001他
（7）弘前市　1995「聞老遺事」『新編弘前市史資料編1（古代・中世編）』1042
（8）弘前市　1996「津軽一統志」『新編弘前市史資料編2（近世編1）』73他
（9）弘前市　1996「津軽一統志」『新編弘前市史資料編2（近世編1）』283他
(10) 平賀町　1985『平賀町誌』上巻
(11) 沼館愛三　1977　『津軽諸城の研究』
(12) 地籍図には、昭和63年に城跡の北東に移転した小和森小学校の地割が記載されていないことから、この地籍図は昭和63年以前に作成されたと推測される。
(13) 平賀町教育委員会　1989『大光寺新城跡遺跡発掘調査　第1次調査』
　　1990『大光寺新城跡遺跡発掘調査　第2次調査』
(14) 市村高男　1985「中世後期における都市と権力」『歴史学研究』547号

研　究　紀　要　第５号
2000年３月15日　印刷
2000年３月15日　発行
編集・発行　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038－0042　青森市新城字天田内152－15
電　話　017－788－5701
ＦＡＸ　017－788－5702
印　　刷　長尾印刷株式会社
〒030－0931　青森市平新田字森越17－１
電話　017－726－7121

# BULLETIN

## OF
## AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL ARTIFACTS RESEARCH CENTER

## No.5

---

CONTENTS


Prehistoric use of natural asphalt in northern Honshu island — *FUKUDA Tomoyuki*

Entrance of pit house during the Jomon priod in Aomori prefecture — *NARITA Sigehiko*

Pottery used as "lamp" in the Jomon period — *SHIRATORI Fumio*

Grind stones from the Hatanai site in Nango village — *CHINO Yoshio*

Aokibata type pottery in northern Tohoku district — *NAGASHIMA Yutaka*

Historical surroundings of the Daikoji castle — *SAITO Tadasi*


---


March 2000

AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL ARTIFACTS RESEARCH CENTER